

九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学

生涯学習研究センター紀要

第21号

目次

■総説■

- アスレティックトレーナーのワーク・ライフ・バランス 篠原 さやか 1
 篠原 純司

■原著論文■

- 生涯学習の先駆者たち—その3— ブストス・ナサリオ 7
 —中江藤樹と伊藤仁斎—
- 『伊勢物語』49段と『源氏物語』総角673番歌 阿部 誠文 17
- 「学び続ける」社会の実現を目指す生涯学習研究センター 古市 勝也 27
 — 地域コミュニティの核になって —
 ブストス・ナサリオ
- 市民講座「柳田民俗学の町おこし」の覚書・講義ノート稿 牛島 史彦 37
- 生涯学習としての野上弥生子の読書 荻原 桂子 47
- 三次元弾道軌跡シミュレーションソフトを活用したコーチングに関する 永田 聡典 55
 実践的研究
 長嶺 健
 川面 剛
 宇野 美津夫
- バスケットボールにおける3ポイントショット時でのワンハンドショット 川面 剛 65
 とツーハンドショットのリバウンド落下位置の違いについて
 八板 昭仁
 長嶺 健
 永田 聡典
 大山 史
 青柳 領

2016年

アスレティックトレーナーのワーク・ライフ・バランス

篠原 さやか
九州女子大学共通教育機構

篠原 純司
九州共立大学スポーツ学部

Work-life-balance for Athletic Trainers

Sayaka SHINOHARA
Kyushu Women's University

Junji SHINOHARA
Kyushu Kyoritsu University

ABSTRACT

Job characteristics of Athletic Trainers, such as long work hours, inflexible work schedules, and frequent travels tend to make the “balance” between work and life domains difficult. However, the issue of work-life-balance for Athletic Trainers has not been studied in Japan. Drawing on research on work-life-balance for Athletic Trainers in the U.S., this paper reviews conflict between work and family domains that Athletic Trainers often experience.

Key word: work-life-balance, work-family-conflict, Athletic Trainers

1. 序論

近年、わが国では伝統的な長時間労働の文化の変革や、仕事以外の生活領域の充実にも関心が高まり、「ワーク・ライフ・バランス（仕事と仕事以外の生活の調和）」という言葉も浸透してきたといえる。ワーク・ライフ・バランスは個人の知覚であるが、「バランス」のとりやすさは、一般的に職務の特徴によって大きく異なる。本稿では、長時間労働や不規則な労働時間に加え、日常的な職務地の移動がともなうことの多いアスレティックトレーナー（以下、AT）という職種におけるワーク・ライフ・バランスについて考察する。

ATは、米国において1881年にJames Robinsonがハーバード大学に雇用されたことが始まりとされている¹⁾。現在、米国にてATの職は確立されており、医師、理学療法士などの専門職と連携し、高校、大学、プロの競技者の健康管理や、近年では広い意味で身体活動を行う人々の健康管理も実施する専門職として認知されている¹⁾。ATの資格認定は、BOC（Board of Certification）により管理・運営されており、「The BOC 2013 Annual Report」²⁾によると、2012年度には約45,000名のBOC公認ATが登録されている。また、BOC公認ATは1990年よりアメリカ医学協会（American Medical Association）にて準医療従事者（Allied Health Profession）として認定されている¹⁾。

わが国において、ATは、公益財団法人日本体育協会（以下、日体協）により「機能解剖や運動学に関する専門的な知識を有し、スポーツ活動現場において、スポーツドクター及びコーチとの緊密な連携・協力のもとに、競技者の健康管理、スポーツ障害・外傷の予防、応急処置、アスレティックリハビリテーション及び体力トレーニング、コンディショニングなどにあたる者」³⁾と定義されており、1994年より日体協公認ATの養成事業が開始されている⁴⁾。2014年度には2,324名の日体協公認ATが登録されている⁵⁾。日体協公認ATの所属先としては、プロや企業のスポーツチーム、大学のスポーツチーム、病院、診療所、スポーツジム、その他企業など多岐にわたるが、所属先や勤務形態によって、働き方が大きく異なる。

ATのワーク・ライフ・バランスについては、米国を中心に研究がなされているものの、わが国ではこの領域に関する研究はきわめて限定的である。そこで、女性の活躍促進が求められるとともに、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催や健康寿命の増進に向けて、一層の活躍が期待されるわが国のATのワーク・ライフ・バランスについて考察する。

2. ワーク・ライフ・バランス（Work-Life-Balance, WLB）

はじめに、ワーク・ライフ・バランスの概念について述べる。ワーク・ライフ・バランスは「仕事と仕事以外の生活の調和」と表現されることがあるが、仕事と仕事以外の生活のバランスがとれているか、とれていないか、というのは個人の知覚であり、その判断基準は一律ではない。例えば、恒常的な長時間労働をしている場合でも、ワーク・ライフ・バランスが「とれていない」とは認識しない個人もいる。反対に、日常的に残業等がなく、定時に退社することができる場合や、休暇が希望通りに取得できる場合でも、必ずしもワーク・ライフ・バランスが「とれている」と感じるとは限らない。このように、ワーク・ライフ・バランスの認識は、その個人が仕事や仕事以外の生活にどのような意識を持っているかによって異なる。すなわち、まったく同じ長さの時間を職場と職場外で過ごしている2人の労働者がいたとしても、仕事と仕事以外の生活のバランスに関する両者の認識は異なる可能性があるということである。

例えば、仕事やその関連する事からによって、仕事以外の生活領域における事から（家事、育児、介護など）が犠牲になっていると感じる場合、本人はワーク・ライフ・バランスが「とれていない」

と認識する可能性がある。反対に、仕事以外の生活領域における事がらによって、仕事が犠牲になっていると感じる場合、やはり本人はワーク・ライフ・バランスが「とれていない」と認識する可能性がある。つまり、ワーク・ライフ・バランスを捉えようとする際には、職場内外で過ごす時間だけではなく、仕事と仕事以外の生活のあり方全体に満足できているかということが重要であるといえる。さらに、労働者本人が仕事と生活のバランスがとれていると感じることに加えて、その家族や近い人がどのように感じているかという点も重要であるといえる。

内閣府が2007年に策定したワーク・ライフ・バランス憲章⁶⁾によると、『仕事と生活の調和が実現した社会とは、国民一人ひとりが、やりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会』である。

「仕事と生活（家庭）の両立」という言葉は、主に既婚および子どもをもつ女性を念頭に置いて使われることが多いが、この憲章からわかるように、ワーク・ライフ・バランスとは、年齢、性別、配偶者の有無、子どもの有無などに関わらず、働くすべての人に関連する概念であるといえる。

3. ワーク・ファミリー・コンフリクト (Work-Family-Conflict, WFC)

ワーク・ライフ・バランスの認識に関連する概念として、ワーク・ファミリー・コンフリクトがある。これは、「人が複数の社会的な役割を担うことによって、時間やエネルギー等の限られた資源の枯渇につながり、役割間の葛藤を生じさせる」⁷⁾ という役割間葛藤の考えに基づく。ある集団や組織の一員であることにより受ける役割要請が、別の集団や組織に所属していることにより受ける役割要請と両立しない場合に、葛藤が経験される⁸⁾。すなわち、「ワーク・ファミリー・コンフリクト」とは、仕事上の役割と家庭内の役割の間で起こる葛藤であり、仕事上で求められる役割と、家庭で求められる役割が両立しない場合に、人は葛藤を経験する。

ワーク・ファミリー・コンフリクトには、仕事上で求められる役割が大きすぎるなどによって、家庭での役割を十分に果たすことができない場合に生じるもの (Work to Family Conflict) と、反対に、家庭内で求められる役割が大きすぎるなどによって、仕事上での役割を十分に果たすことができない場合に生じるもの (Family to Work Conflict) の両方が存在すると考えられているが⁹⁾、ここでは、前者に着目する。ワーク・ファミリー・コンフリクトの例としては、「週末に仕事があつて、子どもの運動会を見に行くことができない」、「仕事が忙しく、親の介護が十分にできない」などの状況が挙げられる。

先行研究によると、人がワーク・ファミリー・コンフリクトを経験することは、心身の健康、生活に対する満足度、家族関係などに影響するといわれる¹⁰⁻¹²⁾。

4. ATのワーク・ライフ・バランス、ワーク・ファミリー・コンフリクト

ATのワーク・ライフ・バランスについては、米国を中心に一定量の研究が蓄積されており、そのほとんどが全米大学体育協会 (National Collegiate Athletic Association, NCAA) の1部リーグで働くATに関するものである。例えば、Mazerolleら¹³⁾ は、NCAAの1部リーグの男性および女性ATを対象に量的調査と質的調査を実施し、ワーク・ファミリー・コンフリクトの主な要因として、いくつかの仕事の特徴を明らかにしている。はじめに、労働時間が長く、労働時間に関する柔軟性が低いこと、労働時間が不規則なことがコンフリクトを引き起こす大きな要因であることを明らかにした。このような労働時間の特徴に加えて、人員不足等によって仕事の負荷が高いことや、試合や遠征によ

る移動（出張）が頻繁にあることもワーク・ファミリー・コンフリクトを引き起こす要因であることが示された¹³⁾。さらに、性別、婚姻状態、子どもの年齢に関わらず、多くのATがワーク・ファミリー・コンフリクトを経験していることが明らかになった¹³⁾。NCAAが2006年に同協会の会員を対象に実施したワーク・ライフ・バランスに関する大規模調査によると、4,000人以上の回答者のうち、52%が週あたり55時間以上の労働をしていた¹⁴⁾。ATの仕事は、突発的な選手の怪我、リハビリ、練習や試合の状況等によって日々の労働時間が変化するため、事前に予測することが困難な場合も多く、AT本人が労働時間を決めることは非常に難しい。また、夜間や週末に試合が行われることが多いため、家族や友人との時間が取りづらいといえる。

上述したATの職務の特徴の多くは、看護師や救急救命室（ER）で働く医師などにも共通していることが報告されている¹⁵⁾。わが国においては看護師の離職率がその他の職種よりも高いことが指摘されており¹⁶⁾、2010年時点で、看護師の資格を有しながら、実際には看護師として働いていない「潜在看護師」の数は、60万人前後に上ると推定されている¹⁷⁾。近年、看護師の離職理由で上位を占めるのが、妊娠・出産、結婚、育児であるが、それらのライフイベントと両立することを困難にするような、長時間労働や夜勤等の負担といった看護職の特徴が背景にあることが指摘されている¹⁸⁾。

また、ワーク・ファミリー・コンフリクトを経験することは、ATのウェルビーイングに影響を与えることが指摘されている。例えば、ワーク・ファミリー・コンフリクトは、ATの職務に対する満足度を低下させ、バーンアウトや離職意思を高めることがわかっている¹⁹⁾。先述のNCAAの調査によると、57%がATを辞めることを考えたことがあると回答した¹⁴⁾。また、Goodmanら²⁰⁾は、NCAAフットボールの1部リーグに所属する、または過去に所属していた女性ATの就労継続および離職の要因に関する質的調査を実施した。サンプル数は23と決して多くはないものの、貴重な知見を与えるものである。調査の結果、配偶者や親族のサポートが就業を継続する要因となっていることが明らかになったと同時に、ワーク・ファミリー・コンフリクトが女性ATの離職の最も大きな要因となっていることがわかった²⁰⁾。さらに、配偶者や子どもの有無に関わらず、日常的な長時間労働や遠征への帯同によって、仕事以外の私生活時間を確保するのが困難であり、離職を考える状況が示された²⁰⁾。

5. アスレティックトレーニング領域における「女性活躍促進」

現在、安倍晋三内閣では、「すべての女性が輝く社会づくり」を政策課題のひとつとして掲げ、女性の活躍促進を重視している²¹⁾。わが国では、伝統的な性別役割意識が根強く残るため、今日においても家事や育児の多くを女性が担っている。このため、多くの女性が出産や育児を機に退職し、数年後に主にパートタイムの仕事に就くという復職の形態が一般的であり、年齢階級別の女性の労働力人口率が30歳代で低下する「M字カーブ」を描くことが特徴である。その一方、生産年齢人口（15歳～64歳）の減少により、さらなる女性の労働市場への参入が期待されている。

現在、日体協公認のATのうち、女性の占める割合は15%弱である²²⁾。アスレティックトレーニング領域における女性の活躍促進に向けて必要なことはどのようなことだろうか。これまで見てきたように、長時間労働、労働時間の柔軟性の低さや不規則性、移動の多さに代表されるATの職務の特徴によって、仕事上と家庭内の役割間葛藤が生じやすく、就労継続の障壁となることがわかった。わが国では、多くの職種において、特に20歳代後半から40歳代前半の男性正社員の長時間労働が顕著である²³⁾。この長時間労働の文化は、男性と女性のより平等な家事・育児の分担が進まないひとつの大きな要因でもある。このような状況を考慮すると、既婚および子どもをもつ女性ATがプロや大学のスポーツ現場で働く場合、ワーク・ライフ・バランスが就業継続において非常に重要な課題となるの

ではないだろうか。ワーク・ファミリー・コンフリクトの経験を減らすためには、例えば、配偶者の労働時間が短いことや、労働時間の調整のききやすい職に就いていること、親類などの援助が得られること、夜間や休日にも子どもを預けることのできる保育施設等の環境が整っていることなどが必要といえるだろう。アスレティックトレーニングの領域にとどまらず、あらゆる職種で女性の活躍が促進されるためには、わが国の長時間労働の文化を見直し、短時間で効率よく働くという働き方の改革がなされることが必須であるといえるだろう。働く誰もが、それぞれのライフステージに合わせて、ワーク・ライフ・バランスのとりやすい社会の実現が期待される。

6. まとめ、今後に向けて

2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催や、高齢化社会における健康寿命の増進に向けて、ATの活躍の場は今後一層拡大すると予測される。その一方、長時間労働や労働時間の不規則性、頻繁な移動といったATの仕事の特徴は、ワーク・ライフ・バランスをとりにくくし、仕事と生活領域の役割間で葛藤を生じさせやすいといえる。これらの課題によって、資格と高い技術・専門性を持ちながらもATとして働いていない「潜在AT」を生み出すことを防ぐためにも、男性、女性ともに、仕事上の役割と家庭内の役割の両方を十分に果たすことができるような仕組みづくりが求められる。

同時に、上述したように、わが国ではATのワーク・ライフ・バランスに関する研究はほとんどなされていないため、さまざまな視点からの研究の蓄積が求められる。例えば、ATのワーク・ライフ・バランスやワーク・ファミリー・コンフリクトの現状や、性別、年齢、配偶者や子どもの有無、所属機関、勤務形態などによるこれらの差異を明らかにすることが重要であろう。また、現在の所属先や勤務形態を選択した経緯や、離職および転職を経験している場合にはその理由を調査することも、アスレティックトレーニングの領域全体が抱える課題を明らかにするために有効だといえる。さらに、将来ATを目指す大学生のキャリア展望や家族形成の希望、ワーク・ライフ・バランスに関する意識について調査することも有益であると考えられる。

参考文献

- 1) 鹿倉二郎, 「諸外国におけるアスレティックトレーナーに相当する制度」『公認アスレティックトレーナー専門テキスト① アスレティックトレーナーの役割』, 公益財団法人 日本体育協会, 2013, p17-20.
- 2) Board of Certification 「The BOC 2013 Annual Report」, 2013. http://www.bocatc.org/images/stories/multiple_references/boc_annual_report_1402bf.pdf (2015年11月1日アクセス)
- 3) 公益財団法人 日本体育協会 「公認スポーツ指導者資格の種類と役割」 <http://www.japan-sports.or.jp/qualification/tabid/58/Default.aspx> (2015年11月1日アクセス)
- 4) 「我が国のアスレティックトレーナーの歴史」『公認アスレティックトレーナー専門テキスト① アスレティックトレーナーの役割』, 公益財団法人日本体育協会, 2013, p6-16.
- 5) 公益財団法人 日本体育協会 公認スポーツ指導者登録者数 (平成27年10月1日現在) <http://www.japan-sports.or.jp/coach/tabid/248/Default.aspx> (2015年11月1日アクセス)
- 6) 内閣府 「仕事と生活の調和 (ワーク・ライフ・バランス) 憲章」, 2007. <http://www.cao.go.jp/wlb/government/pdf/charter.pdf> (2015年11月1日アクセス)
- 7) Poelmans, S., Stepanova, O., and Masuda, A. “Positive spillover between personal and professional life: Definitions, antecedents, consequences, and strategies” in Handbook of

- Work-Family Integration: Research, Theory, and Best Practices, K. Korabik, Lero. D. S., and W. L., Eds., Elsevier, London, 2008, Ch 8, 141-156.
- 8) Kahn, R. L., Wolfe, D. M., Quinn, R., Snoek, J. D., and Rosenthal, R. A. Organizational Stress, New York: Wiley, 1964.
 - 9) Greehaus, J. H., and Beutell, N. J. Sources of conflict between work and family roles. Academy of Management Review, 10, 1985, 76-88.
 - 10) Frone, M. R., Russell, M., and Cooper, M. L. Relation of work-family conflict to health outcomes: A four-year longitudinal study of employed parents. Journal of Occupational and Organizational Psychology, 70, 1997, 325-335.
 - 11) Googins, B. K. Work/family conflicts: Private lives-public responses. New York: Auburn House, 1991.
 - 12) Higgins, C. A., Duxbury, L. E., and Irving, R. H. Work-family conflict in the dual-career family. Organizational Behavior and Human Decision Processes, 51, 1992, 51-75.
 - 13) Mazerolle, S. M., Bruening, J. E., and Casa, D. J. Work-family conflict, part I: Antecedents of work-family conflict in National Collegiate Athletic Association Division I-A certified athletic trainers. Journal of Athletic Training 43 (5) , 2008, 505-512.
 - 14) National Collegiate Athletic Association, NCAA Task force on life and work balance in intercollegiate athletics: Executive summary. 2006.
 - 15) Dixon M. A. and Bruening, J. E. Perspectives on Work-Family Conflict in Sport: An Integrated Approach. Sport Management Review, 8, 2005, 227-253.
 - 16) 厚生労働省 第1回新人看護職員研修に関する検討会 資料「新人看護職員研修の現状について」, 2009. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/04/dl/s0430-7b.pdf> (2015年10月27日アクセス)
 - 17) 宮崎悟「看護人材の就業率の推移—再検討した潜在者数推計方法による結果から—」ITEC Working Paper Series (同志社大学ITEC) ,2012, 12-04.
 - 18) 公益財団法人 日本看護協会「日本の医療を救え～看護職の健康と安全が患者の健康と安全を守る～」,2011. <https://www.nurse.or.jp/nursing/shuroanzen/jikan/pdf/sukue.pdf> (2015年10月27日アクセス)
 - 19) Mazerolle, S. M., Bruening, J. E., Casa, D. J., and Burton, L. J. Work-family conflict, part II: Job and life satisfaction in National Collegiate Athletic Association Division I-A certified athletic trainers. Journal of Athletic Training 43 (5) , 2008, 513-522.
 - 20) Goodman A., Mensch, J. M., Jay M., French, K.E., Mitchell M. F., and Fritz, S. L. Retention and attrition factors for female certified athletic trainers in the National Collegiate Athletic Association Division I football bowl subdivision setting. Journal of Athletic Training 45 (3) , 2010, 287-298
 - 21) 首相官邸「すべての女性が輝く社会づくり」,2014. http://www.kantei.go.jp/jp/headline/josei_link.html (2015年10月27日アクセス)
 - 22) 公益財団法人 日本体育協会「Global Practice Analysis 2012 世界におけるアスレティックトレーナーの実態調査」, 2012.
 - 23) 小倉一哉「長時間労働の実態と課題」労働政策研究・研修機構 編『ワーク・ライフ・バランスの焦点—女性の労働参加と男性の働き方』,2012.

生涯学習の先駆者たち—その3—
—中江藤樹と伊藤仁斎—

ブストス・ナサリオ
桜花学園大学生涯学習研究センター長・教授

キーワード：江戸時代・中江藤樹・藤樹書院・伊藤仁斎・古義堂

The Lifelong Learning Pioneers (Part 3)
—Nakae Toju and Ito Jinsai—

Nazario BUSTOS
Director and Professor, Lifelong Learning Research Institute Ohka Gakuen
University, Toyota, Japan

ABSTRACT

The final purpose of this series is to present the life and the educational ideas and activities of nine great educators of Tokugawa (Edo) Japan. I have selected them based on my research on the Lifelong Learning Movement in Japan for almost 20 years. All of them should be considered as pioneers in the development of the lifelong learning concept, aim, meaning, practice and ideal.

The nine are well known in Japan and some of them have an important international reputation. Eight of them are Japanese nationals (Hayashi Razan, Nakae Toju, Ito Jinsai, Ishida Baigan, Motoori Norinaga, Hirose Tanso, Ogata Koan and Yoshida Shoin) and one of them is a German—born physician (Philipp Franz von Siebold) .

In this part 3, I will present very briefly the reasons why I have selected these nine educators and then will enter to describe the life and the educational activities of Nakae Toju and Ito Jinsai and the importance of their schools, which became the famous Toju Shoin and the Kogido during the Edo period.

Key word: Edo Period, Nakae Toju, Toju Shoin, Ito Jinsai, Kogido

I. 江戸時代の優れた学者とその教育機関

明治維新を機に日本は資本主義への道を歩みはじめた。それ以降、日本経済の目標は欧米の水準に追いつくことであったが、100年余りのうちに、すなわち1950年代半ばには、日本経済は高度成長の時代を迎えるようになった。石油化学を中心とした化学工業、重電機や金属加工等の設備関連産業、自動車・家電製品などの産業が盛んになった。このような工業化に必要な労働力は、農村部から都市部への人口流入により支えられた。

1960年代後半になると、日本経済の国際競争力は次第に強化されていき、1970年代後半には二度にわたる石油危機を乗り越えた後、再び成長へと転ずる可能性が高まった。それは、情報通信技術の発達や商品貿易の拡大化やサービス業の国際的な移動等であった。

現在、日本経済は、高度・中成長なしで不況に陥っているが、未だ国際社会から日本の持っている経済力・技術力・科学力に期待されている役割は大きい。

このように見てみると、日本は近代化が始まってから140年という短い期間に、閉鎖的な封建社会から産業・技術のリーダー、国際化された経済的な大国へと変化した。

世界を驚かせたこの著しい変化の諸要因として、ほとんどの研究者は一般国民の「教育」レベルの高さを挙げている。

日本の教育は、明治・大正・昭和・平成の諸教育制度・政策の下に著しい普及発展を遂げ、産業・科学・技術の進歩や経済成長の原動力となり、今日の日本の発展に大きく寄与してきたことは否定できない事実である。

本シリーズの「—その1—」⁽¹⁾で述べたように、日本が、明治5年に「学制」を公布してその近代教育制度を創始し、国民の教育は、量的にも、また質的にも著しい発展を遂げ、経済社会の基盤となってきたことはよく知られている。しかし、この近代教育制度の源をさぐれば江戸時代に遡る。江戸時代には、幕府、諸藩、個人により、武士または庶民を対象にした多数の教育機関が設けられ、儒学、国学、外国語、医学等の学習機会が提供されているからである。

多種多様な学校が存在とその普及によって、民衆教育の拡がり急激に進んだ。農業・漁業・林業・工業・商業に関わる民衆は、すべて一定程度以上の読み・書き・計算能力を身に付けようとするようになったのである。当時の正確な就学率を示すのは困難であるが、江戸・大坂・京都などの都市では武家の子はほとんど全員、一般庶民の男子は半数、武家の女子もかなりの程度、そして庶民の女子はかなり低い就学率であった、という推計がある⁽²⁾。

幕末期には、当然のことではあるが、地域差（東北・九州・沖縄地方では就学率が低い）、男女差があったが、明治初期の数年（1868～1872）の近代教育制度への就学率より確実に高かったと思われる。

このように、江戸時代に、教育活動が盛んになったことには多くの理由があろうが、当時の個人教育者の活動性、熱心さ及び創造力がその一つであるといえよう。このような教育者の中から筆者は9人を選んで、このシリーズのテーマにした。

これらの9名の選択には、次のような理由がある。

- ① 現代でもよく知られている人物であること。
- ② この人物の創立した塾の「校舎」（石田梅岩を除いて）の跡が未だ存在していること。
- ③ 日本教育の思想・実践に寄与したこと。
- ④ 独自の教育活動・方法等を行ったこと。
- ⑤ 教育に関する独特な先見性を示したこと。
- ⑥ 今日の視点から見ても「新しい教育のあり方」を示すこと。

⑦ これからの「生涯学習時代」においても、そのアイデアを生かすことが可能であること。

もちろん、その他にも挙げられるべき人物が多くいると思われるが、筆者は上記の理由を考えながら、地方の大学で「日本教育史」を担当している数人の教師と面談するにあたって、これらの9人の名前がよく出てきたことも選択決定の理由にしたことを強調したい。

このような経緯で、筆者の選んだ人物および教育機関は次のとおりである。

1. 林羅山 (1583-1657年) と「昌平坂学問所」の礎
2. 中江藤樹 (1608-1648年) と「藤樹書院」
3. 伊藤仁斎 (1627-1705年) と「古儀堂」
4. 石田梅岩 (1685-1744年) と「心学」
5. 本居宣長 (1730-1801年) と「鈴の屋」
6. 広瀬淡窓 (1782-1856年) と「咸宜園」
7. 緒方洪庵 (1810-1863年) と「適塾」
8. 吉田松陰 (1830-1859年) と「松下村塾」
9. フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (1796-1866年) と「鳴滝塾」

当然のことであるが、これらの9人の存在時期は異なるためそれぞれの時代の社会状況も異なった。言うまでもなく、このことによって、彼らの性格、本業、業績、考え方等が違った。しかし、歴史的にみると大切な共通点もあったといえよう。すなわち、これらの9人の教育思想には、新鮮さがあり、その時代を超える強さがあったに違いない。

それでは、江戸時代に存在した多くの私塾の中から優れた学者の思想・教育の仕方、提供された学習機会について述べてみましょう。

本シリーズの「—その2—」⁽³⁾では、林羅山 (1583-1657年) と「昌平坂学問所」の礎について述べた。特に林羅山の生涯、昌平坂学問所の起源、羅山の生涯学習的な活動等に関する考察を行った。

以下、本稿では、中江藤樹と伊藤仁斎の生涯、思想、教育活動および提供された学習機会について述べることにする。

II. 中江藤樹 (1608 ~ 1648年) と「藤樹書院」の礎⁽⁴⁾

これまで、中江藤樹に関する単行本、文献・資料はいくつかあるが、その殆どは、哲学や宗教や教育の観点から書かれたものである。しかし、本論文では、はじめて現代の生涯学習の観点から見た藤樹の活動に集中することを強調したい。

1. 中江藤樹の生涯

江戸時代初期の儒学者でありながら、日本の陽明学の祖である中江藤樹は、1608年3月7日、近江国の小川村 (現在滋賀県高島郡安曇川町大字上小川) に生まれた。

藤樹が生涯を過ごしたのは、江戸時代の初期、すなわち、日本各地で続いた多くの戦が終わり、人々がようやく職務に戻ることができた時代であった。父母は、静かな農村であった小川村の農家だったが、藤樹の祖父吉長は、36歳のとき、近くの大溝城の藩主に仕えていたため農業をやめて武士になった。祖父は、藩主の指示によって米子 (現在鳥取県米子市) や大洲 (現在愛媛県大洲市) へ移転した。

藤樹は、父母と一緒に畑仕事を続けたが、9歳になったころに祖父が6年ぶりに小川村に一旦帰ってきた。この機会を利用して祖父が学問をさせるために養子として藤樹を米子に連れて、ここで初め

て読み書きを習った。

その一年後、祖父が大洲藩の飛び地^{かざはやぐん}風早郡の奉行になるために家族とともに再び移転された。ここで藤樹が「庭訓往来」^{ていしんおうらい}（手紙の書き方に関する本）や「貞永式目」^{じょうえいしきもく}（武士道に関する本）などと接触する。11歳になるとはじめて「大学」を読み、この本を通して孔子の政治についての考え方を学んだ。

13歳の時に祖父の相談を受け、風早郡から離れて城下町であり、藩の政治をあずかる大洲に戻った。ここで文字の学習を深めるとともに詩をつくるようになった。こうして勉強に励んでいた15歳の時、祖父を失った。

少年ながら、祖父の家禄を継ぎ、武士として、百石の禄を与えられるようになった。このころから藤樹は独学を始めるようになって、しばらく「大学」、「中庸」、「論語」、「孟子」の四つの本を含む「四書大全」という書物を数年かけて読み続けた。

学問に夢中になっている時期（19歳頃）に、郡奉行の役目に就いて、税金を決めたり、争いを裁くにあたり、農民の心を正直にさせる人として知られるようになった。

しかし、27歳になると、喘息に罹って、そしてこれまで一人暮らしをしていた母と一緒に暮らすために辞表を出して故郷の小川村に帰った。

小川村で新しい暮らしを立てるために自分の家で酒屋を開く。こうしていくらかの収入ができたがこのときから亡くなるまで貧しい暮らしを送った。

いつの間にか藤樹の親切な態度に村人たちは、酒を買いに来るだけでなく、村の行事や個人的な心配事や家族の病気のことで相談にくるようになった。このころから村人達は彼のことを「藤樹さん」と呼ぶようになった。実は、藤樹の名前は「原」と言ったが普通は「与右衛門」と呼ばれた。彼の家の庭には大きな藤の木があり、彼がその木をととても大切にしていたため「藤樹」という名前を付けられた。これは、1636年で、藤樹は、29歳だった。これは、大変興味深い出来事であり、村人たちに愛されたことを証明する。

この年から、少しずつ学問の同士が集まってくるようになった。最初にきたのは、大洲の藩士の一人だった。そして、次々に大洲から多くの門人が藤樹の教えを受けに来るようになった。この門人たちは、数日、または数十日、藤樹の家や近くの農家に泊まって勉強したが中には、何年も留まる者もあった。また、藤樹はどの門人にも学習機会を与えて、一人一人の関心・能力にあわせた教授法・テキストを利用した。たとえば、一人の能力の優れていない門人のために中国の医学書も買い求め、それらを基にして「捷徑医筌」^{しょうけいいせん}（医学の近道）を書き進めながら教えた。

1646年に39歳になると、中国の明の時代に出た王陽明^{おうようめい}という学者の「陽明全書」という本を読んで大きな影響を受ける。朱子が、形式や礼儀を重く見たのに対して王陽明は、形より心の持ち方を大切に考えた。彼によれば、人の身分の上下にかかわらず、だれでも良知という美しい心を持って生まれ、それぞれが自分の良知の指図に従うべきである。これを「致良知」と呼んだ。

この「致良知」を基にして藤樹は、自分の学問を進めるようになった。これ以降藤樹の学問の特色は、「良知の学」であり、日本で初めての陽明学者になった。この陽明学の「良知」を中心とする人間平等の考え方は、幕府の規定する身分制度という考え方と摩擦するためほとんど普及しないが、門



中江藤樹の画像（画像1）

人らに学問で学んだことを生活の中でいつも実行するように薦めた。藤樹の死後に、それらの門人らは、藤樹の独特の良知の学を研究進めて全国にそれを広めた。

同じく1646年に、藤樹の学徳は、広く知られるようになり、門人の数も増えてきたが特病の喘息が悪化したため病床につくことが多くなった。にもかかわらず藤樹は、毎晩遅くまで講義を続けた。そして、いつも一緒に講義を聞きながら門人の世話をしていた妻の久子が死亡する。このため、残された3歳と生後3ヶ月の子供の育成をしながら門人を教え続ける。村の人々や門人の手伝いをうけるようになるが、結局再婚することを決めた。

新妻の布里が嫁いできた一年後、藤樹の三男が生まれる。同じ年に藤樹の屋敷に、講義や集会のための書院の建設が進められた。この屋敷は出来上がったら、すぐに村人たちが「藤樹書院」と名を付けた。「藤樹書院」は、七つの部屋があって、15畳と6畳の講堂があり、応接の間や台所もあった。

このように、藤樹の生活が大きく変わろうとしている矢先、再び喘息の発作のため1648年8月、40歳で臨終に至る。藤樹の没後は、門人の熊沢藩山、淵岡山、そして中江弥三郎（藤樹の三男）らによって藤樹書院が維持されるようになった。

2. 中江藤樹の教育活動

藤樹の教育活動の大切さを明らかにするために彼の生まれた時代の社会とその学問の状況を探ることにしよう。1608年という、徳川家康が幕府を開いて5年戦国の乱れも落ち着き、その支配力を強めるために幕藩体制が確立したころである。そして、三代将軍家光のころに幕府は法律をつくって、大名の参勤交代制度や鎖国制度や土農工商の身分制度等を定める。

学問については、江戸時代に入って、すぐに盛んになったのは儒学だった。周知の事実であるが、この政治や社会のあり方の教えを朱子は孔子の考え方をまとめたのだがその影響が大きくて、儒学のことが朱子学といわれるようになった。藤樹が最初に勉強したのはこの朱子学であった。

儒学は、身分の区別を重んじ、忠君（忠実）を大切にするため、身分制度や幕府の規定をつくすのに当時の支配階級の考え方に大変ふさわしい学問だったと思われる。したがって、幕府が林羅山のすすめにより朱子学を普及させるためにそれを教える学校をつくるだけでなく、全国の大名家にも朱子学を支援するように薦めた。

これに対して、上記のように、藤樹の良知学（陽明学）の「良知」を中心とする人間平等の考え方は幕府の規定にぶつかった。にもかかわらず、中江藤樹は、幕府や藩からの援助もなく高度な学習機会を提供し、多くの門人を教え、私塾を設立して、独立の研究者として門人から得た学費で生活できる「教師」としても先駆者であるといつてよかろう。

上記のように、27歳の時に郡奉行の役目を辞めて帰郷したが、それからずっと貧しい生活を送った。教師として、一人一人の門人の特性・関心・能力を大切にしながら、藤樹が、一生を彼らのためにささげたのに対して、門人らは師を尊敬し、食料や衣料を贈り、病気になると世話をしたり、子供の面倒をみたりして、ずっと親密な関係を結んだ。



現在の藤樹書院（画像2）

当然のことであるが、藤樹は個別教育を通して弟子とのこの親密な人間関係を大事にしながら、弟子中心の教えを行った。寄宿したい人たちのためにも、通いたい人たちのためにも短期間だけ教えを受けたい人たちのためにも自宅を開いた。また、夜にしか来られない弟子たちのためにも夜間講義を行ったり、藤樹の自宅までくることのできない学習者の団体のため、出張（移動・出前）講座を実行した。そして、直接に出会うことのできない門人たちのために、時間をかけて、手紙の交わりを積極的に行った。

3. 中江藤樹の生涯学習的な活動

藤樹は、6ヶ月間（1648年2月から8月まで）しか「藤樹書院」で教えることが出来なかったがその生涯を通して、現在でも通用する様々な考え方を実行した。このような考えかたを生涯学習の観点から見ると、現在でも使われる。また、既に使われているものとして次のようにまとめることができる。

① 地域の人々（だれでも）に対して様々な学習機会を提供したこと。

藤樹の門人には、藤樹の脱藩に追随して大洲から従学したもののや徳を慕って各地（長崎・岡山・宮城・愛媛等）から来たものもあり、岡山藩主池田光政や大溝藩主部分嘉治など大名の尊信者もあったが、田舎の武士もあり、門人の半数近くが地元のものであった。そのような異なる背景をもつ門人の特性を尊重しながら様々な教育機会を提供した。すなわち、だれにでも適切な学習機会を提供した。

② 学習需要を持つ人々に対しても適切な配慮をし、生涯学習を援助したこと。

藤樹は、学習需要のあるもの全てに対して、能力に合わせた内容の講義を提供した。上記のように、能力に優れていない大野という門人のために藤樹自身が医学の本を読んで、解りやすくまとめて、大野に一对一の形で教えた。

③ 門人の自己に適した手段および方法を自ら選ばせるようにしたこと。

藤樹は、必要に応じ、可能な限り門人に適した手段および方法を自ら選ばせて勉強させた。例えば、門人ら自身で勉強したい本を選んだり、個人または団体で学習形態を選択したりして、場合によって普通の講座を受けることができた。

④ 門人の暇時間を考慮した上で夜間講義を行ったこと。

藤樹の門人の多くは、社会人で、日々の仕事を終えてからしか来られないもののために夜間講義を開いた。毎晩遅くまで、時には夜明けを見るまで講義を提供した。このような時に妻久子は、側に座り講義を聴きながら茶を出したりして門人の世話をし、先に休むことはなかったらしい。

⑤ 出張講義を行ったこと。

藤樹の自宅に来ることのできない人々のため、彼自身が近郷の村々へ出かけて行って、講義や個人指導を行った。

⑥ いつでも、学習したい時間にも講義を開いたこと。

上記にもあるように、門人の多くが社会人であるため藤樹は、1ヶ月も、3ヶ月も、何年も寄宿して勉強してもよいし、毎日または週一回通いでもよいし、短期間・一度だけでも教えを受けてあとはやめてもよかった。まさに、教えの運営の仕方が非常に柔軟なものであった。

⑦ 教育はあくまで門人中心であったこと。

藤樹は、門人の特別な関心と興味によって別にその方面の指導をしながら、門人のそれぞれの向学に合わせた手段・方法を利用した。ここで、藤樹自身から門人の向学を指導しなかったということを強調すべきだろう。

⑧ 通信教育を通して、人々の自発的な意思に基づいた学習を援助したこと。

上記のように藤樹は、小川村までに来られない人たちのために、現在でいう通信教育すなわち、手紙交換を通して、学習の基盤を整備して門人の自発的な意思に基づいた学習を援助した。

⑨ 個別教育を大切にしたこと。

藤樹は、大型の講義よりもできるだけ個人指導を行った。これは、自宅または書院が小さかったからではなく、あくまでも藤樹は一人一人の門人との信頼のある家族的な関係をつくろうとし、現在でいう「心の教育」をしたかったと思われる。

このように、藤樹は「藤樹書院」で短い期間しか教えることができなかった。したがって、ひとつの塾の運営の仕方よりも、藤樹は、弟子のために生き続ける「専任の教師」という思想を生み出した初めての日本人であるかも知れない。このようなことから、様々な観点から見ても藤樹は学習が支えるものであり、いつでも、どこでも、だれにでも学習機会を与えるべきであるという考え方を持った。したがって、現在日本での生涯学習の考え方の先駆者の一人であることが明らかであろう。

III. 伊藤仁斎（1627年～1705年）と「古義堂」

次に、江戸時代の中期の儒者、古義学派の創始者である伊藤仁斎について述べることにする。ここで、最初から強調しなければならないのは、仁斎に関する単行本、専門性のある文献が非常に多いことである。また、仁斎は日本の文学史の中で大変偉大な人物であるため、その偉大さについて語る必要もない。しかし、「伊藤仁斎は生涯学習の先駆者である」という筆者の発言がある限り、そのことを証明しなければならないと考える。したがって、本論文は、生涯学習の観点から見た仁斎についてのみ述べることにする。

1. 伊藤仁斎の生涯

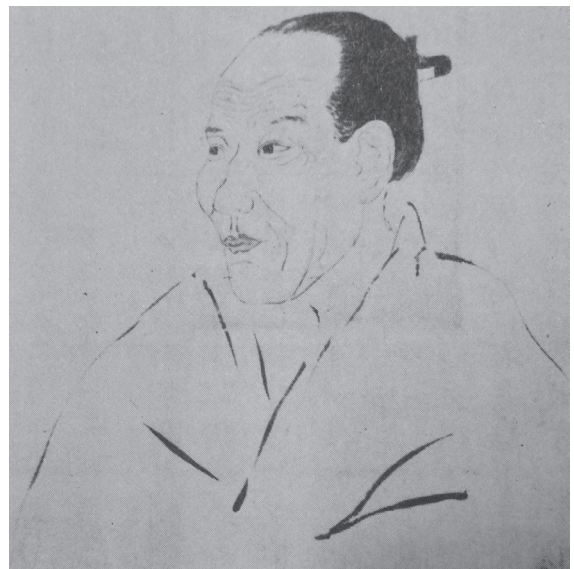
伊藤仁斎は、1627年、京都の堀川通勘解曲小路上ル町（二条城の近傍）に生まれ、源七と名づけられた。

仁斎の幼年時代は、封建的諸施策が進んだ時期であり、武家諸法度が改正され、家光が譜代大名の妻子を江戸に置いたり、諸大名の参勤交代の制度を定めるなど、江戸の権威が高まる反面、京都の政治力が失われていった時代であった。

伊藤家は武家ではなく商家であったが、母方の親戚は当時京都において公卿・富商の間を周旋する高級文化人だったとされる⁽⁵⁾。

仁斎は、11歳の時、はじめて師について句読を習い、その後、16～17歳から家人・親戚の反対を押し切って学問に没頭し、林羅山の訓点をつけた朱子の「大学」、「中庸」、「論語」、「孟子」の四書と出会うことになる。また、19歳の時には、「李延平答門」そして「文公小学」を手引きとして朱子学の道へ入っていった⁽⁶⁾。

仁斎21歳の頃、藤原惺窩の門弟であった松永尺五は加賀（石川県）から京都に帰って来た。当時の京都所司代の板倉侯が学問を好み尺五の講義を聴いた結果、堀川に土地を与えて講習堂を建てさせた。この時（1648年）仁斎もこの施設で尺五から講義



伊藤仁斎の寿像（伊藤東涯筆）（画像3）

を受けたい。27才の時には、自ら「敬齋」と号するとともに、「敬齋記」という論文を草したが、この論文の中で彼は、朱子の精神を探ろうと努力すると同時に、朱子学の根本観念は「敬」であると説いている⁽⁷⁾。

仁齋は次いで（28歳の時）、『心学原論』を著して朱子の教説を広く伝え、朱子学を通じて独創的な意見を述べようとしたのであったが、翌年には松下町での隠棲生活に入っている。このことは、仁齋の『行状』によれば、病気（心臓病と思われる）による隠棲ではなく、好学心の結果のものであった。この隠棲生活によって仁齋の学問は、朱子学を超えて更に独自の発展を見せ、このごろに、「敬」ではなく「仁」を尊重した『仁説』を著している。この『仁説』の中において、宋学の超感性的な「理」の立場を越えた人間の感性的な「愛」への新しい感情のありようが表現されているのである⁽⁸⁾。

1662年5月（36歳の時）、京都に大地震があり、仁齋の住居も相当の被害を受けたらしく、この地震を機についに家へ戻った。この時期にはじめて門戸を開き、「古義堂」と称して、生徒を受けるようになり、この塾で生徒に教えるとともに「同志会」という研究会も創設した。この時点を境にして、有利な仕官の誘いも断りながら1705年（79歳の時）に病没するまで、残された生涯を在野の学者として通した。

2. 伊藤仁齋と「古義堂」の教育活動・方法

伊藤仁齋は、彼独自の思想を終生自宅で講じたが、「古義」という言葉が、孔子およびその門人の言行をあつめた『論語』の思想内容の理解をテーマとするものであるため、仁齋の思想は「古義学」と呼ばれている⁽⁹⁾。

仁齋は、43年間、この「古義学」を「同志会」を通して「古義堂」で教え続けたが、「同志会」の会則（「同志会式」）によれば、研究会は次のようにとり行われたらしい。仁齋の堀川の宅を会集の場所として毎月3回会合が催され、会集の日には会員は茶と菓子とを持ち寄って会を開く。そして、会員が各々自身のアイディアを持ち寄った。会員中から必ず一人を推して会長とし、会員が集まってくると年齢順に席につき、前に出て孔子の位牌に礼拝する（はじめに仁齋は同志会において「歴代聖賢道統図」をかけたが、後に「孔子像」にとりかえたという）。当番の者が会約を読んだ後に、会員中から講者が進み出て席に上がって書を講じる、終わると会員が各々質問するがもし返答に窮する者があると、会長が執り成す。

このようにして「輪番」に講者となって「講義」と「問答」を進め、「講論」が終わると会長は「策問」あるいは「論題」を出して会員を試す。こうした共同研究会において、会員一同が「いはい極論熱講してその同異を一に」しようとしたという⁽¹⁰⁾。

仁齋の同志会には、正式的な入門や入学試験などのようなものはないし、門人たちの社会に対する身分を保証するものでもないし、原則的には同志会は師と門弟という身分の差もなく、まったく自由な、民主主義的な、平等な学習の場であったといえよう。

同志会の運営については、貝塚は「仁齋が事実上は主宰していたかもしれぬが、会則によると、毎回、会長は推薦によってきめられるから、仁齋が会長と決まっているわけではなかった。講師も当番制か、毎日、何回もかわる。講師の講義が終わると、聴衆



伊藤仁齋の生家：現在の古義堂の画像（画像4）

から質問が出て、討論が行われ、その結果がまとめられて記録になる。まるで現代のシンポジウム、それも、よく組織されたシンポジウムのように運営されている。仁齋がひとりで講義し、門弟たちがうやうやしく拝聴するだけのものでは決してなかった。」⁽¹¹⁾と述べている。

また、仁齋自身に基づく講義については、貝塚は、「同志会の席上の仁齋にもとづく講義は門人たちの出す異論によって、たえず改訂されてゆく。年がたってその改訂本をもとにした草案によって講義しなすと、また異論が出てきて、また筆を入れる。そのような過程が延宝元年（一六七三）かれの四七歳のときまでくりかえされた。この教本は朱子の「集註」にたいして、孔子・孟子のもとの意味を明らかにするという意味で「古義」と名づけられた。」⁽¹²⁾と述べている。

すなわち、仁齋による古義学に関する講義であっても門弟によって討論は行われ、自由に訂正の提案があった。このような仁齋の教育方法は、「私擬策問法」と呼ばれる、いわゆる問題アプローチ法であり、それを通して様々な思想家、例えば孔子や孟子の教えについて討論を行ったのである。

また、同志会の会員の中には自分自身が学ぶ一方で指導的役割を果たす者達がいたが、そのほとんどは医師であった。そのため、道徳に関連した様々な思想とともに医学に関するテーマについても講義を行ったと考えられる。

しかし、仁齋の考え方は非常に民主的であるため、様々な方法で、また多様な内容によってだれにでも学習機会を提供した。すなわち、古義堂にあらゆる階層にまたがる門弟が集まって、儒学の「四書」を徹底的に読むだけでなく、理解した上で最良の道徳訓練を受ける。換言すれば、古義堂の最終の目的としては儒教の原書の研究を通して原始儒教と仁齋の哲学の徹底的な把握があげることができよう。このことは、仁齋が当時儒教の中での朱子学または陽明学に対して批判的な評価を持って、いわゆる「復古」の姿勢をとって「古学」を提唱しただけではなく、自分自身の独自の思想をつくらせて弟子に伝えたということを表す。

仁齋の弟子の身分については、ルビンジャーによれば、次のようになる。

「階層別に見ると、一番多いのは庶民（60%）であり、とくに町医者（29%）、商人（21%）など仁齋とその家庭に縁の深い層であり、庶民のうちではこれが最も多い。農民はごくわずかである。だから、この塾の学生は、主に都市の住民だったといえる。ほかに士分のももかなりいて（24%）、学問に対する武士階級の熱意のほどもうかがえるが、やはり、塾教育というものが、しだいに平民層にまで広がっていた、という点が重要であろう。」⁽¹³⁾

実は、門人は全国各地から集まってきたが、最も多いのは京都周辺であった。しかし、その他37地方からもきており、遠い九州からの学生も25人ほどいたという。

このように仁齋は、様々な背景・関心を持つ塾生に対して幅の広い学習機会を提供し、一人一人の門人の個性を生かせる教授法を採用したといえるであろう。

3. 伊藤仁齋とその生涯学習的な活動

以上のことから伊藤仁齋の「古義堂」の教育活動の構想の特性としては、次のようなことが挙げられる。

- ① あらゆる階層にまたがる塾生を受け入れた（だれにでも学習機会が提供された）こと
- ② 一人一人の門人の個性を生かしたこと
- ③ 塾生の様々な能力・関心に照応した学習方法が提供されたこと
- ④ 学習機会の内容には幅の広い多様性が合ったこと
- ⑤ 多様性のある開放的な学習様式が認められたこと
- ⑥ 同志会の会員のように月に3回、数の少ない参加日の門人も受け入れたこと

このように、「古義堂」の教育活動からは、中央教育審議会の答申『生涯学習の基盤整備について』（平成2年）のいくつかの部分が想起される。たとえば、「地域の人々に対して様々な学習機会を提供すること」とか「各種の公開講座を開催する」などである。伊藤仁斎は、現在の生涯学習の様相のいくつかを実現した先駆者であるといえよう。

注

- (1) ブストス・ナサリオ「生涯学習の先駆者たち—その1—」—江戸時代の教育思想と生涯学習機会のネットワーク—、2010年、九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学 生涯学習研究センター紀要第15号、51～62頁。
- (2) 文部省『学制百年史』、昭和47年、帝国地方行政学会、65～81頁。
- (3) ブストス・ナサリオ「生涯学習の先駆者たち—その2—」—林羅山と昌平坂学問の礎—、2011年、九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学 生涯学習研究センター紀要第16号、47～57頁。
- (4) 藤樹の生涯については、滋賀県高島郡安曇川町立青柳小学校編「藤樹先生」、平成7年（六訂版）を大きく参考として利用した。
- (5) 石田一郎『伊藤仁斎』1960年、吉川弘文館、25頁。
- (6) 石田一郎、同書、33頁。
- (7) 石田一郎、同書、34頁。
- (8) 石田一郎、同書、37～39頁。
- (9) 相良亨『伊藤仁斎』1998年、ペリカン社、3頁。
- (10) 石田一郎、上書、43頁。
- (11) 貝塚茂樹『日本の名著—伊藤仁斎—』1983年、中央公論社、25頁。
- (12) 貝塚茂樹、同書、27頁。
- (13) ルビンジャー、R.『私塾』（石附実・海原徹共訳）1982年、サイムル出版会、48頁。

画像

- 画像1 中江藤樹画像（滋賀県高島郡安曇川町立青柳小学校編「藤樹先生」、平成7年（六訂版）
- 画像2 現在の藤樹書院の画像（滋賀県高島郡安曇川町立青柳小学校編「藤樹先生」、平成7年（六訂版）
- 画像3 伊藤仁斎の寿像（伊藤東涯筆）（天理大学附属図書館古義堂文庫蔵）
- 画像4 伊藤仁斎の生家：現在の古義堂の画像 筆者の撮影（2014年夏）

『伊勢物語』49段と『源氏物語』総角673番歌

阿部 誠文

九州女子大学人間科学部人間文化学科元教授

キーワード：伊勢物語・源氏物語

『Isemonogatari』49 paragraph And 『Genjimonogatari』
Agemaki 673 number Tanka

Masafumi ABE

Formerly Professor, Department of Humanities, Faculty of Humanities,
Kyushu Women's University

ABSTRACT

The purpose of this article is to understand the number 673rd Tanka of Genjimonogatari by adding a new interpretation to the 49th paragraph of Isemonogatari.

1、目的

本稿は、『伊勢物語』49段に新解を試み、それによって、本歌取りをした『源氏物語』総角673番歌を解釈してみよう、というところにある。新解で解釈できれば、新解が正しいかどうか検証の1つになろう。

2、『伊勢物語』49段の本文

むかし、をとこ、妹のいとをかしげなりけるを見をりて、
うら若み寝よげに見ゆる若草をひとの結ばむことをしぞ思ふ
と聞えけり。返し、
初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなく物を思ひける哉⁽¹⁾

岩波古典文学大系の誤字、脱字を訂正した。この大系本は藤原定家の書写した天福本系の三条西家旧蔵本（現在学習院大学所蔵）によっている。なお、朱雀院の塗籠本に取まっていたと巻末に記されている塗籠本がある。全115段で現存の写本で、最も章段が少ない。49段は、48段で、本文の1行目末尾が「琴をひきけるを見て」となっている。

3、諸説（諸注・諸訳）

1) 角川文庫本・中河與一訳注

この底本は、文化9年9月17日、藤井高尚が脱稿した『伊勢物語新釈』による。天福本・塗籠本等を校合しており、48段の本文は塗籠本と同じである。

語注。「妹」この時代は姉も妹もいもうとと云った。「琴」七絃の琴。「ね」「こと」は、楽器の縁語。⁽²⁾

訳。以下男の歌をA、妹の歌をBとする。

むかし、或る男が、大変容貌の美しい自分の妹が琴をひいてゐるのを見ながら

Aあまりにも美しく膚ざはりのよささうな

この若草の妹が何時か他の男と契ることを思ふと

惜しいやうな気がする。

それに対する妹の返歌は

B何といふ意外な言葉でせう

それとは知らず何の隔てもなく

兄上として考へて来ましたのに。⁽³⁾

2) 岩波大系本 大津有一・築島裕校注

語注。「妹」。異母妹か。古くは異母妹との結婚は珍しくなかった。(歌は)古今六帖六(業平)。「うら(裏)・ね(根)・結ぶ」は草の縁語。「うら」は「心」で、「うら若み」は、心に若く思うので、の意か。「聞こえけり」。申し上げた。男から妹を尊敬した表現。「はつ草」は若草と同義。「めづ」の枕詞という。

訳。

A若々しいので(共寝)の心地の良さそうに見える若草(妹)を、他人が結んで旅寝する(情を交

す) ことを惜しく思う。

B どうしてこんな奇妙なことを言われるのでしょうか。兄弟だと思って、今まで何の気もなく親しみ申しておりましたのに (そんな御料簡ではお親しみできません) ⁽⁴⁾

3) 講談社文庫本。森野宗明校注・現代語訳。

定家の書写した天福本系の三条西家旧蔵本で、岩波の大系本と同じである。

語注。「いもうと」は年齢の上下とは関係なく、男のがわからとらえた女きょうだいをさす。異母妹、ときには同腹の妹を恋する話は、中古でも「篁物語」や「宇津保物語」に見える。⁽⁵⁾「きこえけり」。「きこゆ」は申しあげる意として解くのが普通。あるいは、男と異なり、母方の出自が高貴なのか。具体的な人名を出さずに〈昔、男〉式に語られている話のなかでの敬語の使用は珍しい。妹に対す敬語は不審とする説は、敬意の表出者が作者であって男でないことを見落している。もともと敬語の使用が落ち着かないのはたしかで「聞こえるように言う」意として試訳しておく。非敬語として、言う行為を表わす用法は古代にはある。その場面での即興的なやりとりになる。⁽⁶⁾

A。語注。「ねよげに」の「ね」に「寝」「根」をかけ、「むすばむ」に契りを結ぶ意と、若草を結ぶ意とをかける。草を結ぶとは、旅の野宿で枕にする意にも用いるが、願いごとがかたうように願ったり、また旅の安全を祈ったりするときにする行為だともいう。「わかくさ」は、みずみずしく若さにはちきれそうな女きょうだい、おそらく異母妹をさしている。あまりに若々しく魅力にあふれているので、半分は、ほんとうにあやしい気分になりながら、やや露骨にからかったのだろう。「宇津保物語」の仲澄が同腹の妹貴宮あてみやに恋焦がれて悶死するといった話や、「篁日記」の小野篁が異母妹をはらませ結局は死にいたらしめるといった話のような深刻さはない。

A 歌意。みずみずしくて、いかにも寝ごこちのよさそうな若草を思わせる、そんなあなたを、いつかは、他人が自分のものとして契りを結ぶようになるだろうが、それを、私は、ほんとうに残念に思う。

B 語注。「はつくさの」は、相手の「わかくさ」をもじって用いたもので「めずらしき」の枕詞。「うらなく」は、「なんのへだてもなくすっかりうちとけて」「すっかり気を許して」の意。「ける」は勿論詠嘆。「驚いたわ・・・」という気持ちをくむ。

B 歌意。ねよげの若草だなんて、どうして妙なことをおっしゃるの。おにいさまがそんな変な気持ちで私のことを見ておいでとは知らなかったの、今までなんのへだてもなくうちとけて頼りになるおにいさまと思ってきましたよ (ほんとに驚いたわ)。⁽⁷⁾

4) 講談社・学術文庫・阿部俊子全訳注

底本は、天福本系統の三条西家旧蔵本で、岩波の大系本・講談社文庫本と同じである。

女性の執筆なので、女性の感性に注目される。

語釈。○「うら」草の葉末の意。ね(根)、わかくさ(若草)、むすばむ(結ばむ)とともに草の縁語。○「うら若み」「草の葉末が若々しく柔かみずみずしい」と「若々しくういういしい」の意の掛詞。若くういういしい場合の「うら」は「なんともいえずそんな感じがする」の意。○「結ばむ」「草枕として草を結ぶであろう」という意と「契りを結ぶであろう。情を交わすであろう」という意との掛詞。○「聞こえけり」申し上げた。兄弟であっても高貴な身分の人たち相互の間では敬語を用いる。○「初草の」「賞づ」「珍らし」の枕詞。○「うらなく」何の気もなく。なんの隔て心もなく。

訳。昔、ある男が妹のたいそうかわいらしい感じ様子であったのを見ていて、

A 葉末が若く柔かなのであつて若草の上に寝転んだらいかにも気持がよさそうに思われる、その若草をだれかがさつさと草枕に引き結んでねるだろうなあと思ひなる、ちょうど、そのように、なん

とも言えず初々しく若々しいので共寝をしたらいかにも感じがいいだろうと思われるあなたを、人が妻とすることであろうことを、私はほんとうに切なく惜しく思いますよ。

と申し上げた。返しの歌は、

B 早春に思いがけず見つけた若草とでもいうように、なんとまあめずらしく思いもよらないお言葉ですこと。私は兄弟だと思って今まで何のへだて心もなく考えておりましたのに、おどろきましたこと。

〈補説〉異母兄弟の間の話かもしれない。当時は異母兄弟姉妹の間では、結婚ということもあった。また同母兄弟の間でも、貴族の家庭ではいつも顔を合わせているわけではないからどうかした折、ふと成人した妹に女性としての新鮮な魅力を感じるということは、あったであろう。この場合、あまりしつように詮索する必要はないであろう。⁽⁸⁾

諸説が、その理由がわかりやすいように、語注や語釈、訳や余説まで、ほぼ、そのまま記した。まず、「妹」の解釈。「聞こえけり」の解釈に違いがみられ、どんな場面であるかはつきり捉えられていないようにみられる。全体的に、おおむね、「からかいの場」か、それに近い場面と捉えているようである。実際に、このように妹をからかったりするものであろうか。そういうことを含めて、どんな歌か明らかにしていきたい。

4、私説

1) 語意。

本稿のテキストは、天福2年正月22日に、藤原定家が校了を終えた天福本の三条西家旧蔵本による。定家自筆本は、元禄の末、柳沢吉保邸炎上の時に焼失した。

「妹」は、当時は、姉にも妹にも、「妹」と用いたというが、辞書的な意味では、確かにそうであろう。しかし、『伊勢物語』では、歌に「うら若み」「若草」「初草」と用いられているので、ようやく結婚適齢期になった年下の「妹」と考えることができる。

また、当時は、異腹の兄と妹ならば結婚できた。同腹の兄と妹、あるいは姉と弟は結婚できない。子供は、母のもとで育てられた、ということもあったであろうか。

「をかしげ」は、「をかし」に「げ」がついて、形容詞が名詞化された語。「をかし」は、平安中期以前は、好意的に興味をもって迎えたい気持ちで使うものが多い。岩波の『古語辞典』には、「①招き寄せたい。喜んで迎え入れたい。②興味が引かれる。面白い③美しくて心がひかれる。魅力がある。④可愛らしい⑤すばらしい趣がある。⑥面白くてつい笑いがこぼれる感じだ。⑦笑うべきである。変わっている。変だ。」⁽⁹⁾の7つの意味と用例をあげている。

『伊勢物語』が、『古今集』の業平の歌が天福本系では、209首のうち62首がみえる。『業平集』の作品を主に、業平とおぼしき人物を物語化したと考えられている。誰が、いつごろまでについては、諸説があるが、主な部分は、平安中期以前と考えられるので、このなかで、①③が、もっとも妥当であろうと思われる。

次に、歌のあとの散文部分の語意を考察する。

「と聞こえけり」の「聞こえ」は、(1)《聞きの自発・可能・受身の形。エは自然にそうなるの意》①(自然に)耳に入る。②(人人の)耳に入る。評判である。③(耳に入って)区別できる。(わけが)わかる。④心得できる。

(2)《貴人に対して、自分の思う通りに直接に物を言うのは失礼だったので、誰の意志ともなく自然に(相手の)耳に入る意に用いて謙讓表現とした》①申し上げる。②お手紙を差し上げる。③お願

い申し上げる。④名を・・・とお呼びする。⑤差しあげる。⑥《貴族の間では互いに丁寧な表現をするので、親から子へ、夫から妻へも用いられる》お話す。⑦《中世の用法》①言ってきかせる。⑧(声を)出す。⁽¹⁰⁾

とある。このうち(1)の①の意も考えられ、「と妹に聞えた」意に解せられる。そして、講談社文庫の森野宗明のように、「敬意の表出者が作者であって男ではないことを見落としている」として「聞こえるように言う」意として試訳しているのは、すでに述べた通りである。

(2)の意は、謙譲表現で、普通、「申し上げる」意を取っている。この場合、「をとこ」の身分が低く、女性の身分が高いことになる。しかし「をとこ」は「業平を主人公として書かれた物語」とみるならば、業平は、平城天皇の皇子阿保親王の第5子であり、母は桓武天皇の皇女、つまり平城天皇の妹の伊登内親王である。「をとこ」も決して、身分は低くない。とすると、互いに身分は高いことになる。すると(2)の⑥にあてはまる。身分の高い「をとこ」が腹違いの「妹」に「お話した」の意になる。これは、『伊勢物語』が、「業平を主人公とする物語」であるという前提条件を抜きにしては、読めないことになる。そして、私が、「と聞こえけり」が、「と妹に聞えた」と解釈しないのは、歌のあとに「と聞こえけり」とある場合、歌の作者が「と詠んだ」「と言った」という意であるのは、こうした場合の通例になっているからである。たとえば、第1段は、「となむをいつきていひやりける」「といふ歌の心ばへなり」、第4段、「とよみて」、第5段、「とよめりければ」、第7段、「となむよめりける」、第8段、「とよめりければ」、第10段、「となむ」、第11段、「とよめりけるをきゝて」、第14段、「といへるに」「といへりければ」というように、歌を詠んだ人が主体になる。

Aの語意。「うら」は、「心」の意と「裏」の意がある。「裏」の意が、「内側・なか」の意となり、「人に見えない内心の心」の意に変化して行ったらしい。多くは、形容詞や動詞と複合する形をとる。「若み」は、「若し」のミ語法で、原因や理由を表わす。若いので、の意。ここは、形容詞との複合語となる。また、別語で、ウレの古形の「末^{うら}」がある。端とか先端の意で「若草」の縁語となる。両語は、掛詞になっている。「寝よげ」は、「寝よし」の形容詞に「げ」がついて名詞化された語。「寝」は「根」をかけ、「若草」の縁語。「若草」は、「妹」の比喩。「ひと」は、ほかの人で、ほかの男性をさす。「結ぶ」は、「若草」を結ぶ意と、契を結ぶの意の掛詞。共寝をする方に重きがある。「む」は推量。「し」「ぞ」は、強意で、二重の強意。

Aの意。葉末まで若いので共寝をしたらよさそうに見える若草、その若草を人が約束しいつか共寝をしようことをことさら思う。

Bの語意。「初草」は、「新しく生ひ出たばかりの草。幼少なことをあらわすのに使うことが多い。「をとこ」の比喩。「など」は、副詞として、どうして、なぜの意。第二の意としては、名詞として、謎、なぞなぞの意がある。

「めづらし」は、①もっと見たい、逢いたい、聞きたいの意。②稀に見る事聞くことが嬉しい。喜ばしい。③見馴れないので、新鮮に感じられて心をひかれる。④なかなか逢えない。稀にしか機会がない。⑤今まで他にない。今まで例がない。めったにない。⁽¹¹⁾「言の葉」は言葉。「葉」は、「初草」の縁語。

「うらなく」は、形容詞、「うらなし」の連体形。「うら」に、心、裏を掛ける。「心^{うら}無し」は、《ウラは人に見えない内情。何の考えもない虚心の状態である。》①(気がね、遠慮、心配などがなく)無心である。②腹蔵がない、隠しだてがなく、何でも人にあらわにしてしまう。⁽¹²⁾「裏無し」は、上の句から続いて、言葉に裏がないの意。「初草」の縁語。「物を思ひ」は、恋の物思い。胸のうちに抱いて、じっとたくわえている点に中心をおく。「ける」は、改めて気付いた意。「かな」は詠嘆。

Bの歌意。生い出たような初草のようなあなたが、何と何度でも聞きたいような嬉しい言葉でしょう。その言葉には裏はなく、私は無心であなたを思っていることに気がきました。

ついでに散文部分を訳すと、

むかし、腹違いの妹が美しくてところがひかれるようになったのを見ていて、

と申し上げた。その返事。

という意になる。「腹違いの妹」と訳したが、返事の「初草」からすれば、腹違いの姉と弟かも知れない。どちらにしても、身分の高い貴人同士と考える。そして、「をとこ」が妹にプロポーズをし、その意を汲んだ「妹」が、嬉しく思って、私もあなたを思っていた、と答えたのである。

私と同じような解釈は、朝日新聞社刊の南波浩校注『竹取物語・伊勢物語』である。Aの本文は「人の結ばむ」は、塗籠本によって、「結ばぬ」としている。そして、「人がたばね、枕として旅寝などしないやうに（人が契りを結んで妻になどしてしまはしないやうに）⁽¹³⁾と訳している。私と同じようなのは、Aの訳である。

Aの訳。まあなんと思ひがけない珍しい（初草のはめづらしにかかる序詞）お言葉ですこと、それほど私をいとほしく思ってみて下さったとは思ひもせず、何心なくうちとけて甘えておりましたわねえ。⁽¹⁴⁾

そして、「ただ兄妹として何心もなく接してゐた兄から、はじめて自分を異性として見た、愛慕の情のこもる言葉を聞き、兄の愛情への、おどろきと同時に感謝の感懐である。」⁽¹⁵⁾と釈文を書き、「表面やや好色的な匂ひがするが、親しい兄妹の仲で、へだてなく冗談めいた言葉の中に、妹を愛し可愛く思ふ兄の情愛を汲みとるべきであらう。男の歌の表現が表現だけに、年若い女としてすぐに感謝の返歌をしたととるには、やや無理かと思はれるが、“まあ、いやだわ”と言ひながらも、兄の情あふれる本意を知って、兄への信頼を感じての返歌である」⁽¹⁶⁾と補注にいう。

当時、若い女性は、多くは母のところにおいたので、いつも会うことはなかった。母に挨拶などで会いに行ったり、年中行事などで行ったりした時に、たまたま会う事がある位なのである。そんな事で、しばらくぶりに見た妹が、いよいよ娘らしくなった、と思い、よくよく見たのであろう。以前から心に止めており、そして、プロポーズの時だと思い、直接には言いにくいので、他の人の妻になるのは、残念だと間接的に言ったのである。

5、『源氏物語』総角673番歌

テキストは、小学館『源氏物語13』椎本・総角〈古典セレクション〉による。

匂宮が女一の宮に戯れる場面である。

在五が物語描きて、妹に琴教へたるところの、「人の結ばん」と言ひたるを見て、いかが思すらん、すこし近く参り寄りたまひて、「いにしへの人も、さるべきほどは、隔てなくこそならはしてはべりけれ。いとうとうとしくのみもてなさせたまふこそ」と、忍びて聞こえたまへば、いかなる絵かと思すに、おし巻き寄せて、御前にさし入れたまへるを、うつぶして御覧ずる御髪のうちなびきてこぼれ出でたるかたそばばかり、ほのかに見たてまつりたまふが飽かずめでたく、すこしももの隔てたる人と思ひきこえましかばと思すに、忍びがたくて、

若草のねみむものとは思はねどむすぼほれたる心地こそすれ

(略) ことしもこそあれ、うたてあやしと思せば、ものものたまはず。ことわりにて、「うらなくものを」と言ひたる姫君も、ざれて憎く思さる。⁽¹⁷⁾

女一の宮と匂宮は、今上帝と明石の中宮の間に生まれた同母の姉と弟である。紫の上が2人を手元から離さず育てたので、多くの兄弟姉妹のなかでも他人行儀がなく、親しく思っているのである。この場面は、『伊勢物語』の49段をふまえて語られているのは確かである。つまり「をとこ」が匂宮で、「妹」

を女一の宮に見立てて、匂宮が歌を贈った場面である。

語意の主なもの。「在五が物語」の「在五」は在原氏の5男業平のことで『伊勢物語』をさす。「人の結ばむ」は、『伊勢物語』Aの歌にある語。「さるべきほどに」は、親しくしてもよい肉親の間柄。『伊勢物語』を踏まえていう。「うとうとしく」は、他人行儀。「すこしもの隔てたる人」は、せめて異腹の姉弟であったら、の意。「ましかば」は、反実仮想の構文で「うちとけきこえましを」が省略されている。

ここまでの意は、

『伊勢物語』の絵で妹に琴を教えているところの歌の「人の結ばん」と言っているのを見て、匂宮は、どう思ったのか、「昔の人も姉弟の仲でしたら、つねづね隔てを置かないのが習わしでした。たいそう他人扱いされるのが……」と小声で話すと、女一の宮は、どんな絵なのかと思ったようなので、巻いて几帳の下から、お前におさし入れになると、うつむいてごらんになり、御髪が波打ってこぼれる、その姿を少しばかり拝見し、いつまで見ても美しいくらいなので、これが、少し血のつながりの遠い異腹の姉弟だったら、と思うと、こらえきれなくなって、の意となる。

歌は『伊勢物語』のA、「をとこ」の歌を本歌としている。

歌意は、若草のように美しいあなたと共寝をしようとは思いませんが、悩ましく晴れやらぬ心地がします、という意。

同母の姉弟の関係であるのは知っていて、結婚は出来ないけれど、悩ましい私の気持ちは晴れません、と伝えたのである。

歌のあとの語意。「ことしもこそあれ」は、ほかにおっしゃりようもありましように。「うたてあやし」は、ますます変だ。「うらもなくものを」は、『伊勢物語』の妹の歌の語。「姫君」は、その妹。「ざれて」は、たわむれる、ふざける意。「憎し」は、癩にさわる、腹立たしい意。ほかにも、動詞連用形を受けて、……するのが……すらすらと行かない意や癩にさわるほど、あっぱれである意もある。ここは、『伊勢物語』の妹に嫉妬もあるか。

歌のあとの文の意。ほかにも言いようもあろうに、ますます変だ、と思ったので、何もおっしゃらない。それも、もつとものことと思われるので、「うらもなくものを」と答えた『伊勢物語』の姫君が物わかりがよく癩にさわる。

『伊勢物語』では、妹がすぐに歌を返した。ところが女一の宮は、すぐに返すことができない。あれこれ考えるだけだったのである。『伊勢物語』の妹が羨ましかったのである。まして、『伊勢物語』では、異腹の兄妹だから結婚でき、『源氏物語』では、同母の姉と弟だから結婚はできないのである。

さて、『源氏物語4』では、『伊勢物語』を、どう解釈していたのであろう。

大系本『源氏物語』4は、「“事しもこそあれ。うたて、あやし”と、思せば」の注を「“言う事と言っても、外に、いかにもある。大層、変な事である”と御思いであるから」として、「ことわりにて、“うらなく物を”と言ひたる姫君も、ざれて憎くおぼさる」を「道理なので、“分け隔てなく考えていた”と言った、伊勢物語中の姫君の態度も（自分の態度は勿論）、あだっぼい（風流過ぎている）ので、匂宮は、自然に憎らしいと思われなされるのであった。」⁽¹⁸⁾とする。「ざれて、憎くおぼさる」のは、匂宮のこととしている。

玉上琢彌の『源氏物語評釈10橋姫・総角』では、「他におっしゃりようもあろうに、いやな変なことを、とお思いなので、口もおききにならない。無理もなく、“うらなくものを”と答えた姫君も、ふざけて憎いと思ひになる。」⁽¹⁹⁾と訳す。穏当な訳である。しかし、この訳だけでは、「ざれて、憎く思さる」主体がはっきりしない。

與謝野晶子は、「不快なことを言うものであると思す姫君は、何もお言ひにならないのであった。この理由から「うらなく物の思はるるかな」と答えた妹の姫も蓮葉な気があそばされて好感をお持ち

になることができなかった。」⁽²⁰⁾と訳す。晶子は、女一の宮のことと考えている。

今井忠義は、講談社学術文庫の『源氏物語』全現代語訳17で次のように訳す。「姫宮はほかに唸りようもあるだろうのに、嫌に変な詠みっぷりをなさることだなあとお思いになるので何もおっしゃらない。匂宮も御もつともなことだとお思いになって、「うらなく物を（こちらは何の隔てもない気持ちでございましたのに）」と返歌したあの物語の姫君も、洒落気が過ぎて嫌だなあと思わないではいらつしやれない。」⁽²¹⁾と訳し、匂宮のこととしている。

小学館のセレクション本は、「匂宮には、つつましく黙ったままの女一の宮が好ましく感じられるにつけて、好色な歌を詠みかけられて、すぐ歌を返して兄をやりこめた女（『伊勢物語』の）は、しゃれっ気が多すぎて不愉快に感じられる。」⁽²²⁾と注して、「物分かりがよすぎてかわいげがないとお思いになる」⁽²³⁾と訳している。これは、おそらく、注釈者と訳者が違うのであろうか。「ことわりにて」以下を、注は匂宮と考えているようであるが、女一の宮が「ものをのたまはず」に続いているので、女一の宮の心中とも考えられる。さらに言えば、紫式部の心中とも考えられるけれども、女一の宮の心中とするのが妥当であろう。「ことわり」の語義は、①条理。道理。常道。②当然。当り前のこと。もつとものこと。③判断。④筋道を立てた説明。⑤前以て筋を立てて事情を説明すること。あらかじめ相手の諒解を求めて行なう説明。⑥拒絶の意がある。⁽²⁴⁾このうち①②の意にとるべきであろう。

6、結論

以上の5冊の書籍からすると女一の宮とするのが2冊、匂宮をするのが2冊、不明が1冊であるが、注で匂宮としているのがあるので、匂宮の方が優勢に見える。しかし、学問的なことは、数の多さでは決まらない。

しかしながら紫式部が何故、『伊勢物語』から、『源氏物語』に取り上げたか、ということである。まず、『伊勢物語』の「をとこ」の色好みは、貴賤や老若を問わない。腹違いであれば、姉妹を問わない。また、醜美や容姿は問わないのである。これは、性に悩み、苦しんでいる女性の悩みや苦しみを取り除く、ということである。たとえ、他に用事があつたとしても女性から声をかけられれば交わりを結ぶのである。これは、まさに菩薩の化身というよりほかはない。

ところが、『源氏物語』の色好みは、美人で教養があつて、歌や楽器や歌作や書が上手く、たしなみのある女性である。その女性は、少なくとも受領階級（地方官の長、今で言えば県知事）以上の女性である。それが貴族のステータスであり、遊びでもあつた。勿論、一夫多妻であつたから、気に入った女性がいれば、何人目かの妻にした。

しかし、『伊勢物語』の「をとこ」は、それほどの経済力はないのであろう。そして、「妹」が出てくるのは、49段だけである。

そして、『伊勢物語』で、異母の兄と妹であつたのに対して同母の姉と弟の設定にした。設定を変えることによって、物語は違ってくる。『伊勢物語』では異腹の兄と妹であつたために、プロポーズもできたし、結婚もできた。しかし、『源氏物語』では、同腹の姉と弟なので、プロポーズも結婚もできない。匂宮は、そのことを知らなければ、『伊勢物語』的に物語を進められたかもしれない。しかし、匂宮は、当然のことながら知っていた。

それで、『伊勢物語』の「をとこ」の歌の「うら若み寝よげに見ゆる若草を」という上の句を、「若草のねみむものとは思はねど」と詠み替えた。「若草」は女一の宮である。『伊勢物語』を踏まえているので、「共寝をしたら気持ち良さそうに見える若草、その女一の宮とは寝てみたいとは、思わないけれど」の意になる。これは同腹の姉と弟であるからこう詠わねばならない。『伊勢物語』の歌の下

の句「ひとの結ばむことをしぞ思ふ」に対して、「むすぼほれたる心地こそすれ」と詠うほかはなかった。しかし、『伊勢物語』を踏まえているので、「私ではない他の人と契を交わすのが残念に思うので、悩ましく心が晴れない」意となる。

紫式部は、『伊勢物語』とは設定をかえつつ、歌は、『伊勢物語』の歌を踏まえるだけでなく、『伊勢物語』の歌に重ねて、二重に詠んだのである。『伊勢物語』の歌と重ねて訳すことによって、『源氏物語』の歌意がわかるように歌が作られている。ただ女一の宮には、わからなかった、という設定で、『源氏物語』は書かれている。ということは、『源氏物語』は、『伊勢物語』の（私の）解釈をも包みこんで書かれている、ということになる。つまり、語注や語釈、訳ばかりではなく、紫式部が『伊勢物語』を読んで、どう設定し、どのように『源氏物語』の本文や歌を詠んだかが理解できないと、真に解釈はできないのであった。

〈参考文献〉

- 1) 大津有一・築島裕校注『竹取物語・伊勢物語・大和物語』〈岩波古典文学大系9〉岩波書店 昭和32年10月 139ページ。
- 2) 中河與一訳注・現代語訳付『伊勢物語』〈角川文庫〉角川書店 昭和28年7月 43ページ。
- 3) 2) に同じ。157～158ページ。
- 4) 1) に同じ。
- 5) 森野宗明校注・現代語訳付『伊勢物語』〈講談社文庫〉講談社 昭和47年8月 49ページ。
- 6) 5) に同じ。106ページ。
- 7) 5) に同じ。222～223ページ。
- 8) 阿部俊子全注釈『伊勢物語上』〈講談社学術文庫〉講談社 昭和54年8月 186ページ～188ページ。
- 9) 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典〈補訂版〉』岩波書店 平成11年2月 1543ページ。
- 10) 9) に同じ。365～366ページ。
- 11) 9) に同じ。1304ページ。
- 12) 9) に同じ。195ページ。
- 13) 14) 15) 南波浩校註『竹取物語・伊勢物語』〈日本古典選〉朝日新聞社 昭和35年7月 303ページ。
- 16) 13) に同じ。381ページ。
- 17) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 校注・訳『源氏物語13椎本・総角』〈古典セレクション〉小学館 平成10年10月 216～218ページ。
- 18) 山岸徳平校注『源氏物語4』〈日本古典文学大系17〉岩波書店 昭和38年4月 444ページ。
- 19) 玉上琢彌『源氏物語評釈10橋姫・総角』角川書店 昭和42年11月 1467ページ。
- 20) 與謝野晶子訳『全訳源氏物語（下巻）』〈角川文庫〉角川書店 昭和47年2月 211ページ。
- 21) 今泉忠義『源氏物語 全現代語訳18』〈講談社学術文庫〉講談社 昭和53年11月 113ページ
- 22) 17) に同じ。218～219ページ。
- 23) 17) に同じ。219ページ。
- 24) 9) に同じ。520ページ。

「学び続ける」社会の実現を目指す生涯学習研究センター
— 地域コミュニティの核になって —

古市 勝也
九州共立大学スポーツ学部教授

ブストス・ナサリオ
桜花学園大学保育学部教授

キーワード：予測困難な時代・学び続ける社会の実現・地域における学び直し・
地域コミュニティの中核

THE LIFELONG LEARNING CENTER OBJECTIVE :
A LEARNING SOCIETY
— BECOMING THE COMMUNITY'S CENTER

Katsuya FURUICHI
PROFESSOR, DEPARTMENT OF SPORTS SCIENCE
KYUSHU KYORITSU UNIVERSITY

Nazario BUSTOS
PROFESSOR, FACULTY OF EARLY CHILDHOOD CARE AND EDUCATION
OHKA GAKUEN UNIVERSITY

ABSTRACT

In this paper, we discuss the ways in which the University Lifelong Learning Center should change in order to realize a permanent learning society. What is needed in our difficult times is a university which is able to prepare continuing learning minded people at the time that becomes the center of its community in order to offer lifelong learning opportunities

The university must also become the 'center of the community' and make the students to participate in the solution of the community problems and in this way to gain credibility from the citizens.

Key word: difficult times, permanent lifelong learning society, center of the community

1. 緒論

なぜ今、「学び続ける社会の実現」か。「学び続け」・「教育がエンジンとなって地方創生」する社会づくりが叫ばれている。本論は、「学び続ける」社会の実現を目指して、大学の生涯学習研究センターの求められる機能・役割について考察したい。

さて、教育関係者にとって「『教育がエンジンとなって地方創生』する社会づくり」とは、嬉しい、“カッコいい”表現である。いったい誰が言い出したのか。根拠はどこか調べてみると、平成27年3月4日「教育再生実行会議」の「『学び続ける』社会、全員参加型社会、地方創生を実現する教育の在り方について」(第6次提言)¹⁾にあった。そこには、「1. 社会に出た後も、だれもが「学び続け」、夢と志のために挑戦できる社会」、「2. 多様な人材が担い手となる『全員参加型社会』へ」、「3. 教育がエンジンとなって『地方創生』を」掲げているのである。

では、「学び続ける」とは、どういうことか。「学び続けること」はなぜ必要か。

佐々木毅(元東京大学総長)は、「『学ぶ』とは人生を何度も生きるために『学び続ける』ことである」²⁾としている。

ハッチンスはその著『ザ・ラーニング・ソサエティ』³⁾の中で「学習社会」とは、「学習、達成、人間的になることを目的とし、あらゆる制度がその目的の実現を志向するように価値の転換に成功した社会」としている。

さらに、1972年のユネスコ教育開発国際委員会報告書『フォール報告書』⁴⁾では、「人間は存在を続け、また進化していくために、間断なく学習をしていかざるを得ないのである」としている。ここでは、「学習者は、教育の客体から自己教育の主体にかえる」、「財産・知識・地位・権力などを『持つための学習』(learning to have)から、自己の能力を発揮する『在るための学習』(learning to be)への転換が求められる」としているのである。

すなわち、学び続けるとは、「人間の学び(学習)を一生涯続けることであり、より人間が人間らしく生きて行くための行為・行動である」と言えよう。

では、今社会は「学び」をなぜ求めるのか。学習の必要性は何か。まず、社会を取り巻く状況を見よう。

教育基本法に基づく「第2期教育振興基本計画」(期間：平成25年～29年度)⁵⁾で、「我が国を取り巻く危機的状況」を挙げている。そこでは、まず「我が国の様々な強み」として「○多様な文化・芸術や優れた感性、○勤勉性・協調性、思いやりの心、○科学技術、『ものづくり』の基盤技術、○基礎的な知識技術の平均レベルの高さ、○人の絆」を挙げている。しかし「危機的状況」として「○少子化・高齢化の進展→社会全体の活力低下、○グローバル化の進展→我が国の国際的な存在感の低下、○雇用環境の変容→失業率、非正規雇用の増加、○地域社会、家族の変容→個々人の孤立化、規範意識の低下、○格差の再生産・固定化→一人一人の意欲減退、社会の不安定化、○地球規模の課題への対応」を挙げている。そして、このような危機的状況を乗り越え、持続的に発展するための「今後の社会の方向性」として「『自立』『協働』『創造』の3つの理念の実現に向けた生涯学習社会の構築」を目指すとしている。すなわち、「生涯学習社会の構築」が求められているのである。

では、ここで「学び続ける必要性と効果」についてみてみよう。

平成24年3月26日の中央教育審議会大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」(審議まとめ)⁶⁾では、「1 予測が困難な時代と大学の責務」の中で「経済を中心とするグローバル化や少子高齢化、情報化といった急激な社会の変化の中、労働市場や産業・就業構造の流動化などによって将来予測が困難になっている今の時代を生きる若者や学生にとって、大学での学修が時代を生き抜く基盤となるかどうかは切実な問題である。予測困難

という点は産業界や地域社会にとっても同様であり、変化に対応したり未来への活路を見いだしたりする原動力となる有為な人材の育成を大学に求めるようになってきている。」としている。すなわち今や、急激な社会の変化の中で、将来予測困難な時代になっており、「生涯学び続ける」ことによって、「変化に対応したり未来への活路を見いだしたりする原動力となる有為な人材の育成」を目指そうとし、学びによる効果を求めているのである。

さらに、平成24年8月28日の中央教育審議会（以下、中教審という）答申の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」の「1 大学の役割と今回の答申の趣旨」の中で、「グローバル化や情報化の進展、少子高齢化等、社会の急激な変化は、我が国社会のあらゆる側面に影響」し「将来の予測が困難な時代」になっており、「大学改革に対する期待の高まり」⁷⁾として「産業界や地域社会は予測困難な時代を切り開く人材や学術研究に期待」するとしている。

また、平成27年6月4日、文部科学大臣の下村博文は「日本創生のための教育改革」（産業競争力会議課題別会合（第7回））の中で、「日本創生のための教育改革」として「子供たちの未来」は「工業化社会から、『新しい知』や『価値の創造』が求められる情報化社会に大きく変化」するとしている。そして「これからの時代に必要となる資質・能力＝『真の学ぶ力』」として「○主体的に課題を発見し、解決に導く力、○創造的な発想力、直観力、○他者と協働するためのリーダーシップやチームワーク、○コミュニケーション能力、豊かな感性や優しさ、思いやり、○多様性を尊重する態度」を挙げており、「これからの時代に必要となる資質・能力」が示されている。さらにそこでは、「今後の方向性」として「我が国が成長・発展し続けるには、より多くの人々が社会的・職業的に自立し、たくましく生き抜いていけるよう、『真の学ぶ力』を身に付け、生涯にわたり学び続けることが必要」⁸⁾としている。すなわち、「我が国が発展し続ける」には、『真の学ぶ力』を身に付け、「生涯にわたり学び続ける」その効果によって達成できるのである。

2. 「学び続ける」社会づくりへのシステム改革

では、「学び続ける」社会づくりへのシステム等の改革はどうしたらいいのか。人々の一生涯の学びを目指す「生涯学習社会の構築」の観点から、主に大学改革を見てみよう。

教育基本法（平成18年12月22日法律第120号）を踏まえた、平成25年6月14日（閣議決定）の「第2期生涯学習振興基本計画（平成25年度～29年度）」では、「第2部 今後5年間に実施すべき教育上の方策～四つの基本的方向性に基づく、8の成果目標と30の基本施策～」⁹⁾を掲げている。その「基本的方向性」「1. 社会を生き抜く力の養成」の「(2) 主として高等教育段階の学生を対象とした取組」として、「成果目標2 課題探求能力の修得」の中で「基本施策8 学生の主体的な学びの確立に向けた大学教育の質的転換」、「基本施策9 大学等の質の保証」を提言している。

「基本的方向性」の「2. 未来への飛躍を実現する人材の養成」では、「成果目標5 社会全体の変化や新たな価値を主導・創造する人材等の養成」の中で、「基本施策14 優れた才能や個性を伸ばす多様で高度な学習機会等の提供」、「基本施策15 大学院の機能強化等による卓越した教育研究拠点の形成、大学等の研究力強化の促進」、「基本施策16 外国語教育、双方向の留学生交流・国際交流、大学等の国際化など、グローバル人材育成に向けた取組の強化」を提言している。

「基本的方向性」の「4. 絆づくりと活力あるコミュニティの形成」では、「成果目標8 互助・共助による活力あるコミュニティの形成」の中で「基本施策20 絆づくりと活力あるコミュニティの形成に向けた学習環境・協働体制の整備促進」、「基本施策21 地域社会の中核となる高等教育機関（COC構想）の推進」を挙げている。

また、「Ⅱ 四つの基本的方向性を支える環境整備」の「基本施策26 大学におけるガバナンス機能の強化」、「基本施策27 大学等の個性・特色の明確化とそれに基づく機能の強化（機能別分化）の推進」、「基本施策28 大学等の財政基盤の確立と個性・特色に応じた施設整備」等を挙げている。

特に、地域の生涯学習活動の拠点として期待されている大学の生涯学習研究センターとの関連を見てみたい。

「成果目標8 互助・共助による活力あるコミュニティの形成」では、「個々人の多様な学習活動の実施や参画を通じ、家庭や地域のネットワークを広げ、互助・共助による活力あるコミュニティを形成する。特に、学校や社会教育施設等を地域の振興・再生に貢献するコミュニティの中核として位置付け、多様なネットワークや協働体制を整備し、個々人の地域社会への自律的な参画を拡大する。」としている。

その「成果指標」の「高等学校・生涯学習関係」として「①大学における地域企業や官公庁と連携した教育プログラムの実施数の増加」、「②地域の企業等（同一県内企業又は地方公共団体）との共同研究数の増加」、「③地域課題解決のための教育プログラム（短期プログラム、履修証明等）の増加」、「④震災ボランティアを含めた地域における学生ボランティアに対する大学等の支援状況の向上」、「⑤地域に向けた公開講座数や大学開放（体育館、図書館等）の状況の向上」を挙げている。

また、「5年間における具体的方策」の「基本施策20 絆づくりと活力あるコミュニティの形成に向けた学習環境・協働体制の整備推進」では、その「主な取組」の「20-4 地域における学び直しに向けた学習機能の強化」を提言している。そこでは「大学等の高等教育機関は、本来、地域における生涯学習の拠点としての機能を有しており、その自主的な判断の下、生涯学習センター等も活用しながら、地域支援人材等を養成する人材認証制度の整備や学び直しの場合としての公開講座の充実等、機能強化を促進する。」とし「大学等は、生涯学習センター等も活用しながら、地域支援人材等を養成する人材認証制度の整備や学び直しの場合としての公開講座の充実等、機能強化」に期待していることが伺える。

「また、テレビ・ラジオ放送による授業を実施し、各都道府県に学習センターを設置している等の特性を有する放送大学が、地方公共団体や他大学等と連携した授業科目や公開講演会等の充実を図り、社会人等が学びやすい学習環境を整備することを促進する。」としている。ここでは、「地域における学び直し」として「大学等の高等教育機関の役割機能強化」が挙げられている。

また、「基本施策21 地域社会の中核となる高等教育機関（COC構想）の推進」では、「基本的考え方」の中で「○知的創造活動の拠点である大学等は、地域の中核的存在（Center of Community）である。」とし、「大学等は、地域の中核的存在で在る」と位置づけている。その上で「これらの高等教育機関が有する様々な資源を活用して、地域が直面している様々な課題解決に取り組むことにより、教育研究機能の向上に資するとともに、地域の活性化にもつながることから、このような活動に対し、一層の支援を行う。」としている。ここでは、「大学等の様々な資源を活用して、地域課題解決に取り組むことにより、教育研究機能の向上に資するとともに、地域の活性化にもつながる」とし、大学等と地域双方の効果を提言しているのである。

その「主な取組」として「21-1 COC構想を推進する高等教育機関への支援」を提言している。そこでは、「大学等は、教育研究を行うとともに、これらの成果を基にした公開講座の開催や産学官連携による産業振興、スポーツの推進、防災や環境保全、地域医療・公衆衛生、健康増進、過疎対策など、社会や地域における様々な課題解決に取り組んでおり、地域の再生・活性化に貢献している。」としている。

ここでは、大学等は、教育研究の成果を基にした公開講座の開催や産学官連携による産業振興、スポーツの推進、防災や環境保全、地域医療・公衆衛生、健康増進、過疎対策など、社会や地域におけ

る様々な課題解決に取り組んで、地域の再生・活性化に貢献していると認めているのである。

その上で「今後は」、「地域の実情に応じて、学部学科や専門分野の枠を超えて、地域の高等教育機関が全学的に連携し、様々な資源を活用しながら地域を志向した教育・研究・社会貢献活動を行うことを支援することで、解決困難な地域の諸課題に対して、学生が課題解決に参画したりするなど、地域との相互交流を促進し、地域から信頼される地域コミュニティの中核的存在（COC）としての機能強化を図る。」としているのである。

すなわち「今後は」、「学部学科や専門分野の枠を超えて、地域の高等教育機関が全学的に連携」し、「様々な資源を活用しながら地域を志向した教育・研究・社会貢献活動を支援」する。また、「解決困難な地域の諸課題に対して、学生が課題解決に参画」し、「地域との相互交流を促進」し、「地域から信頼される地域コミュニティの中核的存在（COC）としての機能強化」を図るとしているのである。

また、「子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた（中略）教育システムの構築」も提言されている。

平成26年12月22日の中教審答申「子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築について」¹⁰⁾によると、その冒頭の「はじめ」の中で、「我が国においては、高齢者人口が増大する一方で生産年齢人口は減少し続けるなど、主要先進国でもまれに見る速さで少子高齢化が進んでいる。また、グローバル化の進展に伴う国際競争の激化や人、物、情報の国境を越えた流通が進んでいる。」と現状を分析している。そして今後の方向として「こうした厳しい時代を生きる子供たちは、自らの手で自らの人生を切り拓くとともに、多様な価値観を受容し、共生していくことが求められる。」としながら「このため、子供たちが十分な知識や技能を身に付け、十分な思考力や判断力、表現力を磨き、主体性をもって多様な人々と協働することができるよう、子供の能力や可能性を引き出すとともに自信を育む教育の実現が急務となっている。」としている。

また、こうした教育の実現する具体的制度として、1つには「小中一貫教育の制度化」、2つには「3つの制度改善（①大学への飛び入学制度の積極的活用、②多様な留学生の受け入れを積極的に推進、③一定の要件を満たす高等学校専攻科から、大学への編入学の途を開くための必要な措置を講じる）（①～③は筆者挿入）」を提案している。

さらに、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革」や「学習指導要領等の見直し」など、「教育の内容・方法等を含めた一連の教育改革が総体として目指すべきものである」（「」は筆者が挿入）としている。

では、どのような変革を求めているのか。先に述べた、下村博文（文部科学大臣）の「日本創生のための教育改革」（産業競争力会議課題別会合（第7回）、平成27年6月4日）の、「我が国の成長のための人材育成に貢献する高等教育への転換」¹¹⁾の中で「現在の課題」として「○学部・大学院のいずれにおいても、我が国の経済成長や労働生産性の向上を支える人材の育成を重視する大学等の層を厚くするとともに、働き手が自身のキャリアアップのためにいつでも学び直しを行うことができる環境を整備して行くことが必要」とし、「人材の育成を重視する大学等の層を厚くする」と「学び直しを行うことができる環境を整備」の必要を挙げている。

その上で、「今後の方向性」として「大学学部等の段階」では4点示している。1つには「『職業実践力育成プログラム』認定制度の創設」として、「○大学、大学院、短期大学及び高等専門学校における実践的・専門的なプログラムを文部科学大臣に認定し、高等教育における職業人養成機能を強化」を挙げている。さらに「これにより、①社会人の学び直しの選択肢の可視化、②大学等における社会人や企業等のニーズに応じたプログラムの提供促進、③企業等の理解促進を図り、大学等において社会人が職業に必要な能力の向上を図る機会を拡大」することを挙げている。

2つには「大学等におけるインターンシップの充実」として「○インターンシップの単位認定や、

より教育効果の高いインターンシップ（中長期、有給等）の普及、促進」を挙げている。

3つには「『実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関』の制度」の中で「産業界と協働して教育課程を実践する新たな高等教育機関を制度化（大学体系に位置付け、学位授与機関とすることを含めた検討）」するとしながら「○社会経済の変化に伴う企業からの人材需要に即応した質の高い職業人養成の量的拡大」、「○高等教育体系の多様化（高校生の進路選択肢の拡充）」、「○社会人の学び直しに関する多様な機会の提供」を挙げている。

4つには「専修学校と産業界が連携した教育体制の構築」として「○企業・業界団体等のニーズを踏まえた専門人材の養成」、「○企業と連携しつつ学習と実践を組み合わせる教育システム（産学協同教育プログラム）構築に向けたガイドラインの作成」を挙げている。

さらに、「大学院段階」では、「専門職大学院における高度専門職業人養成機能の抜本的強化」として、「制度発足から10年余り経過したことを踏まえ、グローバル化及び教育の質保証に対応した専門職大学院の制度全体の検証と見直し等を行い、高度専門職業人養成機能の抜本的強化を図る」としている。

特に、「我が国の成長のための人材育成に貢献する高等教育への転換」の「具体的施策」では、「『職業実践力育成プログラム』認定制度の創設」として、「○大学・大学院・短期大学・高等専門学校における社会人の学び直しを促進するため、大学等における実践的・専門的なプログラムを国が認定する『職業実践力育成プログラム』認定制度の創設」を掲げている。そして、「今後の検討事項」として「○プログラムの認定要件の設定（双方向授業など実践的な方法による授業、社会人が受講しやすい工夫、企業との連携等）」、「○プログラム認定校を活用した社会人に対する経済的支援」を挙げている。

また、その「今後の検討課題」として「□実施期間や経費負担、報酬支給の扱い等、大学等における実態を調査し、多様なインターンシップの在り方を検討」することや、「□教育目的に応じた、最も効果的なインターンシップの実施を推進」することを挙げている。

すなわち、「職業実践力育成プログラム」認定制度の創設や、「大学等におけるインターンシップの充実」は、大学にとって喫緊の課題である。

3. 大学における生涯学習研究センターの現状分析（事業概要から）¹²⁾

では、大学における生涯学習研究センターの現状はどうなっているだろうか。本学を見てみよう。

(1) 設置目的

本学の生涯学習研究センターは、九州共立大学・九州女子大学・同短期大学の3大学の共管によるセンターとして位置づけられる。学則（九州共立大学学則第5条・九州女子大学学則第6条・九州女子短期大学学則第6条）においても「本センターは、社会人及び学生に対し多様な学習の機会と場を提供し、大学における生涯学習に関する研究を行い、もって地域における生涯学習社会の実現を図るため設置されたものです」となっている。

以下は事業の概要である。

(2) 公開講座

ア. 個別専門講座（個別の学問領域の連続したプログラムを個人または専門家のチームが担当する）

：30講座

コース名	語学コース	文学コース	芸術コース	スポーツコース	音楽コース
講座数	10 講座	5 講座	3 講座	4 講座	8 講座

イ. 市民講師講座（市民が今までの学習の成果（知識・特技）を活かして講座を開講する）：8講座
ウ. 大学図書館講座：1講座

(3) センター主催事業

ア. 「クリスマスコンサート2014」(当センターの個別専門講座の音楽コース講師(九州交響楽団所属)によるコンサート。例年12月に開催。)

イ. 「平成26年度 西日本生涯学習フォーラム2015」(毎年、生涯学習社会の実現に向けて大学に求められる役割・課題をテーマに掲げ、基調講演とシンポジウムを実施。例年1月最終土曜日開催。)

(4) 地域の関係機関団体との連携事業

ア. 北九州市民カレッジ（北九州市教育委員会と連携して行う事業で、市民の高度で専門的な学習ニーズに対応した学習機会を提供し、自己実現の促進、地域社会の活力向上及び生涯学習社会を担う人材の育成を図るために行う講座）：本学教員による12講座実施

イ. 北九州市立年長者研修大学校穴生学舎シニアサマーカレッジ（生涯学習研究センターと穴生学舎との提携事業）

テーマ：「おもしろ社会学」～学びの中から見つけよう、心豊かに過ごすには～

期 間：平成26年7月18日（金）～9月26日（金）、10回シリーズ

時 間：午前：10：00～12：00、午後13：00～15：00、(受講者：59名)

ウ. 第12回ボランティアフェスタin八幡西（八幡西区）

テーマ：「みんな集まれ～ッ！あなたにできるボランティア」

日 時：平成27年2月22日（日）12：00～16：00

主 催：ボランティアフェスタin八幡西実行委員会

共 催：八幡西区ボランティア連絡協議会、北九州市立西部障害者福祉会館、穴生学舎ボランティア連絡協議会、八幡西区民生委員児童委員協議会、浅川校区社会福祉協議会、八幡西区役所コミュニティ支援課、北九州市立年長者研修大学校セカンドライフ支援課地域活動情報支援センター、九州共立大学生涯学習研究センターボランティア、九州共立大学・九州女子大学・同短期大学生涯学習研究センター

エ. 九州共立大学 地域コミュニティセミナー（大学内機関連携講座）

・「スポーツ現場での熱中症予防と救急処置」（26名）

・「スポーツ現場で使えるテーピング（足首編）」（10名）

共催：九州共立大学スポーツトレーニングセンター

九州共立大学・九州女子大学・同短期大学生涯学習研究センター

九州共立大学総合研究所

オ. 公益社団法人福岡県青少年育成県民会議平成27年度「乳幼児教育研修会」

日時：平成27年2月19日（木）10：30～15：30、(受講者：132名)

主催：公益社団法人福岡県青少年育成県民会議

後援：九州共立大学・九州女子大学・同短期大学生涯学習研究センター

カ. 「NEXTSTAGEVol.2 ～NO Attack NO Chance@九州共立大学」

目的：スポーツや医療、健康分野に関わるすべての方がつながる機会とする。

日時：平成26年11月22日（土）、平成26年11月23日（日）、（受講者：150名）

(5) 紀要の発行（毎年発行）

生涯学習研究センター紀要第19号（総説：1件、原著論文7件）

(6) 福原学園キャンパス市民ボランティア

ア. 茶道ボランティア：毎月第1木曜日が定例会、学内のイベント等に「お抹茶接待」、留学生に「茶道体験」「浴衣の着付け指導」（登録者11名）

イ. 折り紙ボランティア：毎月第3金曜日に定例会、留学生への指導、大学祭への参加（作品展示及び実演）（登録者19名）

ウ. 生涯学習ボランティア（御学友）：定例会（不定期）、大学イベントへのボランティア参加（登録者15名）

(7) 年報の発行（毎年1回）

・「平成26年度生涯学習研究センター年報」

発行：九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター

(8) 資格取得支援室の運営

医療事務、介護職員初任者、教員採用試験対策講座、大原公務員、東京アカデミー公務員講座、日商簿記3級、秘書検定、旅行管理者講座、MOS2010中級・上級エントリーシート対策講座等53講座、（受講者：342名）

4. 成果と課題

(1) 生涯学習研究センター設置から20年の実績および成果

ア. 地域の生涯学習の拠点としての役割

公開講座を「個別専門講座」と「市民講師制度による講座」を開設して定着してきている。特に、市民の学習成果の活用を目指した「市民講師制度」による市民講師の活用は注目される。特に、図書館が社会人向けに図書館開放に関する講座を開設していることも評価される。

イ. 関係機関との連携が定着

主催事業や共催事業を実施するにあたって、県・市町の関係機関や報道機関等との連携がスムーズに実施することができるようになってきている。特に、本学の在る北九州市八幡西区の関係機関・団体との連携は定着してきており、地域住民への広報や受講生確保への効果は大きい。

ウ. 共催・後援による関係機関・団体との講座・事業実施の定着

県内の関係機関・団体との共催・後援・協力等「つながって」講座や事業実施ができるようになっている。連携のノウハウが開発されている。

エ. 研究紀要の発行・年報の発行

大学の研究センターとして紀要・年報の発行がなされており更なる発展が期待される。

オ. 学内ボランティアの活躍の場の提供

茶道ボランティア等の活動が定着してきている。

(2) 課題

ア. 学内の関係機関との連携講座

簡単なようでは実現できていない学内の機関（スポーツトレーニングセンター、総合研究所等）との連携講座が実施できるようになったが、受講生の確保に向けての広報やプログラム開発が課題である。

イ. 学内ボランティアの育成

茶道ボランティア等社会人による学内ボランティアは定着してきたが、学生によるボランティア活動の育成も課題と言える。

ウ. 講座内容の開発が求められる

教育研究を行うとともに、これらの成果を基にした公開講座を開催してきたことは評価される。しかし、「産学官連携による産業振興、スポーツの推進、防災や環境保全、地域医療・公衆衛生、健康増進、過疎対策など、社会や地域における様々な課題解決」に向けた講座内容の開発が課題である。その上で、今後、地域の再生・活性化に貢献することが求められる。

エ. 講座開設数の課題

開設から20年経過した3大学のセンターは、今後、毎年の講座開設数の基準をどこに置くかが課題である。

平成27年度「私立大学等改革総合支援事業総合版」¹³⁾によると、「収容定員2000人以上の大学の公開講座数：40講座以上」、「収容定員2000人以下の大学の公開講座数：25講座以上（短期大学は、20講座以上）」としている。3大学共管の生涯学習センターである本学のセンターは、理想として85講座の開設が求められよう。

5. 今後のセンターの発展に向けて

「学び続ける」社会の実現を目指すために大学の生涯学習研究センターは、どのような変革が求められるかを考察した。

平成24年3月26日の中教審大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）」の中で、「地域における学び直し」として「大学等の高等教育機関の役割機能強化」を挙げている。そして「今後は」「学部学科や専門分野の枠を超えて、地域の高等教育機関が全学的に連携」し、「様々な資源を活用しながら地域を志向した教育・研究・社会貢献活動を支援する」としている。内容・方法の更なる進化・レベルアップを求めているのである。

また、「解決困難な地域の諸課題に対して、学生が課題解決に参画」し、「地域との相互交流を促進」し、「地域から信頼される地域コミュニティの中核的存在（Center of Community）としての機能強化」を図るとしているのである。

注目すべきことは、今後の大学は「解決困難な地域の諸課題に対して、学生が課題解決に参画」し、「地域との相互交流を促進」し、「地域から信頼される地域コミュニティの中核的存在」になることである。その地域のための、生涯学習活動の中核になるのが生涯学習センターの役割であることは間違いないと思われる。

そこで、喫緊に求められることは、「地域課題解決プログラムの開発」、「地域人材の育成支援」であると確信する。さらに、研究を継続したい。

参考文献

1) 教育再生実行会議「『学び続ける』社会、全員参加型社会、地方創生を実現する教育の在り方に

- ついて」(第6次提言)、平成27年3月4日
- 2) 佐々木毅『学ぶとはどういうことか』2012年3月22日発行、講談社、第1章
 - 3) ロバート・M・ハッチンス(1899～1977年)著『ザ・ラーニング・ソサエティ』1968年、「学習社会」論から
 - 4) ユネスコ教育開発国際委員会(フォール報告書検討委員会)『未来の学習』第一法規 1975年、(委員長が元フランス首相フォール氏)
 - 5) 「第2期教育振興基本計画」(期間：平成25年～29年度)、平成25年6月14日閣議決定、第2部-I
 - 6) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」(審議まとめ)、平成24年3月26日
 - 7) 中央教育審議会答申「新たな未来を気づくための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」平成24年8月28日、-1
 - 8) 下村博文(文部科学大臣)「日本創生のための教育改革」産業競争力会議課題別会合(第7回)、平成27年6月4日
 - 9) 前掲「第2期教育振興基本計画」-第2部
 - 10) 中央教育審議会答申「子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築について」平成26年12月22日、「はじめに」
 - 11) 前掲、下村博文(文部科学大臣)「日本創生のための教育改革」、「我が国の成長のための人材育成に貢献する高等教育への転換」
 - 12) 「平成26年度生涯学習研究センター年報」九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター発行
 - 13) 平成27年度私立大学等改革総合支援事業総合版、p14

市民講座「柳田民俗学の町おこし」の覚書・講義ノート稿

牛島 史彦

九州女子大学共通教育機構教授

キーワード：柳田國男 農業政策 地域振興 民俗学 農業経営論

A Draft of Lecture Notes for Public Lectures “Regional Development in so called Yanagita Folklore.”

Fumihiko USHIJIMA

Profesor, Division of General Education, Kyusyu Women’s University

ABSTRACT

Kunio Yanagita (1875-1962) was a government official. However, he always realized the necessity of the mind of independence and judgment to be cultivated among the people, who should be the center of the liberalism economy and parliamentary system.

Key word: Cultural Anthropology Modern Japanese Thought (Ideas)

はじめに

本稿は、平成27年度「北九州市民カレッジ」で筆者が構想している講座「柳田民俗学の町おこし」の講義ノートやレジメ作成と、受講生の方々に供する参考資料のための覚書である。元は拙著『柳田國男の国民農業論』（牛島，2011）の第1－3章の夫々一部分であるが、この講座の趣旨「柳田民俗学の現代的意義」に最も適合する部分を選抜し「市民カレッジ」の趣旨・目的に沿って再検討し改稿した。ちなみに筆者の「講座概要」は以下のとおりである。

選挙権が18歳まで引き下げられましたが、民俗学・郷土研究を創始した柳田國男も、地域振興（町おこし）や住民自治の観点から普通選挙の制度に関心を持っていたことはあまり知られていません。本講座では、彼の農業政策に関する初期の著作の概要を理解し、そのどれもが農業生産と消費者・農村と大都市・資本と雇用の適正分配・消費行動の適正化といった、現代の私たちにも身近で切実な問題意識に貫かれていたことを参加者全員で共に学びます。

この概要で柳田國男の普通選挙への関心から書き始めたのは、いわゆる天皇主権を疑わなかったであろう明治人の彼は、いっぽうで英国風の自由主義や議会制度の理解者でもあり、そのような経済制度・政治制度の当事者であるべき市民・国民の間に、主体的思考や判断の資質が涵養されることの必要性を痛感していたと考えられるからである。

このような意味での主体性について、今回の市民カレッジの講座では地域振興や「町おこし」を経済振興ではなくいわゆる社会形成として捉え、その課題について生涯学習の場で話し合っただけの問題意識と考えた。本稿は、このような問題意識と方法による地域講座の場で使いやすい資料として、そして全員が共有できる議論の土台や出発点として、拙著の一部を書き直したものである。

I、柳田國男の文学と人生

1889（明治22）年、「松岡」國男は15才で文学青年の列に加わった。

その時の作品は、次兄の井上通泰の友人・森鷗外（1862-1922）が創刊した「しがらみ草紙」第2号に載せられた、「夕がらす ねくらもとむる山寺の のきにほすなり黒染のそで」という短歌である。鉄幹・子規以前のいわゆる旧派和歌であった（岡谷『柳田國男の青春』1991, p30）。

通泰より4つ年長の鷗外は、この頃には『於母影』（国民之友社）で稼いだ謝金30円で「しがらみ草紙」を創刊し、誘われた通泰は同人となっていた。いっぽう、弟の國男は少年時代から医家で漢学にも詳しく父約斎のもとで鈴木重胤『和歌初学』『近世名家歌集』等を参考に和歌を詠むなど、家庭環境で下地が出来ており、通泰も9才年下の弟の歌才を認め、東京の医科大学の寮から歌書や歌集を届けていた。

和歌が掲載された翌年、國男は進学のため上京し、叔父と甥ほどに歳の隔たった鷗外から可愛がられた。彼の回想によると「森さんといふ人は、私どもには大きな影響を与へた人であった。（中略、同）森さんはこちらの方に降りて来て、いろいろと相談に乗ってくれる人だつたから、これだけは本当にありがたかつたと思つている。たとへば本一冊読むのにも、こちらの立場まで戻って来て探してくれたりした」（柳田『故郷七十年』）という。

当時の鷗外は、『舞姫』と「うたかたの記」（「しがらみ草紙」所収）を発表し「即興詩人」の名声を欲しい俎にしていた。國男もこの二作は「文章のいいところを暗記」するほどだったという（『同、』）。前述の岡谷は、「鷗外の初期の作物は、一世代の感受性を作ったときえ言えるだろう」（岡谷, p34）

と近代文学史上の意義を高く評価している。「一世代の感受性を作った」とは、新体裁の文学で青年期に特有の情緒を表象し、明治中期の青年層の感受性に強い印象を与えたという意味であろうが、本場のドイツから医学とロマン派文学を輸入した鷗外への歴史社会的評価としても興味深い。

このような意味での影響の代表例が、1893年に北村透谷・島崎藤村等の創刊した「文学界」であり、同じ年に一高へ入学した柳田もこの雑誌に抒情詩を投稿する。ただし、彼の本領は、やはり通泰の手引きで入門した桂园派の松浦辰男（萩坪、1844-1909）の下での和歌であったことに留意したい。幕末・明治初期に盛行したこの一派は、「古今集」を手本に素直な感情表現と声調の洗練を重んじる正統派であった。

鷗外の「しがらみ草紙」に前述の國男の歌が載ったのは、同誌に掲載する歌の選者に通泰の縁故で松浦辰男が選ばれていたからだとも考えられる（来嶋靖生『柳田国男と短歌』1994, pp50-51）。長じて柳田家の養子となった國男は、「私は初め歌を修行する為に先生の門に入ったのであつたが、歌よりも外に露骨に云へば人生の観方と云ふやうなものをも教へられた」と記している（「萩坪翁追懐」読売新聞、1909年12月12日）。

なお、「人生の観方」という柳田の回想に関連して、後に自然主義文学を唱えた同門の花袋も「私の芸術のRealistic tendencyの大部分は実に先生の歌論から得たと言って差支えない」（花袋『東京の三十年』）と書き残しており、青年時代の柳田を登場人物のモデルとした『妻』（1908-09年）では、この青年に「詩だとか小説だとか言ふことなど何でも無い（中略、牛島）先づ『人間』といふことを眼中に置いて貰ひ度い。つまり我々は『人間』になり度い、真の人間になり度い」と心情を吐露させている。

前述の岡谷は、この部分には歌や小説は目的ではなく生きる行為・生の欲求の現れ・生の基本形式としての文芸創造といった考え方が示されているとして、「積極的な意味に解されたディレッタンティズムとは、専門化、特殊化、個別化、職業化を拒否し、つねに全体像をめざそうとするあり方である。学問や文学からではなく、自己の生から発想する立場である。國男が鷗外の著作と人間とを通して学んだのは、このようなあり方だった」と指摘している（岡谷、1991, p49）。

岡谷によると、前述の「文学界」の特色はロマン派的な気質・西洋文学に対する憧憬・恋愛におけるプラトニズム・従来の文学とくに硯友社文学に対する不満・そして藤村は、「文学界」の終刊号で、アマチュアリズムが同誌の特色だったと回顧していたが、前述の岡谷によるとこれは柳田の文芸にも共通する特色だという（同、p94）。確かに彼も鷗外も官の世界で業績を残した人材であり、両者の文芸活動は実態としてもディレッタンティズムでありアマチュアリズムであった。

自己の生の直接の目的を、公人・公民としては明治のエリートとして職掌をとおした国家や国民への貢献と定め、しかし私的な人生の意味を省察する視点においては、そのような公的貢献の価値も包含したあくまでも一個人の天与のものと内省する孤高な態度の点で、二人の生き方には通じるところがあったのかもしれない。

II、柳田國男にとっての国家と社会

「松岡」國男が帝国大学で学んだ「輸入学問」は、前述のようなナイーブで真摯な彼の目からすると、近代国家完成期の深刻な貧困問題を解決するには全く不十分だった。そこで彼は、問題解決のためには国民個々人が自分自身と「国土」・「集団」（社会、牛島）との関係の適正なあり方を理解し、自己の生活の場で問題の解決について主体的に考えること＝郷土研究（民俗学）を構想したと考えられる。

ただし、文化や歴史の固有性を重視しながら問題解決に益する経済学や経済政策を構築することは、帝大で師事した松崎蔵之助（1865-1919）がドイツで学んだ社会政策学派（新歴史学派）の学問理念

であった。ここではドイツ社会政策学派について略述しておきたい。

東京帝国大学法科大学に進学した彼は、農業政策学（後年の経済学）を専攻した。恩師の松崎蔵之助（1865-1919）は隴外より3歳年少、やや遅れて独・仏に留学し、1872年に社会政策学会を創設したA. ワグナー（1835-1917）の学説を日本に紹介した少壮の財政（経済）学者である。

松崎がドイツで師事したというA. ワグナーは、いわゆる資本主義の進展と平行して進む分配（所得）の不正問題＝貧困問題を、租税政策で調整する財政論を唱えた。彼は、社会政策の定義について「分配過程の領域における諸弊害（階級間格差、牛島）をば立法ならびに行政手段をもって抗争せんとする国家の政策」と考えていた（平田、1957、p27）。

彼らは、社会政策を分配政策とみなしこの学派の決定的な限界ではあるが、生産関係と分配関係との基本的連関や私有財産制度下の分配不公正の構造的な原因の考究については中心的な問題としなかった。ただし、経済行為にあたっての「倫理」重視の見地から、労働力を単なる商品とみなして賃金をその価格とみなすような状態は非人道的だとして資本家階級に労働者保護という倫理的義務を求めた（同、pp27-28）。

このような恩師のもとで、柳田はハーバード大学の助手を経て来日したグリフィンの講義も受け、このクラスでイギリスのJ.S.ミル（1806-1873）の『経済学原理』等の原書を講読させられたという。そして卒論のテーマには「三倉」の沿革史研究を選択したが、これは義倉・社倉・常平倉を総称した食料確保と売り渡し価格安定のための備蓄制度であり、ドイツ流の社会政策の見地から前近代日本の救民策を再評価した農村社会のセーフティ・ネット研究であった。

大学で松崎からドイツ流の社会政策学を学んだ経験は、自己の個人的な理想を論理的・体系的に構築し、官僚としての活動や後年の「柳田学」を展開する土台になったと思われる。また、前述のミル等イギリス古典派の合理的で中庸な経済思想や、生活改良の実践と穏健な社会変革（社会改良）を目指した「新生活友愛会」を母体に結成（1884年）され、ロンドン大学のロンドン・スクール・オブ・エコノミクスや労働党を派生させたフェビアン協会等の影響も大きかった。

いっぽう、当時の日本社会では1880年代に入ってH. スペンサー（1820-1903）の社会進化論の著作などが翻訳され、85年頃には「社会」という語が現在まで続く「社会」の意味内容を示す用語として定着しつつあった（石田、pp45-49）。1896年から（横浜）毎日新聞（後の帝都日々新聞）に記者の横山源之助（1871-1915）が「地方の下層社会」（『日本之下層社会』1898年）を連載したことはその一例といえるだろう。

また、1890年頃に宮崎湖処子・北村透谷そして徳富蘇峰の民友社で「国民之友」誌に健筆をふるった山路愛山（1865-1917）等の有力文筆家たちが盛り上げた「恋愛・情愛論」ブームは、従来の「世間」というこなれた日常語の範囲をはるかに超えた「社会」の実態への関心の大衆化を示す社会現象と理解することができるのかもしれない。

ブームの有力媒体であった「女学雑誌」を編集し、96年に「社会学会」を創って「女学雑誌」と同じ発行所名で「社会雑誌」を出していた布川孫一（静淵、1870-1944）は、「学会」創設の目的を「社会学の原理、社会主義、社会問題等を攻究するを以て目的とす」と記していた（石田、p48）。これについて、石田は「当時としては「社会」はおおよそ「社会問題」と離れては考え難かったことを示すものといえよう」（平田、同p48）と解釈している。

「国民」の誰もが体験している日常「世間」での厄介事や困難事を問題化すること。すなわち身の回りの「世間」という構造に埋め込まれた「問題」を見出すこと、あるいは見出して問題化する文字通り「社会科学的な」考え方が、「社会」という言葉とともに定着しつつあった。そのような考え方や「用語」は、構造の保守存続を企図する政策当事者（当局）にとっては保守存続の障害という意味で「危険思想」であった。

この思想の温床は、かつての自由民権の壮士政客や既に階層分化が激化していた農村の零細小農層ではなく、「世間」の不適正な実態を当局の政策課題として問題化する大学人や論客文化人であった。「社会」という用語を駆使して「世間」の問題を考究する彼等への当局の潜在的な警戒感は、やがて1906年の東京市電値上反対デモや焼き討ち事件等を経て、桂内閣を崩壊（1913年）させるという大事件等を経て、具体的に対処すべき思想問題となっていった（同、pp49-51）。

筆者は、柳田の「社会科学的な」問題意識とは、国民個々人が自己と社会との適正な関係のあり方を会得するための「学びの途」を、国民に提示することであったと考える。換言すると、個々人の実践を通して国家を主体的に支える適正な当事者能力を社会のなかに埋め込むという、広義の啓蒙的な姿勢でもあろうが、次項ではこの点を考えてゆきたい。

III、柳田農政論の理念

1887（明治20）年、国家学会の創設と同じ年に徳富蘇峰等が民友社を結成し、国木田独歩も入社して「国民之友」紙が創刊された。徳富は、国家という有機体の末端である国民が、政府の近代化政策に盲従することによって近代化が達成されるのではなく、「国家を主体的に支える適正な当事者能力」を社会のなかに埋め込むこと、すなわち市民社会の形成によって近代化が達成されると構想していたようである。

本項では、松崎や門下生の柳田等が創設した社会政策学会は、当時の小規模零細農家の深刻な経営困難問題＝解決すべき「社会問題」と当局の保護政策をどのように認識していたのかについて、その一端として彼と1歳違いの社会政策学者・福田徳三（1874-1930）の所論を紹介し、柳田の小農論も基本的に同様の論旨であることを確認する。

福田は、小農の窮状はむしろ小農経営の持続の可能性の低さを証明していると考え、脱落した小農は商工業に転じて自活すればよいのであって、大農の増加と小農の窮乏がもたらす社会の不安定化を避けるために案出された欧州の学者の改良政策論を「直ちに過小農に苦しむ我国に適用する」ことはできない。むしろ「救済の道は唯一なり。曰く、資本主義の洗礼これなり。かくて小農の減少を見るときも、毫も憂ふるに足らず、寧ろ慶賀すべき事項なり」と説いた（社会政策学会編『小農保護問題』（伝田、1979、pp143-144））。

いっぽう、柳田は『中農養成策』（1904）で政府や識者の副業奨励は対症療法的な「姑息策」であり、青壮年男女が村を出て行くのは「横井博士」のいわゆる「都会熱病」（都会的消費生活への憧れ）のせいだけではない。離村の根本原因を解消せず、対症療法を施すだけで離村者を「軽佻無節操によるかのごとく罵倒するものあらば、きわめて思いやりのなき人と言わざるべからず」と主張した。

彼は、農村・農業問題の核心である零細農問題について、この層を保護して存続させるのではなくむしろ減少させるべきであり、残った農家の規模を拡大してこれを中農層として育成する方策を提案する。当時の農政が副業など農産とは別の仕事で小農層を温存させ、対外的には農業保護のための高い輸入関税を課すといった「折衷的」「妥協的」な対症療法では、輸入肥料による生産コスト問題を抱えた農家が国際競争力をつけることはできないだろうと指摘した。

このような点は本質的に福田の主張と同様であり、柳田の講演や著述は、経済学としての独立期を迎えた当時の社会政策学会での議論を踏まえていたと推測される。以下、彼の農政関係の主要な著作に拠ってこの点を略述したい。

柳田は、『最新産業組合通解』（1902年）・『中農養成策』（1904年）の二書で、零細経営を中農経営に拡大させて自立と持続をもたらす支援制度としての産業組合の意義を説いたが、前者『最新産業組合通解』では自立・持続の条件として資金と経営規模の充実拡大すなわち産業組合からの資金供給

を求めるとともに零細農家の「適正な」離農を是認し、組合制度の整備と普及政策の大前提としては上からの小農保護（零細経営の延命）政策ではなく、農民個々人の意識覚醒や自助努力の必要性を強調した。

柳田農政論の首尾一貫した特色は、政策の受け皿・推進役として自力で問題を解決しようとする農民の主体性への期待であるが、農業・農村再生の条件として農村の人的資源だけでなく伝統的な社会資源に期待した点が柳田民俗学の創造につながったと考えられる。

後者の『中農養成策』では、明治中期以降に小作人が増えたのは近代化の浸透による経済困難のせいであり、不耕作地主が増えたのは小作の増加で貸地経営が有利になったからだという実態。そして不耕作地主といえど有閑富裕階級とは決していえないような暮らし向きであるという二つの実態認識を提示したうえで、資本配置の適正化と同様に労働力配置（分布）の適正化による中農層の自律的形成論を唱えた。

なお、共同耕作組合など産業組合制度の実践をとおした連帯意識の涵養という組合活動の「教育的目的」を謳い、「幸福なる（地方）小工業の存立」によって農村の過剰労働力の問題を解消する策を提案した部分では「他郷流離の不幸」の回避や田園生活の健全性を指摘した点も、彼が狭義の農村更正ではなく「社会」の形成を自らの学問課題としていた所以だと考えられる。

次の『時代ト農政』『農業政策』（ともに1910年）では、まず小作料米納論に関して「小作料米納の慣行」（1907年）で、米納制は小作人を市場から疎外する要因だが、彼等は特むべき社会政策の産業組合（信用組合）制度からも疎外されているので自立できず地主への従属を強いられていると指摘した。また、この制度のもうひとつの欠点として、米質改良政策は小作人の利益にならないので政策が進展しないことがあり、この点は増産政策についても同様であって増益分が小作人に還元され彼等が自立できるような環境が整備されない限り増産政策も進展しないだろうと主張した。

米納制が金納制に改められたとしても、それだけでは同様に効果はあがらないだろうが、少なくとも金納制は地主の利益になるのであり、これによって小作地の管理コストが低下するので小作料を下げても地主の不利益にはならず、金納制への移行に加えて農業経営一切を小作に任せ、前述のように増益分を彼等が受け取るような制度を整えると、自然に農法が改良され集約化も進み小作地からの収益が増えるはずだと説いた。

その場合は、小作の需要が増し小作料も上昇することが懸念されるが、米納のままでは地主の増益は米価の上昇以外に可能性はない。米価と農業保護の輸入関税の無限上昇など期待できない現実から考えると、柳田は保護政策の効果がまず小作に還元され、結果的として地主も利益を受けるといった地主への「遠き慮」が必要だと主張した。

そして国家の利益という観点からは、地主と商工業者との利益は公平に分配されねばならないので地価や借地料は金銭で算定されねばならない。しかし米納制では田地の地価算定や借地料が不明確であるゆえに、小作条例や地租の議論とその政策課題を解決することが困難だという。以上のように、柳田は米納の慣習は小作・地主・国家いずれからみても存続の意味はないと結論するが、強権的に金納制に移行させるのではなく、地主・小作・市場の三者関係（経済環境）の改善過程において移行させねばならないと主張する。

すなわち、各地に小作関係の利害を共同研究する地主会が出来始めたように、小作人も産物の販売で地元の仲買人に取られる利益を確保するための共同販売の機関や「適当なる問屋」等が有効であるというが、小農の生産が2倍3倍にも増えるならば商人たちは競って小作人に有利な条件を提示するだろうと指摘する。なお、柳田は小作人に対して金納制への移行過程においては彼らも米納制の慣行であった不作の年の減免措置を地主に期待することはできないと、小作の側にも責任とリスクを求めた点が注目される。

この二書では、小農経営の基礎となる地代（小作料）・土地政策論も重視されているが、彼は農地が土地資産であり生産手段でもあるという二面性の問題に注目する。当時の農地価格は、「市場」の均衡調和作用の結果としての「合理価格」ではなく、農家に固有の価値観（いわゆる土地神話）などの経営外的条件によって上昇したという実態を踏まえて、農地価格の上昇は資産価値だけでなく生産コストも上昇させるゆえに農家は単純に農地価格の上昇を望むべきではなく、当局は農地価格の上昇を抑制する政策を画定せねばならないと主張した。

次に小農経営の宿命的な限界について、農業経営の改善のためには余剰な「労力の適当なる配賦」・肥料の輸入を減じるための地力維持努力・前二者の達成を前提として畜力の活用が必要であるが、この三者の達成の条件としては畑作の改良が必要だと指摘した。そして以上の前提や条件を充たすためには、「企業者の技術を発揮すべき」「三町歩以上」の「余地」が不可欠だが、これは「水田地方にては到底其の発声を望むこと得ざるなり」と断言した。

経営改善の方策としての産業組合制度とくに販売組合について、いわゆる「市場」は都市（消費）と農村（生産）双方の利害調整（均衡調和）装置・「予約売買」「準備取引」「確保取引」なども（相場の乱高下を招く投機行為は例外として）相場安定の調整作用を他の季節に及ぼして相場を平準化する・さらに「中間商人」も流通に関わるコストの構成要因であるが、上記のような市場の調整作用に関わる等々の点で有益だと評価している。

対して販売組合は、このような経済的装置の運営コストを削減するものと位置づけた。さらに、外国産品との国際的な市場競争についてはこれを市場原理に任せるのではなく、当局は適正に管理すべきであるが輸入関税を設けて国内農家を保護しても小作料が上昇するだろうから、そのような保護主義的な社会政策は必ずしも農家の利益とはならないと指摘した。

さらに、農産物の市価上昇は消費者物価の上昇を招く点では、消費者としての農家の不利益であると指摘した点も注目される。さらに、農業経営の目的は単純に増産ではなく消費（購買）行為を通じた生活の向上であって、単に増産を追求するだけで経営全体の中でも大きな比重を占める地代（小作料）コストを軽視することは、農業経営の改善政策としては片手落ちであると強調した。

以上のように、この二書で彼は小作小農の米納論や経営論について、内部的な農業経営論の視点から経済環境の整備という経済政策を論じた点に、当時の社会政策学の成熟や進展をうかがうことができるだろう。

さらに彼は、流通コストの問題については輸送コスト削減のために地方中核都市と周辺農村との消費－生産関係を紐帯とする地域経済圏を構築すべきことを提案したことに注目したい。とりわけ、その実現のための課題として健全で高尚な娯楽や伝統的な生活文化をとおした都市－農村間の交流と、農民側の土地神話を放棄して都市民・都市資本を受け入れ農村商工業を振興させることの二点を挙げたことが柳田農政論の最も注目すべき点である。

文化や価値観を視野に入れている点では、公正な分配政策による国家の市場介入を主張して、1873年にドイツ社会政策学会を創設したG. シュモラー（1838-1917）の所説を想起させるものの、この観点からの「社会改良」の方策として国家による社会政策と並行して、内発的な農業教育論を展開したことが独創的だった。

農業経営の改善を目指す農業教育について、彼は増産のための技術教育のほか生産手段（農地）の集約的活用や多様化のための経営教育が重要であることを指摘し、このような個々の経営観点を基礎とする「経済智識」の普及によって前述の因習的な土地神話の矛盾、すなわち農家が地価の高騰を資産価値の上昇として歓迎し、それに伴って発生する自作地拡大（経営規模の拡大）の障害や生産コストの上昇を軽視することの矛盾に目覚め、純益第一の経営感覚を獲得すれば地主に対して「正当に其の利益を主張」し地価も適正化されるだろうと主張した。

なお柳田がいう「教育」は、当局による公教育ではなく内発的な「学習」の意が強く、そのことは後年の郷土研究や民俗学への展開の基本理念になっていると考えられる。

IV、柳田農政論の展開

今が今まで全然政治生活の圏外に立って、祈祷・祈願によるのほか、より良き支配を求めるの途を知らなかった人たちを、いよいよ選挙場へことごとく連れ出して、自由な投票をさせようという時代に入ると、始めて国民の盲動ということが非常に怖いものになって来る」（講演「青年と学問」東筑摩郡教育会、大正15年）。

普及啓蒙の講演録を編んだ『青年と学問』（1928、昭和3年）は、イギリス起源の議会制度を日本社会で運用する基礎となる普通選挙制度の開始に際して、「国民の盲動」という語で彼が表現した、期待と警戒への対策として各地を遊説したものである。

講演の中で彼は「自己を見出す為」の史学を興すことの必要性を説いた。その「史学」とは、官が民に施すのではなく民みずから修得するものであるとして、教育の受容体ではなく学習の主体に関する学問論（郷土研究論）を展開した点が独創的である。官界を辞して朝日新聞の論説委員に転じていた彼は、（当時の朝日が主張していた）普通選挙の実施を目前にして、善政を実現する政治家を選挙する国民みずから「よき学問」を身につけることの必要性を説いた。

聴衆の農民や地方人を政治の主体者とみなし、国家・社会との適正な関係について覚醒させる教養や学問の実践を奨める見地から論を進めており、このような公民視点の欠如が従来農政や農政論の主な欠陥であると彼が認識していた点で、柳田農政論の全体的理解とその後の郷土研究・民俗学への展開を考える際に見逃せない著作である。

いっぽう、同時期の『都市と農村』、29（昭和4）年は、当時の日本人の間にも残存していた、いわゆる土地神話による地価高騰が農村衰微の原因であると改めて指摘した点が注目される。彼は、先ず土地制度の慣行（歴史）を確認し、農地は生産の手段であって耕作権と「収益権」にこそ意味があり、資産として所有することは副次的な事象に過ぎなかったという。

そして、我が国の「土地学説」を、都市と商業に立脚した西洋流の「経済学説」から構築することは、耕作を委任した「親方」と請け負った「子方」との支配―庇護の中世的関係が崩れて農村の社会層が地主と小作に分化し、農地が都市の投資対象となった近世後半から近代にかけての変化に関する歴史認識を欠いた「浅慮」だとする。

「全然方向を異にした二つの目的（資産と生産、牛島）を、土地に持たせようとするものがそもそも誤りではなかったか」と、殖財の対象として農地を買い漁ることの誤りを看破する柳田は、殖財ではなく生産の手段という農地本来の機能を最もよく代表する、日本古来の耕作権概念を近代的に法制化して地代（小作料）を適正化すべきだという。1929年刊の『都市と農村』という本書の題名は、購入予約の募集パンフレットでは『都市と農村の問題』だったというが（『全集』4、pp546、後藤）、資本や流通をめぐる都市―農村の関係性にとどまらず土地制度論や地代論に渉る勝れて農政経済的な問題意識も含意していた。

全十章で構成される本書の内容は、次の4つに分けることができる。まず課題の設定あるいは問題の所在を指摘した「序」から第II章。二番目は第V章までの、中央の大都市・大市場から自立した文化・経済圏を地方都市と周辺農村で協同構築するための課題提起。そして都市農村の違いを超えて自立した市民・中間層を形成することの必要性について、近代化による価値観や勤労観の変革も含めて問題提起した部分。

三番目は、冒頭で触れたように当時の小作経営の構造的な問題点を、歴史を参照する方法によって解

説した第VI―VIII章であるが、第八章では前述のように農地が財産化（「資本化」）し投機対象となって高騰することの害を防ぐために構想されている課税権は、これを村に付与するのが効果的であると指摘する。柳田は、課税権の移管を円滑に実現するためには「視野の広く経験の豊かなる、古来の公共団体（ムラの伝統的な結集原理、牛島）を働かせるのが便利」であり、さらに「土地の利益」を協同管理することは「以前失ってしまった共産制の補充としても、はたまた同地住民の新たな結合方法としても、たしかに一挙両得の妙案とあってよい」とする。

そして自作農の創設維持は、以上のように国の政策として上意下達で推進するのではなく、村に課税権を移管することまで含めて伝統的な協同で取り組むほうが確実だと結論づける。そのためには取り組みの主体となる農民の意識改革が大きな課題となるが、柳田の主張の四番目（第IX・X章）は、先ず耕作権と地租の課税権を耕作者や村へ委任して「失われたる経済自治の恢復」を保障すべしというものであった。

「自治」とは「以前失ってしまった共産制」と彼が表現する農村の伝統的な「協同心」に裏打ちされたものであって、彼は組合制度の実践を農村人の「自治教育」と位置づけて前述のように村の伝統的な結集原理を近代的に再構築することを呼びかけるが、その実践過程は「自尊心の啓発」と「村の平等観の練習」による主体性の恢復を目指す意識改革の取り組みと解釈することができる。

次に、村内の都会的で「無意味な消費業」「不必要の消費」を否定する部分は、単なる奢侈の戒めではなく中央の大市場に集中する農産物の「無益なる輸送」と都会的消費の模倣を否定し、主体的な「生産計画」「消費計画」のもとに地方の中核的な都市と市場を育成する「文化基準の確立」や「自損心」恢復の呼びかけと考えられる。

本書冒頭での課題設定・問題提起での、都市民と農村人との利害を調和させ、主体的に「自由に物を判断する」学問、あるいは都市民相互の「総意にもとづく道徳」の必要性を指摘した部分を想起すると、当初は『都市と農村の問題』と題されていた本書の一貫した主題は、自立した市民・中間層形成に向けての課題提起であることが分かる。

前著『青年と学問』は主に地方青年に対する啓蒙書であったが、そこでは自分自身と「国土」・「集団」（社会、牛島）との関係の適正なあり方を銘々十分に認識すべきことが説かれていた。適正な当事者意識や国民主体の確立のための学問の奨めという意味では、自立した市民・中間層形成を課題とした本書『都市と農村』もその類書といえるだろう。

おわりに

柳田國男は、農商務省のいわゆる官僚（勅任官）第一号として敗戦後も発言権を維持しつづけた。

その彼は、日本の近代化・産業化が具体的に社会のあり方を激変させた1920年代から、当時の人々の消費行動や消費文化、すなわち価値観や文化と市場との関係性の問題に注目していたと考えられる。例えば、本稿の最後に取り上げた『都市と農村』の第X章で「山清水の傍らで古びたサイダーを飲む」ようでは、商業は商品の移送によって価値を生成するなどということは詭弁である。現代社会には「無用の商業」「不必要の消費」が多すぎるといったことを指摘していた。

これは農政論からの逸脱ではあるが、ドイツの学に始発する社会政策論の一貫した発展形として、独自の郷土研究・柳田民俗学が形成されていったと考えることもできる。

参考文献

平田富太郎『社会政策論概説』、有信堂、1975（1957）

伝田 功「農業をめぐる論争」（杉原四郎他編『日本経済思想史読本』、東洋経済新報社、1979年）

- 岡谷公二『柳田国男の青春』、筑摩書房、1991年
- 来嶋靖生『柳田国男と短歌―続 森のふくろう―』、河出書房新社、1994年
- 牛島史彦『柳田國男の国民農業論』2011、(社)農山漁村文化協会
- 柳田國男『最新産業組合通解』、1902年(ちくま文庫『柳田国男全集、第30巻』所収、筑摩書房、1991年)
- 『中農養成策』、1904年(伊藤幹治他編『柳田國男全集、第23巻』所収、筑摩書房、2006年)
- 『時代ト農政』・『農業政策』、1910年(ちくま文庫『柳田国男全集、第29・30巻』所収、筑摩書房、1991年)
- 『青年と学問』、1928年(ちくま文庫『柳田国男全集、第27巻』所収、筑摩書房、1990年)
- 『故郷七十年』、1959年(伊藤幹治他編『柳田國男全集、第21巻』所収、筑摩書房、1997年)
- 田山花袋『東京の三十年』、1917年(岩波文庫、1981年)

生涯学習としての野上弥生子の読書

荻原 桂子

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻教授

キーワード：生涯学習・国語教育・女性文学

READING YAEKO NOGAMI AS A LIFELONG LEARNING ACTIVITY

Keiko OGIHARA

Professor, Course of Principal Human Sciences, Department of Human
Development, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University

ABSTRACT

Yaeko Nogami (1885 - 1985) was born in Oita Usuki-cho (now Usuki). Yaeko, with its brilliant intellect, lived through the Meiji, Taisho and Showa era over a century. In addition, Yaeko was able to be involved a lot in the unique human trappings many of the Modern Japanese. In addition, Yaeko was staring at the society in its serious qualities. As a result, Yaeko was able to draw in-depth works the upheaval of Modern Japanese. Work of Yaeko Nogami can be said that the thing that is suitable for reading as a lifelong learning.

Key word: Lifelong Learning Activity, Japanese Language Education, Women Literature

はじめに

野上弥生子は本名ヤエ、旧姓小手川で角三郎、マサの長女として1885年（明治18）5月6日大分県北海部郡白杵町（現・白杵市）でフンドーキン醤油の創業家に生まれた。兄次郎、妹ミツ、弟竹馬（のち、金次郎）がいる。10歳で白杵尋常高等小学校に入学し、千尋久保会蔵について『源氏物語』などの日本古典や四書などの漢籍の講読を受け、卒業後は後藤熊生について英語学習を始める。1900年（明治33）14歳で上京し、木下尚江に連れられて巣鴨庚申塚に移っていた明治女学校普通科に入学し、20歳で夏目漱石門下の野上豊一郎と結婚する。1906年（明治39）習作「明暗」に、漱石山房に出入りする夫豊一郎を介して漱石から懇切丁寧な批評の手紙をもらう。翌年漱石の推挙で『ホトトギス』に『縁』を掲載しペンネーム野上八重子として作家デビューする。以来、『ホトトギス』をはじめ『中央公論』『新小説』『青鞥』などさまざまなメディアを通して文学および言論活動を展開し、死去するまで現役の作家として活躍する。24歳、28歳、32歳で出産し、長男素一は京都大学教授でイタリア文学者、二男茂吉郎は東京大学教授で理論物理学者、三男耀三は東京大学教授で実験物理学者となり、母としての役割も果している。夫亡き後法政大学潤光女子中学校・高等学校名誉校長も務め、「女性である前にまず人間であれ」の名言を残している。昭和初期から約60年、北軽井沢の大学村に春から秋にかけて過ごしていた。近年、同じく北軽井沢に隠遁生活を送っていた哲学者の田辺元との間の往復書簡があったことが宇田健氏・竹田篤司氏によって判明した。その300通余りが『田辺元・野上弥生子往復書簡』として岩波書店から刊行された（2002年）。また、軽井沢町の軽井沢高原文庫には、北軽井沢の山荘の離れ（書斎兼茶室）が移築されている。白杵市には生家の一部を改装した野上弥生子記念館がある。1985年（昭和60）3月30日に老衰のため亡くなった。戒名は天寿院翰林文秀大姉、墓所は鎌倉の東慶寺にある。享年99歳、あと一月で100歳であった。亡くなる直前までの日記が『野上彌生子全集』第2期（岩波書店1986年～1991年）に入っている¹。

1. 野上豊一郎と弥生子

弥生子は14歳で上京し明治女学校普通科に入学し、高等科を卒業と同時に同郷の野上豊一郎（1883年～1950年）と結婚する。豊一郎は、能楽研究者・英文学者で、1920年（大正9）法政大学教授、1947年（昭和22）総長となる。イギリス演劇、ギリシャ古典劇から能の研究にすすみ、国の内外で能の普及および紹介につとめた。1950年（昭和25）2月23日66歳で死去する。著作に「能一研究と発見」「能の幽玄と花」などがある。この結婚が作家野上弥生子誕生の契機となった。2歳上の豊一郎は東京帝国大学文学部英文学科を卒業しており、同級生の安倍能成（1883年～1966年）や岩波茂雄（1881年～1946年）とともに、夏目漱石（1867年～1916年）に師事していた。弥生子は漱石の木曜会に出る夫を通じて漱石の指導を受ける機会に恵まれる。弥生子は「いまは話しだされるのも恥しいほど幼稚な作品を丹念に読んで、文学の手ほどきをして下さったのは夏目漱石先生である。もしあの頃、とてもものにはならないから書くことはやめなさい、と仰しやられたら、作家生活は私には今日までなくてすんだかも知れない」²と吐露しているが、弥生子の作家への道を切り拓く手助けを夫豊一郎は進んで行ったのである。漱石門下の一人として豊一郎自身も小説を書く身ではあったが、小説を書き始めた愛妻弥生子にその道を譲り、自らは能の研究に勤しむのである。弥生子の文才の第一の発見者は漱石ではなく、夫豊一郎であったといえる。その後も、家事育児と多忙な妻をサポートし、おだやかに妻の才能を見守った豊一郎は、当時としては稀なパートナーシップを持つ男性であった。弥生子にとって、夫豊一郎を得たことは作家として成功する重要な鍵であった。

いわゆる漱石門下の常連の集まりの夜とされた木曜会から野上が帰って来ると、こと細かにお土産話をしてくれた。さまざまな話題、それに対する先生の意見、批評、いったいに自由で、無拘束に、勝手なことをいいあったお饒舌や角突きあいまで。——私はそれらを聞き捨てにしないでことごとく日記に書きとめることにしたので、出席しないでも結構その空気や光景に馴れ親しむことができた。（「夏目漱石」）³

夫豊一郎のおかげで、弥生子は家庭にありながら、当時もっとも文芸的エリート集団であった漱石サロンである木曜会のエキスを存分に吸収することができた。樋口一葉（1872年～1896年）は森鷗外（1862年～1922年）の推挙による文壇での栄光を十分に浴することなく早逝したが、弥生子は夫豊一郎の力強い協力と漱石の推挙を最大限に活かして、その長寿と忍耐力で女性作家としての地歩を一步ずつ確実に固めていったのである。

私は、木曜会のことは非常によく知っております。それは、才気渾発なお仲間の末席に座って、おとなしく聞き手のほうへ廻っていたであろう野上は、存外こまかいことを見聞きして来て、みやげ話に、きょうはどういう作品が読まれたとか、それがどういう批判を受けたとか、そうして、先生がどうおっしゃったとか、高浜さんがどうだとか、そういうふうなエピソードを、いろいろと聞かしてくれた。（「夏目先生の思い出」）⁴

そして、弥生子は、夫豊一郎を介して習作「明暗」を漱石に読んでもらうことができたのである。男性ばかりの文学サロンに妻の書いた小説を持ち込む豊一郎の勇氣には驚くばかりである。弥生子は「私の『明暗』は先生に見事に落第点をつけられた」⁵と語っているが、仲間の男性作家でさへ厳しい批評に晒される木曜会に、若い妻の小説を恥しげもなく持っていった豊一郎は妻の才能を心底信じていたのだろうか。

「明暗」に対して、「そのときに先生が、その作品の批評であり、文学の根本義というものについて懇々と説かれた手紙は、ほとんど一メートル半以上にもおよぶ長いもので、恐らく先生の残されている手紙の中では最も長文といえるかと思えます」⁶と弥生子が述べるように、20歳そこそこの若い女性に対して漱石が示した親切が、後の女性作家野上弥生子を生み出したのである。

2. 夏目漱石と弥生子

小説を書き始め多忙な漱石は毎週木曜日を面会日として、他の日は面会謝絶としていた。漱石の弟子達には、寺田寅彦（1878年～1935年）、安部能成、小宮豊隆（1884年～1966年）、森田草平（1881年～1949年）、高浜虚子（1874年～1959年）、鈴木三重吉（1882年～1936年）らがいた。漱石山房に集う錚々たるメンバーを前に弥生子は20歳で処女作「明暗」を漱石に見せ、長い懇切な手紙をもらった。1907年（明治40）1月17日野上八重宛書簡⁷である。「明暗」と書かれた手紙は、弥生子が1966年1月14日の朝日新聞東京本社講堂で実施された「漱石生誕百年記念講演」でも披露している。手紙を書いた当時、漱石は朝日新聞入社をひかえ、東京帝国大学講師と小説家の二足の草鞋状態の超多忙の時期であった。自らも小説への果敢な挑戦を繰り返していた。漱石の未完の絶筆『明暗』と同じタイトルをもつ弥生子の「明暗」に漱石は最大級のエールを送ったといえる。半世紀にもわたって大事に保管された手紙には、弥生子の作家生活を支える心の籠った漱石の助言が全面に漲っていた。

明暗

- 一 非常に苦心の作なり。然し此苦心は局部の苦心なり。従つて苦心の割に全体が引き立つ事なし
- 一 局部に苦心をし過ぎる結果散文中に無暗に詩的な形容を使ふ。然も入らぬ処へ無理矢理に使ふ。スキ間なく象嵌を施したる文机の如し。全体の地は隠れて仕舞ふ。
- 一 而して此装飾は机の木とある点に於て不調和なり。会話は全然写真にして地の文は殆ど漢文口調の如き堅苦しきものなり。(余の文体のあるものに似たり) 然し警句は大変多し此警句に費やせる労力を挙げて人間其ものゝ心機の見せる観察に費やしたならば是よりも数十等面白きものが出来るべし
- 一 明暗は若き人の作也。篇中の人物と同じ位の平面に立つ人の作物なり。自から高い処に居つて上から見下して彼我をかき分けた様な作物にあらず。夫故に同年輩以上の心を動かす能はず大なる作者は大なる眼と高さ立脚地あり。篇中の人物は赤も白も黒も悉く掌を指すが如く双眸に入る。明暗の作者は人世のある色の外は識別し得ざる若き人なり。才の足らざるにあらず、識の足らざるにあらず。思索綜合の哲学と年が足らぬなり。年は大変な有力なものなり。「明暗」の作者は今より十年後に至つて再び「明暗」をよむ時余の言の詐りならざるを知るべし
- 一 去れども世には年ばかり殖えて一向頭腦の進歩せぬものもあり。十中六七迄はこれなり。余の年と云ふは文学者としてとつたる年なり。明暗の著作者もし文学者たらんと欲せば漫然として年をとるべからず文学者として年をとるべし。文学者として十年の歳月を送りたる時過去を顧みれば余が言の妄ならざるを知らん
- 一 女主人公一人より成る小説なり此女主人公がもつと判然と活動せざる可らず。是を圍繞する附属物の人間も亦今一層躍然たらざるべからず。幸子を慕ふ医学士の如きはどうも人間らしからず。之に対する幸子も大分は作者がいゝ加減に狭い胸の中で築き上げた畸形児なり。
読んで成程と思ふ程に出来ねば失敗なり。明暗は成程と迄思へぬ作なり。観察が糸の如く細き証拠なり
- 一 明暗の如き詩的な警句を連発する作家はもつと詩的な作物をかくべし。而して自己の得所が充分發揮せらるゝ様にすべし。人情ものをかく丈の手腕はなきなり。非人情のものをかく力量は充分あるなり。絵の如きもの、肖像の如きもの、美文調のものをかけば得所を發揮すると同時に弱点を露はすの不便を免がるゝを得べし。 妄評多罪

芥川龍之介(1892年～1927年)・久米正雄(1881年～1952年)に対して「どうぞ偉くなつて下さい。然し無暗にあせつては不可ません。たゞ牛のやうに凶々しく進んで行くのが大事です」⁸「牛を超然として押して行くのです。何を押すかと聞くなら申します。人間を押すのです。文士を押すではありません」⁹(1916年8月21日・8月24日芥川龍之介・久米正雄宛書簡)とあるように、漱石は若い作家たちに牛になることを説いた。芥川は漱石の慈愛に満ちた言葉に柔順になれなかった。それに対して、弥生子は牛になって人間を押し続けたのである。弥生子は漱石の多大な批判を素直に受容し、小説を書くうえでの訓戒として御守りのように終生真摯に実行した。「文学者として年をとるべし」という漱石の言葉どおり、死の間際まで現役作家を貫いた。「非人情のものをかく力量は充分ある」という漱石の教えに従つて、写実的な作品、肖像的な作品、美文調の作品に挑戦した。「明暗」は弥生子自身「これはフィクションだし、私は忘れてしまつて、どういうことを書いたか、まるで覚えがない」¹⁰と述べるように未発表である¹¹が、弥生子は漱石の懇切丁寧な指導に臆することはなかった。次に『緑』(1907年)を書きそれが漱石の紹介で『ホトトギス』に掲載され、弥生子は作家への道を歩むことになる。漱石から褒められることに最高の名誉と満足を感じ、どうしても書きたいも

のしか書かないと決心する。生涯に数度しか会ってはいないが、弥生子の作家としての師は漱石だったといえる。「私は“悟り”とか、禅とか、そんなものは皆目わからない人間ですが、悟ったと思ったときはもうまた迷いで、迷って、悟って、悟って、悟って悟りぬいて、心身脱落っていうところまでいくのは、並大抵のことではないのではないかと思います。先生の、あの黒いデモンが、先生を永久に見捨てたでしようか」という弥生子は早くに漱石のデーモンにも触れていたのである。

3. 中勘助と田辺元と弥生子

弥生子は夫豊一郎と同級生だった中勘助に恋をする。弥生子と勘助は同い年であり、弥生子にはすでに子どももいた。このことは、本人たちと豊一郎、そして友人の安部能成の四人の秘密だった。勘助は、1885年（明治18）5月22日生まれで、幼少年期をえがいた小説『銀の匙』（1913年）を師である漱石の推挙で『東京朝日新聞』に連載し認められる。時流にとらわれず、文壇とは一線を画し、生涯孤高をたもった。1965年（昭和40）5月3日死去、79歳であった。作品には他に『提婆達多』『街路樹』『鳥の物語』、詩集に『飛鳥』などがある。夫豊一郎亡きあと、初恋の日々から40余年を経た対面の日、二人とも65歳になっていた。

「人間は決して本質的には年をとるものではない気がする。九十の女でも恋は忘れないものではないであろうか。私のこの秘密を知らなければ、私をほんとうに解する事は出来ない。」

豊一郎との結婚が学問と創作の伴侶に選んだと思われるのは、弥生子の敬慕するロシアの天才数学者ソーニャ・コヴァレフスカヤ（1850年～1891年）に対する共感にある。弥生子はソーニャ自身による自叙伝『ラエフスキー家の姉妹』とアン・レフラーの書いた伝記を翻訳した『ソーニャ・コヴァレフスカヤ（自伝と追想）』（岩波書店1924年）を刊行している。当時のロシア封建社会では、女性が実家をでるためには結婚という制度を利用しなければならなかった。ソーニャも18歳でワルデマール・コヴァレフスカヤと結婚し、実家を出た。弥生子は、ソーニャの自叙伝と伝記を翻訳するなかで自身の半生に重ねているところがある。実際には、弥生子の恋の相手というのは『銀の匙』の勘助だったのである。勘助に寄せた恋情については、夫豊一郎との間で何度か不愉快な事件を引き起こしたことが日記にある。漱石門下の勘助は、27歳にして野尻湖畔の僧坊や弁天島の廃屋で孤高の日々をおくことを好むようなところがあって、弥生子はそういう勘助を慕いつづけていた。弥生子はその後も独身を貫く勘助を距離をおいて見続ける。勘助の年齢がかさみ、さすがに身の回りを見てもらう女性を必要としたときは、弥生子は内緒で岩波茂雄に相談をもちかけもした。勘助は弥生子への想いを語っていないので不明であるが、勘助自身が語る別の女性との秘めた恋情¹²があり、弥生子の一方的なプラトニック・ラブとも読める。

弥生子の死後、発表された『田辺元・野上弥生子往復書簡』には、哲学者田辺元との老いらくの恋の記述もある。加賀乙彦氏は「その道に造詣が深い二人のこととて哲学や文学や人事万般についての高度の考察が随所にちりばめられていて、その素養の不足している私には、むつかしい面もあった。しかし、六五歳を過ぎた二人の人としての交わりは、暖かくこまやかで、男と女の厚情が恋愛に進んでいく様子もほの見えて、これほどの知識人同士が高齢となって、老いらくの恋をするのも珍しく微笑ましく、男女のことは、それほどの基礎知識がなくても、よく心情が伝わってきて、興味深く読めた」¹³と述べている。田辺は、1885年（明治18）2月3日生まれで、1927年（昭和2）京都帝大教授となった。自然科学の哲学的研究から出発し、「絶対弁証法」をとまえ、「種の論理」で西田幾多郎を批判、西田とともに京都学派の双璧となる。戦後は「懺悔道としての哲学」をあらわして自己批判を

し、親鸞の他力に共感する立場から著作活動をつづけた。1950年（昭和25）文化勲章を受章し、1962年（昭和37）4月29日死去、77歳であった。著作に『ヘーゲル哲学と弁証法』『哲学入門』などがある。弥生子68歳の日記には「ある特定の対象とこれほど深い知的な、また愛情をもつての繋がりが出来ることを夢にも考へたらうか」とある。弥生子の長い年月を重ねても文学に対する変わらない真摯な姿勢、その意志の強さ、持続力、集中力、とりわけ端正な文章と緻密な構成、深い人間洞察には感銘を受ける。

4. 生涯学習としての弥生子の文学

「一葉のみが明治大正を通じて唯一の女流作家といふわけではないとおもふ。私などでも、一葉よりは或る意味に於てずっとよい仕事をしているつもり」と日記に書く野上弥生子とは如何なる小説家だったのか。弥生子は怯みない知的好奇心を把持し、『海神丸』では悪に対する人間の本質を、『真知子』では非人間的な行動を、『迷路』では知識層の青年たちに蔓延る左翼思想の体質を、『秀吉と利休』では芸術と政治の対立を、『森』では自らの少女時代から遡る生の意味を問う大作に挑み続けた。一葉が24年の生涯では書き尽くせなかった人間の真実の姿を、弥生子は明治・大正・昭和と一葉の4倍の時間をかけてありとあらゆる方面から描き切った。男性作家顔負けの重厚な主題を中編・長編小説といった長丁場に耐えて強靱に突き進んだのである。弥生子の代表作である『海神丸』（ヴェストポケット傑作叢書1922年）『真知子』（鉄塔書院1931年）『迷路』（岩波書店1948年～1956年全6部）『秀吉と利休』（中央公論社1964年）『森』（新潮社1985年）について考察する。

『海神丸』は、武田泰淳の『ひかりごけ』（1954年）に先んじて人肉を食べるといふ小説で、人間が人間を食べるといふ悍ましい主題に真っ向から挑んだ。漂流した貨物船のなか食料がなくなり、食べ物の幻視に脅かされた八歳と五郎助が三吉の白い足に食欲をおぼえて、船長の眼を盗んで三吉を殺すのだが、血だらけになった死骸は戦慄をよぶばかりで食べられない。この悪夢のような船中の数日間を扱って、高まる緊張を船長が金毘羅信仰をもちつつ、どのように迎えていったかという、息詰まる物語である。

『真知子』は、良識ある知識階級の立場からの批判的リアリズムから書かれた。弥生子は、中条（のち宮本）百合子や湯浅芳子とも交友を持ち、『真知子』は、百合子の『伸子』を意識して書いた作品であるといわれ、1920年代の女性の生き方を描いた作品として日本文学に大きな位置を占めている。戦後は百合子が中心人物であった新日本文学会に賛助会員として加わったが、まもなく辞退している。

『迷路』は、第9回読売文学賞（1957年）を受賞した超長編小説である。1936年（昭和11）11月『中央公論』に『黒い行列』として発表、1937年（昭和12）11月『中央公論』に『迷路』として発表したものが、第二次世界大戦後全面改稿されて『迷路』第1、第2部となる。戦時下では書けなかった『迷路』の続稿として1949年（昭和24）1月～1956年（昭和46）10月まで『世界』に連載発表する。1948年より1956年まで『迷路』は6部にわたって岩波書店から刊行される。昭和初年の左翼運動に身を投じて挫折し、苦悩する転向者菅野省三を主人公とし、とくに政財界、貴族ら日本の支配階層に属する人物を多数登場させて戦争勢力の内部別袂に及ぶ、日本および日本人のありようを冷静な視点から突っ込んで描いた雄大な構想をもつ大河小説である。2・26事件から日中戦争におよんだ日本の暗部を緻密に描いている。『迷路』が完結した翌年6月～7月、舞台となった中国を訪問し、延安まで足を伸ばすなど、72歳とは思われぬ行動力であった。

『秀吉と利休』は、第3回女流文学賞（1964年）を受賞した弥生子74歳から78歳にかけての労作である。弥生子は『秀吉と利休』を書くにあたって唐木順三の『千利休』を抜き書き、この時代に詳しい人に会って話を聞き、茶道については表千家の千宗佐に教えをこうている。70代後半に達して、

それまで溜めた思いを一気に溢れさせるかのような作者の筆の勢い、そのエネルギーに、読者はずっと圧倒され続ける。

『森』は、87歳から死に至るまで書き続けられ後数章を残して絶筆となった未完の作品で、日本文学大賞（1986年）を受賞した。明治33年、15歳の菊地加根は九州から東京の森の学園・日本女学院に入学した。「新しい女性」の理想を掲げた自由な校風の下、加根を取りまく女学生たちの青春の姿が細やかに描きだされ、明治の群像が瑞々しく蘇る。それは、女性たちの自立への歩みであると同時に、幕末から明治30年代に至る文化史でもある。

おわりに

弥生子は北軽井沢の山荘を、晩年には「鬼女山房」と称した。弥生子の執筆風景は、まさに鬼気迫るものであった。86歳で文化勲章、96歳で朝日賞を受賞するが、朝日賞の受賞理由は「70余年という世界にも類例のない長期の現役作家活動を続け」だった。弥生子は勉強できる環境（家族関係、時間、場所）を粘り強く独自の方法で構築し、妊娠と出産の繰り返しのなかでたゆまず小説を書き続けた。弥生子の執筆のペースは、一日に200字原稿用紙2～3枚、多くて5～6枚という遅筆であった。

弥生子の日記は、38才から死の17日前まで、実に62年分がほとんど毎日あり、119冊のノートに記されている。弥生子は、その明晰な知性で一世にわたる明治・大正・昭和時代を生き抜いたことで、多くの日本近現代を彩る個性的な人間に多く関わる事ができた。加えて、その真面目な資質で社会を凝視することで、激動の日本近現代を深く掘り下げた作品を描く事ができた。弥生子の描いた社会、風俗、人間は一幅の絵巻物のように力強く、美しく輝いて、生涯学習としての読書に適したものだといえる。

注

- ¹ 野上弥生子の年譜は、『新潮日本文学アルバム32野上弥生子』新潮社1986年5月、古庄ゆき子編『大分県先哲叢書野上彌生子』ドメス出版2011年11月を参照した。
- ² 「夏目漱石」『文藝春秋』42巻8号1964年8月、『野上彌生子全集』22巻岩波書店特装版1984年2月所収p.336
- ³ 「夏目漱石」同掲書同頁
- ⁴ 「夏目先生の思い出—漱石生誕百年記念講演—」『中央公論』81巻5号1966年5月、『野上彌生子全集』22巻岩波書店特装版1984年2月所収p.389
- ⁵ 「夏目漱石」『海』9巻1号1977年1月、『野上彌生子全集』23巻岩波書店特装版1984年2月所収p.273
- ⁶ 「夏目漱石」同掲書同頁
- ⁷ 「明治40年書簡769」『漱石全集』23巻岩波書店1996年9月pp.10-12
- ⁸ 「大正5年書簡2448」『漱石全集』24巻岩波書店1997年2月pp.555-556
- ⁹ 「大正5年書簡2451」『漱石全集』24巻同掲書p.562
- ¹⁰ 「夏目先生の思い出—漱石生誕百年記念講演—」前掲書p.392
- ¹¹ 弥生子の「明暗」は活字にならず、幻の処女作となっていた。「それが、死後三年を経た一九八八年の四月、「ついに出了処女作」として、雑誌『世界』に掲載された。」藪田禎子『女性作家評伝シリーズ3野上彌生子』新典社2009年10月p.57
- ¹² 富岡多恵子『中勘助の恋』（創元社1993年11月）では、富岡氏は、勘助の日記体随筆から漱石、弥

生子、安部能成、岩波重雄や周辺の間人を描きだし、兄嫁末子への愛情など勘助の恋の真実に迫っている。

¹³ 加賀乙彦「解説 美しい老年、美しい恋」『田辺元・野上弥生子往復書簡』岩波書店2002年10月 p.573

*野上弥生子の原文は『野上彌生子全集』全23巻別巻3巻岩波書店（1980年～1982年）、『野上彌生子全集』Ⅱ期全29巻岩波書店（1986年～1991年）に拠った。

三次元弾道軌跡シミュレーションソフトを活用した コーチングに関する実践的研究

永田 聡典・長嶺 健・川面 剛・宇野 美津夫
九州共立大学スポーツ学部

Study of three-dimensional ballistic trajectory simulation system for coaching

Akinori NAGATA, Ken NAGAMINE, Tsuyoshi KAWAZURA, Mitsuo UNO
Kyushu Kyoritsu University Faculty of Sports Science

ABSTRACT

In this study, we will report on the coaching utilizing a three - dimensional ballistic trajectory simulation software. The information to be provided was levelled up by three-dimensional simulation in the biomechanics.

The thing bought in sports coaching is useful information in order that a leader feeds back to a player. In this study, we report a practical example on the coaching method utilizing a three-dimensional ballistic trajectory simulation software has been developed, to verify its usefulness. The feedforward which simulation software is applied in is effective for the coaching to a player.

I. コーチング現場での現状と目的

コーチング現場においては、多く現場にフィードバックするのに時間がかかり、情報が非常に高度であることから、シミュレーションソフトや画像ソフトの活用は敬遠されてきた。しかし、近年の高度な情報処理機能の発達により、スポーツ指導現場では、動画や画像処理ソフト、技術集計データを活用したコーチング方法が開発されている^{1) 5)}。バレーボールにおいて最も顕著なものは、指導者がiPadを活用してコーチングしているシーンであろう。

バレーボールにおいては、データバレーなるゲーム分析ソフトが開発・導入され、技術のデータ化やパフォーマンスの解析を、技能向上や戦術・戦略に活用する方法が確立されてきた。加えて、最近では、技能練習中の動画を撮影し、リアルタイムに選手にフィードバックするシステムも構築されており、自己動作を認知しながらトレーニングすることができる。しかし、⁹⁾ 玉木らは、「初等教育や大学での体育授業や各種団体による合宿・講習会などでは、ビデオ撮影などの映像機器は使われているものの、まだまだ指導者による対面指導が主であり、映像処理技術が多用されているとは言えないのが現状である。」と述べており、これまでのバレーボールのコーチングシステムにおいて、シミュレーションソフトによってオンコートレベルで技術を評価・分析しながらフィードバックする事例は、ほとんど見られない。

そこで本研究では、本研究グループが表計算ソフトウェア Excel を加工して新たに開発したシミュレーションソフトを活用したコーチングを実践し、そのコーチング方法における課題を抽出することを目的とした。

II. 三次元弾道軌跡シミュレーションの開発

これまで、ボールの速度とスピンにより発生するマグナス力は風洞試験によって調べられ、これらの関連については、バレーボールの弾道計算のための二次元数学的モデルで適用された。数学的なモデルによる予測や経験的な知識はコーチによるパフォーマンスに関する3つの指導：トップスピンの重要性、守備側を越えてアウトになる可能性、そして最適目標地点へのボールの到着の予測に活用されてきた^{1) 4)}。このうち、トップスピンの攻撃の有効性を劇的に高めることができ、ネット後方約2mからのアタックの妨害効果を最小限にとどめる可能性があることがわかった。

また、最近では、これまで有効とされてきたフローターサーブやジャンピングフローターサーブなどの無回転サーブでもブレにくいニューボールの開発と出現によって、ドライブサーブ、横方向に曲がるカーブボールやシュートボールもコースを狙う有効な手段となることから、スピン系スポーツボールの軌道の正確さ、着地までの時間短縮を利用する手段が重要性を増してくる。スピンボールの流体力学的実験的調査は、テニス、野球およびゴルフ競技でボールの弾道に対するマグナス力と抗力の測定に限定され、Watts, Ferrer (1987年)、Bearman, Harvey (1976年)によって、野球およびゴルフ・ボールによる実験からマグナス力はスピン数 ω と球速 V の積に比例することが明らかにされた。

一方、抗力に関しては、これまでの多くの実験で、ボールに作用する抗力は境界層内で乱流遷移によってレイノルズ数 $Re=4 \times 10^5$ あたりで急激に低下することが知られている。一般にボール近傍の流れの様相がボールの大きさ、速度 V に比例し、それに加え、表面の特性の要因に強く依存する。したがって、ボールと関連付けられる特定の幾何学および流れ条件を明らかにするため実験結果を使用することが重要である。この研究では、他の研究者によって、実験で確認された回転ボールとマグナス力に相関関係を利用し、また、作用する抗力 D は、実験で得られているボールのレイノルズ数

Re と抗力係数の関係を用いた。そして、初期打出し条件で発射されるボールの刻々と変化する三次元加速度を計算し、その時間進行によって数学アプローチを用いてボール軌道を計算し、その有効性と打ち出し条件の関係を明らかにしようとするものである。

本研究で使用するボールの弾道軌跡の三次元シミュレーションは、表計算ソフト Excel を使用することを考えてモバイル化を実現するため、解析を単純化し、ボールが回転する軸は y - z 平面内にあるとし、打出し条件で与えられた回転軸の傾き角、すなわちスピン傾き角 β は、変化しないと仮定する。したがって、完全三次元解析ではなく準三次元的解析法を使用する。

1. 空中ボールの運動方程式と流体力特性

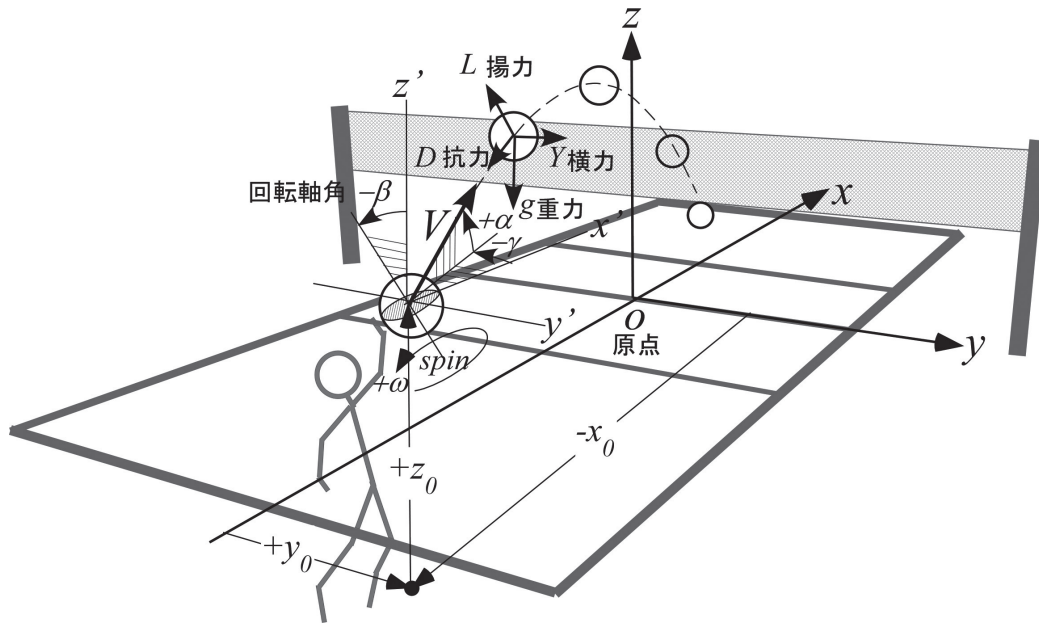


図1. バレーボールサーブの三次元弾道のモデルとパラメータ

また、空中を飛行する物体の運動方程式は、式 (1-1) で表される。 $ma = mg + F_L + F_D + F_Y$ (1-1) ここで、 m はボール質量、 α はボールの加速度、 g は重力加速度、 F_L は揚力、 F_D は抗力、 F_Y は横力である。

図1に示したように、水平方向に γ の方位角で鉛直方向に α の飛行角で、進行方向に対し垂直な面に回転軸をもち、回転軸が垂直方向からの角度 β で回転を与えられる。投げ出されたボールは、重力、流体力である抗力、揚力、スピンによるモーメントで横力が働き、それらの影響で飛行とともに刻々と飛行進路が変化するため三次元軌道を描く。そして抗力係数、揚力係数、横力係数は、流れの状態、ボールの表面状態及び空気の動粘度によって変化する。また、球形のボールが回転してマグナス効果が作用する場合、ボールに働く揚力および抗力の傾向は、スピンの周速度 U とボール飛行速度 V から、次式で定義されるスピン率 (回転速度比) S の関数でもある。

2. スピンボールの抗力係数、揚力係数

また、バレーボールの場合、これまでの多くの研究から S.S.Kao ら (1994) は、マグナス力 M はボールの進行方向に垂直な面内に発生し、その大きさは、一秒間のスピン数 N と進行速度 V と係数 C によって式 (1) で表されるとした。

$$M = C \cdot N^a \cdot V^b \quad (1-2)$$

そして、測定された結果を使用して、それらのデータと相関関係から回帰係数との差を最小化する C 、 a および b の値を選んだ最もよい相関関係を表す回帰式を用いた予測値と測定値の結果を図 2 に示す。

$$M = 0.00041 \cdot N^{0.8} \cdot V^{2.4} \quad (1-3)$$

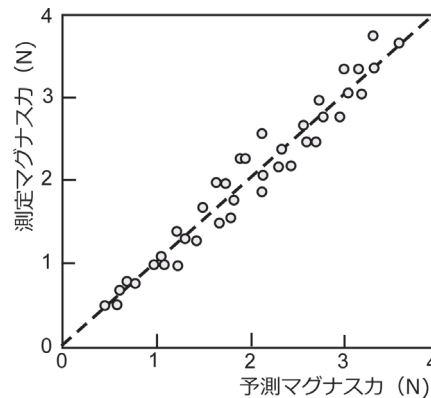


図 2. マグナス力の測定値と予測値の相関 (S.S.Kao らの結果)

マグナス効果によって発生する力 M から、バレーボールに作用する進行方向に垂直な面に働くマグナス係数 C_M は、揚力係数 C_L と横力係数 C_Y の合成で考えられることから、抗力係数 C_D と同様に式 (1-4) で定義される。

$$C_M = \frac{M}{\frac{1}{2} \rho \cdot V^2 \cdot A} \quad (1-4)$$

ここで、 ρ は空気密度 ($=1.21(\text{kg}/\text{m}^3)$)、 A はバレーボールの直径 d から求められる投影面積 1-5a である。式 (3) に式 (2) を代入すれば、バレーボールの C_M は、次式 1-5b で予測されることになる。

$$\left(= \frac{\pi}{4} d^2 (\text{m}^2) \right) \quad (1-5a) \quad C_M = 0.01958 \cdot \omega^{0.8} \cdot V^{0.4} \quad (1-5b)$$

回転軸に垂直な面内に作用するマグナス力、すなわちマグナス力係数 C_M は、回転軸の傾き角 β によって、垂直方向に作用する揚力係数 C_L と水平方向に作用する横力係数 C_Y に次式で分離されることから、三次元軸方向のそれぞれの加速度を求める際にこの結果を利用する。

$$C_L = C_M \cdot \sin \beta, \quad C_Y = C_M \cdot \cos \beta \quad (1-6)$$

一方、進行方向に対し垂直な面内に回転軸を有するスピンドールに作用する抗力 D は、その回転数によって定常抗力係数 C_{D0} を基準に僅かに上昇し、その傾向は、サッカーボールに対して行われたAsaiらの研究によって、次式1-7で示される。

$$C_D = C_{D0} + 0.014\omega \quad (1-7)$$

ここで、レイノルズ数に対する定常抗力係数 C_{D0} の変化は、R. D. Mehtaら(2001)の実験的研究の成果として、旧来のボールと最新ボールについて求められている(図3)ことから、図2中に示したように、その結果を多項式近似した係数を用い関数として表すことで計算に利用することができる。

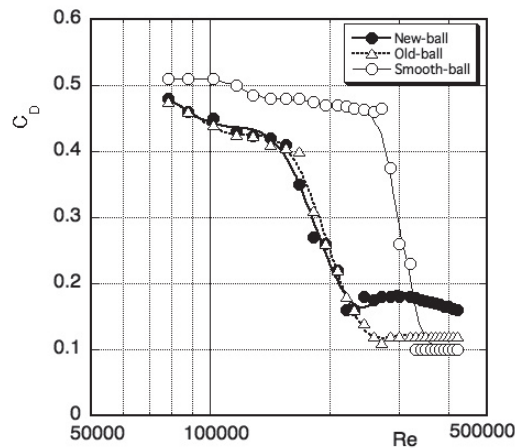


図3. レイノルズ数によるバレーボール定常抗力係数の変化

3. 軌道計算のアルゴリズム

上記方法に基づいて、表計算ソフトウェア Excel を利用し、数値シミュレーションが行われ、時系列の時間進行で解く方法を用いた。以下に軌道計算のアルゴリズムの手順を示す。

- ① 重力加速度 $g(m/s^2)$ 、ボールの質量 $m(kg)$ 、直径 $d(m)$ 、気温 $t(^{\circ}C)$ 、大気圧 $p_0(pa)$ 、飽和蒸気圧、空気密度 $\rho(kg/m^3)$ など定数を定義する。ここで、空気密度 ρ は、大気圧、気温から次式1-8で得られる。

$$\rho = \frac{1.293}{(1 + 0.00367 \times t)} \times \frac{p_0}{101300} \quad (1-8)$$

- ② 時間ステップ間隔 $\Delta t(sec)$ 、サーブまたはアタック打出し位置 (x_0, y_0, z_0) 一秒間当たりのスピン回転数 $n(rps)$ 、ボール初速度 $V(m/s)$ 、打出し方向角 $\gamma(deg)$ 、打出し角 $\alpha(deg)$ 、スピン回転軸角 $\beta(deg)$ の初期条件を入力する。
- ③ 変数として、 x 方向移動距離、 y 方向移動距離、 x 方向位置、 y 方向位置、 x 方向速度、 y 方向速度、 x 方向加速度、 y 方向加速度、ボール速度 $V(m/s)$ 、飛行角度(ボール方向が水平面となす角) α 、抗力係数 C_D 、揚力係数 C_L 、横力係数 C_Y 、スピン率 S 、スピン減衰率を設定する。

- ④ ボール速度とボール直径および空気の動粘度からレイノルズ数を計算し、図3から定常抗力係数を求める。スピン回転数から式 (1-7) を用い、抗力係数 C_D 瞬時を計算する。また、マグナス力係数 C_M を式 (1-5) で求め、揚力係数 C_L 、横力係数を求める。
- ⑤ 時間ステップ間隔ごとに繰り返し計算を行う。この繰り返しは、ボールがコートに到達するまで行われる。
- ⑥ 時間ステップでの x 方向、 y 方向の移動距離、到達位置を計算する。
- ⑦ 以上をベースラインに達する時間まで、繰り返し計算を行う。

4. シミュレーションソフトウェアの確認

表計算ソフトウェア Excel を使った数値計算結果のウィンドウ画面の例を図 4、図 5 に示す。計算条件は、ジャンプサーブを想定し、サーブ打出し位置、 $x_0 = -12.0(m)$ 、 $y_0 = 3.0(m)$ 、 $z_0 = 3.0(m)$ 、サーブ初速 $V = 25(m/s)$ で、サーブ方向角 $\gamma = 0(deg)$ 、サーブ角 $\alpha = 5(deg)$ で下方に、スピン回転数 $n=8(rps)$ (一秒間に 45 回転 トップスピン状態)、スピン回転軸角 $\beta = 30(deg)$ でサーブが打出された場合である。サーブ後、ボールは速度 $19.86m/s$ でネットの上 $0.1m$ を通過後、 1.02 秒後に速度 $17.5m/s$ に減速し、エンドラインの手前 $0.78m$ のコート上に -25.6° の角度で接地する。スピン回転軸角 $\beta = 30(deg)$ の回転軸の傾きによって、カーブボールとなり、ネット通過後は左寄りにコースを変える。

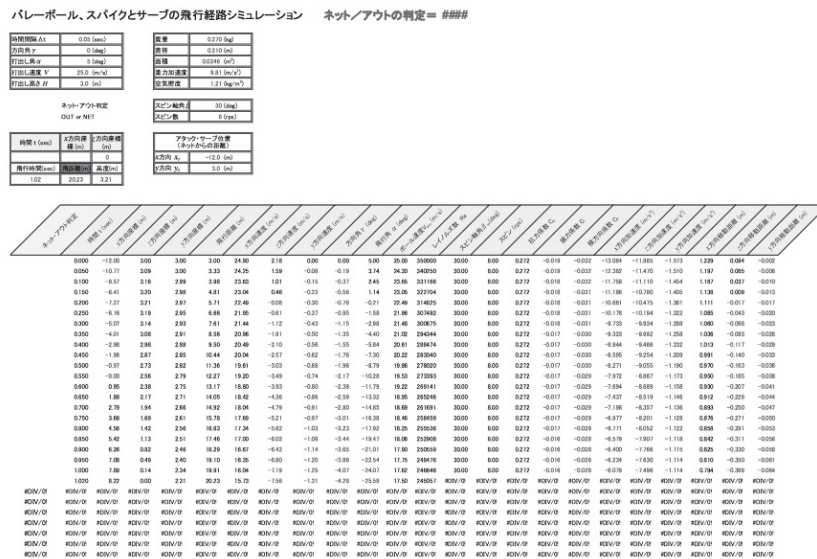


図 4. シミュレーション計算結果の例 1

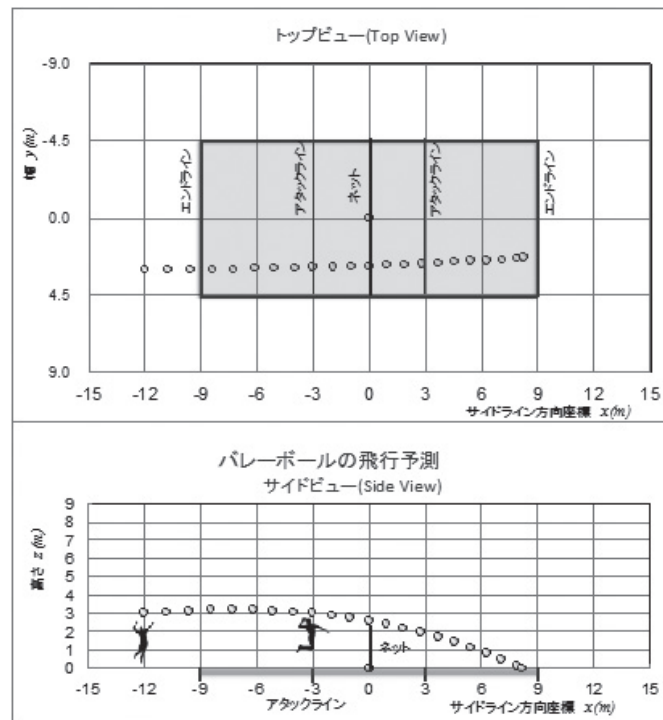


図5. シミュレーション結果ビューアーの例2

III. サーブにおけるコーチング実践方法

1. バレーボールにおけるサーブの重要性

ラリーポイント制において、サーブ時の得点が大きく勝利に関わるため、世界レベルの試合ではビッグサーブと呼ばれる打球速度の大きく強いボールをサーブすることが主流となっている。これは、直接サーブによる得点を狙い、かつ相手のレシーブを乱すことによって攻撃の選択肢を減らすことを目的にした速くて正確なサーブが重要視されているためである⁴⁾。そのため、速度が大きく、トップスピンによってアウトになりにくいジャンプサーブがビッグサーブとして用いられることが多い。そして世界トップクラスのビッグサーバーは、120km/h 程度の速度でサーブを行う²⁾。よって、ビッグサーブが勝利に大きく貢献する技術であるといえることから、ジャンプサーブを鍛錬することが重要である。

サーブの鍛錬方法として、動画撮影によるフィードバックによってサーブ動作に着目したコーチングは方法論の一つとして既存する⁸⁾が、自分の打球に関するフィードバックあるいはフィードフォワードのコーチング方法は存在しない。そこで、今回開発した三次元シミュレーションソフトを活用した打球軌跡のフィードバックによるコーチング方法の構築を目指し、実践することによる課題抽出を行った。

2. ジャンプサーブの撮影及び計測

ハイスピードカメラ (iPhone6) を用いて、シャッタースピード 240fps で撮影した。撮影した映像により、インパクト後にボールが手離れてからボール3つ分移動した時点でのコマ数をカウントし、球速を算出した。(写真1) スピン回転数については、ボールが一回転するまでの時間のコマ数をカウントした。ボール打ち出し角 (図1: サーブ角 α) 及びサーブ時の打点高は、Dartfish Express を用いて、撮影した映像から算出した。(写真2) また、サーブ時の打点高についても同様のソフトを

用いて、撮影した映像から算出した。

撮影した映像から算出したそれぞれのパラメータをシミュレーションソフトに入力し、その時のサーブの状態と目標とする効果的なパラメータとを比較して選手へのフィードバックを進めた。選手によってサーブのスピンの量、打点高、球速が異なることから、シミュレーションしたパラメータ及び、撮影した映像から算出したパラメータを即時に選手へフィードバックすることは困難であった。

そのため、事前に効果的なサーブのシミュレーション結果を数パターン表記し選手へ提示することによって、サーブにおける目標を設定し、選手にそれぞれ打ちたいサーブの種類やコースなどを決定させサーブを打たせた。(図6)

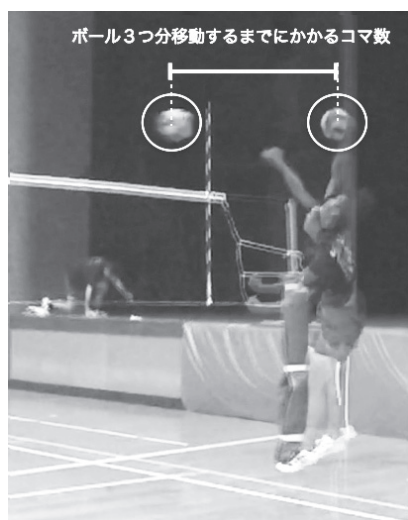


写真1. 打球速度算出方法

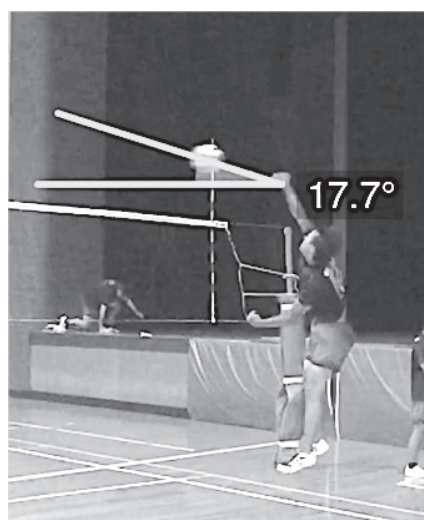


写真2. 打ち出し角算出方法

即時ではないものの、フィードバックと目標設定の提示を繰り返しながらサーブにおけるコーチングを実践したところ、選手から以下の主観的評価を得た。:

- ・「今の自分が打ったサーブのどこを修正すれば理想に近づくのか考えて練習できる」
- ・「自分の現状が把握しやすく、新しい刺激がもたらされた」
- ・「今まで目標にできなかったものが明らかになったことで非常に参考になった」
- ・「これまでサーブを練習するときに考えたことがないものを提供してもらえる」
- ・「サーブを打つときに新しい感覚を持ってトレーニングすることができる」
- ・「フィードバックに時間がかかるため、もっと早く結果を知りたい」

以上のことから、サーブした試技を分析し、理想とするサーブを打つうえで必要な理想的な速度・スピン量などをシミュレーションすることは、選手にとってこれまでにない非常に有益な情報であることがわかる。また選手が理想とするサーブのコース・スピード・スピン量を事前に提示することによって、これまでのサーブにおけるコーチングで設定できなかった目標が設定できることとなった。このことによって、シミュレーションソフトを活用したフィードバックを活用したコーチング方法が技能向上のために有効になる可能性が示唆された。

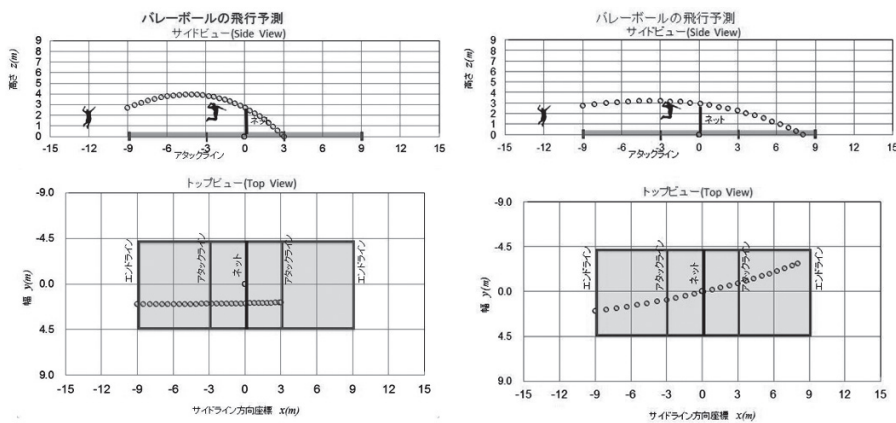


図6. 効果的なサーブのシミュレーション例

IV. モバイル分析ソフトとして現場で活用する上での課題点

本研究で用いた三次元弾道軌跡シミュレーションソフトは、ジャンプサーブにおける技能向上を目的とした新しいコーチング方法の構築のために開発した。本研究では、シミュレーションソフトを活用したコーチング方法を構築するための課題を抽出することを目的に、指導現場での実践的コーチングを試行した。シミュレーションソフトを活用したコーチングを実践したところ、以下の課題が得られた。

- ・ 弾道軌跡をシミュレーションするために必要なパラメータの算出に一定の時間を要した。これは、サーブの画像解析が円滑に行えていないことが原因と考えられる。サーブの撮影から画像処理によるパラメータの算出までの時間をより短縮する必要がある。
- ・ 選手個々の目標設定が異なるため、円滑に選手にフィードバックするためには、複数台のカメラ及びシミュレーションソフトを搭載したモバイル端末が必要である。

以上のことから、本研究で開発したシミュレーションソフトを技術向上に有益な新しいコーチング方法として構築するための課題が示された。今後の研究課題としては、サーブの画像処理を更に円滑化させ、選手へのフィードバックをできるだけ即時的に行うことが挙げられる。加えて、シミュレーションソフトを活用したコーチングによるサーブ技能向上効果の検証や、選手の技能に合わせたシミュレーションパターンの増加などが必要であると考えられる。

V. 参考文献

- 1) A.Baca, P.Kornfeind : Rapid Feedback Systems for Elite Sports Training, Pervasive Computing, IEEE, Volume 5 , Issue 4, 2006, pp.70-76.
- 2) Forthomme, B., Croisier, J.L., Ciccarone, G., Crielaard, M.J. and Coes, M. : Factors correlated with volleyball spike velocity. The American journal of sports medicine, 33 (10) : pp.1513-1519, 2005,.
- 3) P.W. Bearman, J.K. Harvey : Golf ball aerodynamics. Aeronautical Quarterly, 27, 1976, pp. 112-122.
- 4) Papadimitriou, K., Pashali, E., Sermaki, I., Mellas, S., Papas, M : The effect of the opponents' serve on the offensive actions of Greek setters in volleyball games. International journal of performance analysis in sport, Volume 4, Number 1, 2004, pp. 23-

33 (11) .

- 5) 山本朋弘, 清水康敬: ITを活用した学習場面における集中度と行動分析に関する検討-小学校5年生社会科でのITを活用した授業の分析から-, 日本教育工学会論文誌, 30, 2006, pp.93-96.
- 6) R. D. Mehta and J. M. Pallis: The aerodynamics of a tennis ball, Sports Engineering, Volume 4, Issue 4, 2001, pp. 177-189.
- 7) Robert.G Watts and Ricardo Ferrer: The lateral force on a spinning sphere: Aerodynamics of a curveball, American Journal of Physics, 55 (1) , 1987, pp.40-44.
- 8) 原妃斗美, 賀川昌明, 田中直樹, 上間達也, 上田 宏美: バレーボールの基本的技能習得に及ぼす動画遅延再生装置利用の効果: 高校生女子バレーボール部員を対象にして, 鳴門教育大学実技教育研究, vol.19, 2009, pp.39-47.
- 9) Shawn S. Kao, Richard W. Sellens, and Ioan M. Stevenson: Journal of Applied Biomechanics, 10, 1994, pp.95-109.
- 10) 玉木徹, 牛山幸彦, 八坂剛史: 「スポーツ選手の技能向上のための動画像処理とその実用化」, 電子情報通信学会技術報告 パターン認識・メディア理解研究会 PRMU, No.116, 2005, pp.13-18.

Differences in the landing positions of rebound balls between one-handed and two-handed three-point shots in basketball

Tsuyoshi KAWAZURA

Faculty of Sports Science, Kyushu Kyoritsu University
Graduate School of Sports and Health Science, Doctoral Program, Fukuoka University

Akihito YAITA, Ken NAGAMINE, Akinori NAGATA
Faculty of Sports Science, Kyushu Kyoritsu University

Yasushi OHYAMA, Osamu AOYAGI
Department of Health and Sport Science, Fukuoka University

ABSTRACT

This study aimed to examine the differences in the landing positions of rebound balls when one- and two-handed three-point shots were taken. Sixteen university basketball players (8 male and 8 female three-point shooters) were asked to shoot 200 three-point shots from five different directions. We recorded the landing positions of all rebound balls. Results showed that more one-handed shots than two-handed shots landed near the basket. It is likely that shots taken by two-handed shooters were thrown from a tighter angle because of their lack of ability to shoot from a distance, resulting in the balls landing farther from the basket than the one-handed shots. In addition, the arcs of shots thrown by two-handed shooters frequently moved from right to left. This can be explained by the difficulty associated with balancing the strength of both hands when shooting.

Key word: cross-table, adjusted residuals, odds ratios

バスケットボールにおける3ポイントショット時でのワンハンドショットとツーハンドショットのリバウンド落下位置の違いについて

川面 剛

九州共立大学スポーツ学部
福岡大学大学院スポーツ健康科学研究科博士課程後期

八板 昭仁・長嶺 健・永田 聡典
九州共立大学スポーツ学部

大山 泰史・青柳 領
福岡大学スポーツ健康科学部

I. Introduction

In basketball games, the success rate of three-point shots is about 30% to 35% , and is lower than that of two-point shots. The remaining 65% to 70% of three-point shots result in rebounds (Yoshii, 1986, 1994). For defensive players, getting many rebounds means decreasing the chances for the opposing team to steal the ball, and for offensive players it means increasing the chances of making a two-point shot with a high success rate because they can often get the ball near the basket, as well as lessening the chances for the opposing team to make a shot (Kasahara, 1987; Wooden, 1988). For these reasons, if a team controls the rebounds, they win the game (Allesen, 1967; Bryant, 1967; Huberty, 1970; Moormeier, 1971), and successfully getting rebounds has been regarded as one of the most decisive factors determining victory or defeat (Ibanez et al., 2003; Karipidis, et al., 2001; Wooden, 1988).

Thus, many studies on rebounds have been conducted to date. Harada (1986) reported that the players' positioning on the court is important to getting rebounds. It is easy to predict where the ball is going to land after observing where it hits (e.g., the backboard or rim, and what part of the backboard or rim). In addition, observing the arc of the ball makes it even easier to get rebounds. However, the time to move to the most optimal spot is limited and players risk losing the spot to opposing players. In short, waiting to confirm where the ball is going to land does not actually give a player enough time to move to the optimal rebound position (Wooden, 1988). Three-point shots can be taken with either one hand or both hands. The main difference between one-handed and two-handed shots is the throwing distance; two-handed shots are suitable for shooting from long ranges and are frequently made by players with weak physical strength. Although two-handed shots have the advantage of distance, they also have the risk of landing to either side of the basket unless the player shoots with equal strength in both hands.

In university basketball, almost all male players take one-handed shots and almost all female players take two-handed shots; therefore, the factors of gender and shooting technique cannot be separated. Consequently, we had no option but to consider gender and shooting technique to be an interrelated factor.

II. Methods

1. Subjects

Subjects in this study were 16 basketball players (8 male one-handed shooters and 8 female two-handed shooters) at K-university who had taken three-point shots in actual games.

2. Classification of landing positions of rebound balls

Following Uchiyama (1987) and Tokunaga et al. (1997), the basketball court was divided into different areas with elastic tape as shown in Figure 1. First, elastic tape was applied in five directions divided by 36 degrees from the midpoint of the end line; these five directions were named "top," "right wing," "left wing," "right corner" and "left corner." Secondly, four areas were established based on the distance from the midpoint of the end line (2.15 m, 2.05 m and

2.15 m); these areas were named “near,” “middle,” “far” and “outside the two-point shot area.”

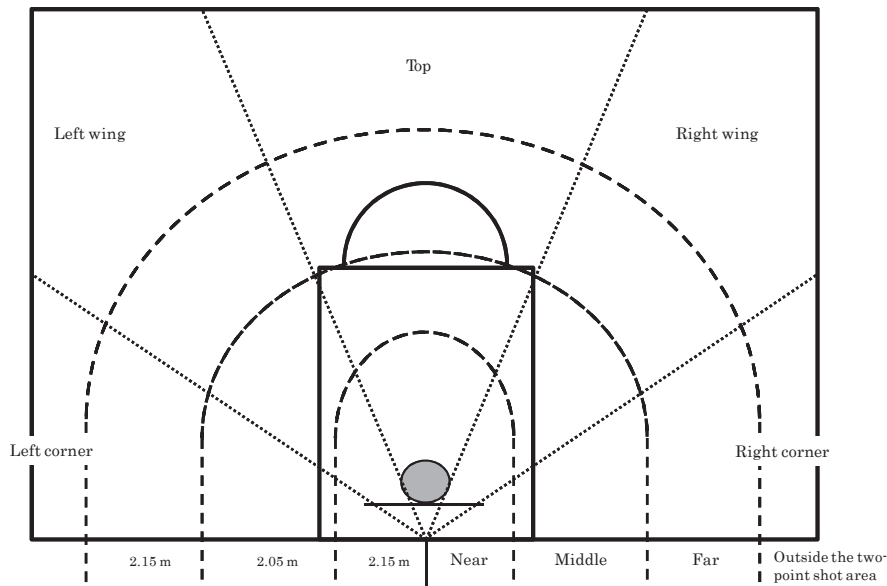


Figure.1 Chart in the rebound fall location in the basketball

3. Measurement method

Both male one-handed shooters and female two-handed shooters took 200 three-point shots from the three-point shooting area in all five directions. We counted the number of unsuccessful shots that landed in each of the areas classified above. We counted unsuccessful shots that hit the rim or backboard as rebound balls; however, unsuccessful shots that did not hit the rim or the backboard were not counted and the shooters shot again.

4. Data analysis method

The differences of ratios between the landing positions of the one-handed shots and two-handed shots were examined using odds ratios (ORs). The statistical significance of ORs was determined based on formula (1) below (Howell, 1997; Masui, 2003).

$$\exp \left(\ln \frac{ad}{bc} \pm 1.96 \sqrt{\frac{1}{a} + \frac{1}{b} + \frac{1}{c} + \frac{1}{d}} \right), \dots \dots \dots (1),$$

where a , b , c , d are the frequencies of each cell in a cross table.

In order to examine the relationship between the angles and distances of the landing spots based on the areas classified above, the chi-square test was conducted after creating a cross table consisting of angles and distances and compiling frequency data in the table. If a significant difference was found, adjusted residuals (AR) (Hara, 1983) were computed to compare the characteristics between the two shooting techniques using formula (2) below.

$$u_{ijo} = \frac{nij - Fij}{\sqrt{Fij \left(1 - \frac{ni.}{n}\right) \left(1 - \frac{n.j}{n}\right)}} , \dots\dots\dots (2),$$

where u_{ijo} =adjusted residual, nij =actual frequency of i-row and j-column, Fij =expectation of i-row and j-column, ni =total of i-row, $n.j$ =total of j-column, and n =overall total of cross table.

III. Results

1. Total number of rebounds

The number of successful shots and the number of unsuccessful shots (i.e., rebounds) for both shooting methods and each shooting area are shown in Table 1. Of the total 3200 one-handed shots taken from the corner (200 shots from both the left and right corners by the 8 male shooters), 1687 shots were successful and 1513 were not. Regarding shots taken from the wing, 1751 shots were successful and 1449 were not. Of the total 1600 shots taken from the top, 947 shots were successful and 653 were not. The percentages of successful shots from the corner, wing and top were 52.7% , 54.7% and 59.5% , respectively, and the combined number of rebounds was 3615.

Table 1. The number of successful shots and rebounds by shooting method and shooting area

Shooting area	One-handed shots		Two-handed shots		Total
	Successful	Unsuccessful	Successful	Unsuccessful	
Corner	1687	1513	1815	1385	6400
Top	947	653	876	724	3200
Wing	1751	1449	1694	1506	6400
Total number of rebounds		3615		3615	

2. Differences in landing positions of rebounds when shots were taken from the three-point shooting area of the corner

The landing positions of rebounds for shots taken from the three-point shooting area of the corner for both shooting techniques are shown in Table 2. The number of rebounds when one-handed shots were taken from the three-point shooting area of the corner was 392 (25.9%) for “near,” 1027 (67.9 %) for “middle,” and 94 (6.2 %) for “far.” When two-handed shots were taken from the corner, the number of rebounds was 281 (20.3%) for “near,” 1042 (75.2%) for “middle,” and 62 (4.5%) for “far.” For both shooting techniques, most rebounds landed in the “middle” and the least rebounds landed in the “far” area. No rebounds landed “outside the two-point shot area.”

Table 2. The number of rebounds and landing positions of shots taken from the corner

Distance	One-handed shots						Two-handed shots					
	Corner on the same side	Wing on the same side	Top	Wing on the opposite side	Corner on the opposite side	Total	Corner on the same side	Wing on the same side	Top	Wing on the opposite side	Corner on the opposite side	Total
Near	32	86	92	94	88	392	23	71	87	78	22	281
Middle	77	211	162	227	350	1027	57	195	193	230	367	1042
Far	13	32	20	23	6	94	15	21	17	5	4	62
Total	122	329	274	344	444	1513	95	287	297	313	393	1385

For one-handed shots, the number of rebounds by direction was 122 (8.1%) for “corner on the same side,” 329 (21.7%) for “wing on the same side,” 274 (18.1%) for “top,” 344 (22.7%) for “wing on the opposite side” and 444 (29.3%) for “corner on the opposite side.” When two-handed shots were taken, the number of rebounds by direction was 95 (6.9%) for “corner on the same side,” 287 (20.7%) for “wing on the same side,” 297 (21.4%) for “top,” 313 (22.6%) for “wing on the opposite side” and 393 (28.4%) for “corner on the opposite side.” In both shooting techniques, the ball landed in the “corner on the opposite side” most frequently, followed by the wings and top. The number of rebounds landing in the “corner on the same side” was the lowest.

Table 3. Odds ratios of one-handed shots to two-handed shots taken from the corner by distance and direction

Distance	Direction	One-handed shots	Total	Two-handed shots	Total	Odds ratio	5%		1%	
							Upper limit	Lower limit	Upper limit	Lower limit
Distance	Near	392		281		1.276	1.512	1.077	1.595	1.021
	Middle	1027	1513	1042	1384	0.902	1.009	0.805	1.046	0.777
	Far	94		61		1.410	1.961	1.013	2.178	0.912
Direction	Corner on the same side	122		95		1.176	1.552	0.890	1.695	0.815
	Wing on the same side	329		287		1.049	1.249	0.882	1.320	0.834
	Top	274	1513	297	1384	0.845	1.011	0.706	1.070	0.667
	Wing on the opposite side	344		313		1.006	1.192	0.849	1.258	0.805
	Corner on the opposite side	444		393		1.034	1.206	0.887	1.267	0.844

After creating cross tables for both the direction and distance of the rebound landing positions, the relationship between the two shooting techniques was examined using the chi-square test. As a result, significant relationships were found in both techniques (one-handed shots: $\chi^2=53.00$, $df=8$, $p<0.01$; two-handed shots: $\chi^2=136.61$, $df=8$, $p<0.01$). Thus, in order to examine what kind of relationship exists between distance and direction, ARs for each cell were calculated. Table 4 displays the ARs for shots taken from the three-point shooting area of the corner computed in order to examine what combination of distance and direction gave values significantly higher or lower than the expectation values, which were computed by independently summing up total numbers of distances and directions. For both shooting techniques, significantly higher ARs than the expectation values were found in the “near and top” (one-handed shots: $AR=3.201$; two-handed shots: $AR=4.354$), the “middle and corner on the opposite side” (one-handed shots: $AR=5.879$; two-handed shots: $AR=9.849$) and the “far and wing on the same side” (one-handed shots: $AR=2.985$; two-handed shots: $AR=2.614$). In addition, we found a significantly higher AR in the “far and corner on the same side” with two-handed shots than expected ($AR=5.525$).

Table 4. Adjusted residuals for landing positions of shots taken from the corner by distance and direction

Distance	One-handed shots					Two-handed shots				
	Corner on the same side	Wing on the same side	Top	Wing on the opposite side	Corner on the opposite side	Corner on the same side	Wing on the same side	Top	Wing on the opposite side	Corner on the opposite side
Near	0.084	0.108	3.201	0.682	-3.484	0.985	2.105	4.354	2.316	-8.557
Middle	-1.175	-1.644	-3.429	-0.854	5.879	-3.564	-3.214	-4.618	-0.816	9.849
Far	2.120	2.985	0.823	0.414	-5.049	5.525	2.614	1.173	-2.800	-3.918

$\chi^2=53.00$, $df=8$, $p<0.01$

$\chi^2=136.61$, $df=8$, $p<0.01$

3. Differences in landing positions of rebounds when the shots were taken from the three-point shooting area of the top

The landing positions of rebounds for shots taken from the top for both shooting techniques are shown in Table 5. For one-handed shots, the numbers of rebounds by landing position were 182 (27.9 %) for “near,” 412 (63.1 %) for “middle,” and 59 (9.0 %) for “far.” For two-handed shots, the numbers were 134 (18.5 %) for “near,” 528 (72.9 %) for “middle” and 62 (8.6%) for “far.” For both shooting techniques, most rebounds landed in the “middle” and the least landed in the “far” area. No rebounds landed “outside the two-point shot area.”

Table 5. The number of rebounds and landing positions of shots taken from the top

Distance	One-handed shots						Two-handed shots					
	Corner on the same side	Wing on the same side	Top	Wing on the opposite side	Corner on the opposite side	Total	Corner on the same side	Wing on the same side	Top	Wing on the opposite side	Corner on the opposite side	Total
Near	14	28	100	34	6	182	11	31	72	11	9	134
Middle	43	92	157	92	28	412	61	92	217	115	43	528
Far	0	9	27	21	2	59	4	15	30	8	5	62
Total	57	129	284	147	36	653	76	138	319	134	57	724

For one-handed shots, the number of rebounds by direction was 57 (8.7%) for “corner on the same side,” 129 (19.8%) for “wing on the same side,” 284 (43.5%) for “top,” 147 (22.5%) for “wing on the opposite side,” and 36 (5.5%) for “corner on the opposite side.” When two handed shots were taken, the number of rebounds by direction were 76 (10.5%) for “corner on the same side,” 138 (19.1 %) for “wing on the same side,” 319 (44.1 %) for “top,” 134 (18.5%) for “wing on the opposite side” and 57 (7.9%) for “corner on the opposite side.” For both shooting techniques, the number of rebounds landing in the “top” was the highest, followed by both wings and the corners.

Table 6. Odds ratios of one-handed shots to two-handed shots taken from the top by distance and direction

Distance	Direction	One-handed shots	Total	Two-handed shots	Total	Odds ratio	5%		1%	
							Upper limit	Lower limit	Upper limit	Lower limit
	Near	182		134		1.506	1.928	1.176	2.084	1.088
	Middle	412	653	528	724	0.865	1.022	0.732	1.077	0.695
	Far	59		62		1.055	1.53	0.727	1.721	0.647
	Corner on the same side	57		76		0.832	1.191	0.581	1.334	0.518
	Wing on the same side	129		138		1.036	1.347	0.797	1.464	0.734
	Top	284	653	319	724	0.987	1.196	0.815	1.270	0.767
	Wing on the opposite side	147		134		1.216	1.573	0.941	1.706	0.867
	Corner on the opposite side	36		57		0.7	1.077	0.455	1.234	0.397

After creating cross tables for both distance and direction of landing positions of shots taken from the top and examining the relationship between the two shooting techniques using the chi-square test, a significant relationship was found for both techniques (one-handed shots: $\chi^2=27.82$, $df=8$, $p<0.01$; two-handed shots: $\chi^2=21.18$, $df=8$, $p<0.01$). Thus, in order to examine what kind of relationship exists between the two shooting techniques, ARs for each cell were calculated. Table 7 displays the ARs for shots taken from the three-point shooting area of the top computed in order to examine what combination of distance and direction gave significantly higher or lower values than the expectation values, which were computed by independently summing up total numbers of distances and directions.

Table 7. Adjusted residuals for landing positions of shots taken from the top by distance and direction

Distance	One-handed shot					Two-handed shot				
	Corner on the same side	Wing on the same side	Top	Wing on the opposite side	Corner on the opposite side	Corner on the same side	Wing on the same side	Top	Wing on the opposite side	Corner on the opposite side
Near	-0.583	-1.744	3.67	-1.457	-1.543	-0.957	1.33	2.498	-3.401	-0.551
Middle	2.022	2.161	-3.629	-0.145	1.878	1.521	3.721	-2.635	3.721	0.444
Far	-2.491	-0.91	0.369	2.523	-0.749	-1.087	1.076	0.718	-1.188	0.059

$\chi^2=27.81, df=8, p<0.01$ $\chi^2=21.18, df=8, p<0.01$

4. Differences in landing positions of rebounds when shots were taken from the three-point shooting area of the wing

The landing positions of rebounds for shots taken from the wing for both shooting techniques are shown in Table 8. For one-handed shots, the number of rebounds by landing position were 520 (35.9%) for “near,” 758 (57.1%) for “middle,” and 101 (7.0%) for “far.” For two-handed shots, the results were 284 (18.9%) for “near,” 1095 (72.7%) for “middle,” and 127 (8.4%) for “far.” For both shooting techniques, most rebounds landed in the “middle” and the least landed in the “far” area. No rebounds landed “outside the two-point shot area.”

Table 8. Number of rebounds and landing positions of shots taken from the wing

Distance	One-handed shots						Two-handed shots					
	Corner on the same side	Wing on the same side	Top	Wing on the opposite side	Corner on the opposite side	Total	Corner on the same side	Wing on the same side	Top	Wing on the opposite side	Corner on the opposite side	Total
Near	27	86	123	232	52	520	16	33	78	124	33	284
Middle	7	190	181	271	109	758	109	193	253	395	145	1095
Far	19	30	45	6	1	101	16	38	66	6	1	127
Total	53	306	349	509	162	1379	141	264	397	525	179	1506

For one-handed shots, the number of rebounds by direction was 53 (8.5%) for “corner on the same side,” 306 (21.1%) for “wing on the same side,” 349 (24.1%) for “top,” 509 (35.1%) for “wing on the opposite side,” and 162 (11.2%) for “corner on the opposite side.” The results for two-handed shots were 141 (9.4%) for “corner on the same side,” 264 (17.5%) for “wing on the same side,” 397 (26.4%) for “top,” 525 (34.9%) for “wing on the opposite side” and 179 (11.9%) for “corner on the opposite side.” For both shooting techniques, most rebounds landed in the “wing on the opposite side”, followed by the “top,” the “wing on the same side,” and the “corner on the opposite side;” the least rebounds landed in the “corner on the same side.”

Table 9. Odds ratios of one-handed shots to two-handed shots taken from the wing by distance and direction

Distance		One-handed shots	Total	Two-handed shots	Total	Odds ratio	5%		1%	
							Upper limit	Lower limit	Upper limit	Lower limit
Distance	Near	520	1449	284	1506	1.903	2.237	1.619	2.354	1.538
	Middle	828	1449	1095	1506	0.786	0.882	0.7	0.915	0.675
	Far	101	1449	127	1506	0.827	1.084	0.63	1.181	0.578
Direction	Corner on the same side	123	1449	141	1506	0.907	1.167	0.704	1.264	0.65
	Wing on the same side	306	1449	264	1506	1.205	1.442	1.006	1.526	0.951
	Top	346	1449	397	1506	0.914	1.073	0.778	1.129	0.739
	Wing on the opposite side	509	1449	525	1506	1.008	1.161	0.875	1.214	0.836
	Corner on the opposite side	162	1449	179	1506	0.941	1.177	0.752	1.264	0.7

After creating the cross tables for both direction and distance of landing positions when the shots were taken from the wing and examining the relationship between the two shooting techniques using the chi-square test, significant differences were found in both techniques (one-handed shots: $\chi^2=101.41, df=8, p<0.01$; two-handed shots: $\chi^2=113.69, df=8, p<0.01$).

Thus, in order to examine what kind of relationship exists between the two shooting techniques, ARs for each cell were calculated. Table 10 displays the ARs for shots taken from the three-point shooting area of the wing computed in order to examine what combination of distance and direction had significantly higher or lower values than the expectation values, which were computed by independently summing up total numbers of distances and directions.

Table 10. Adjusted residuals for landing positions of shots taken from the wing by distance and direction

Distance	One-handed shots					Two-handed shots				
	Corner on the same side	Wing on the same side	Top	Wing on the opposite side	Corner on the opposite side	Corner on the same side	Wing on the same side	Top	Wing on the opposite side	Corner on the opposite side
Near	-3.368	-3.195	-0.288	5.6	-1.067	-2.395	-2.908	0.469	3.455	-0.154
Middle	1.279	1.97	-2.288	-2.208	2.768	1.287	0.159	-4.681	1.612	2.655
Far	3.859	2.192	4.988	-6.371	-3.369	1.308	3.838	6.845	-7.448	-4.039
	$\chi^2=101.4, df=8, p<0.01$					$\chi^2=113.6, df=8, p<0.01$				

IV. Discussion

1. Landing positions common to both shooting techniques

Although rebound balls from two-point shots often landed farther from the basket than those of three-point shots, all rebound balls landed within the three-point shot line (6.35 m from the basket) in the present study. It seems safe to conclude that rebounds from three-point shots almost never fall farther from the basket than the shooting position. Kakihara (1990) and Uchiyama (1987) reported the same results.

2. Distance and directions of landing positions common to both shooting techniques

In both shooting techniques, most rebound balls landed in the “middle,” followed by the nearest and farthest spots in every direction. Naturally, the landing positions varied according to where the shots were taken from: most balls shot from the corner landed in the “corner on the opposite side,” followed by the wing and top, which had almost the same number of rebounds; the “corner on the same side” showed the least number of rebounds; most balls shot from the top rebounded back in the top, followed by both sides of the wings and corners; most balls shot from the wing landed in the “wing on the opposite side,” followed by the top, the “wing on the same side,” the “corner on the opposite side” and the “corner on the same side.” Many researchers (Kakihara, 1990; Kim and Ohga, 2009; Ohga and Nagato, 2008; Shibata et al., 2002; Takaki, 1985, 1986; Takei et al., 1984a, 1984b; Uchiyama, 1987; Watanabe and Kobayashi, 2002) reported that except for shots from the top, the ball generally falls on a spot on the opposite side. For example, when a shot is taken from a 45-degree angle on the right side, almost all rebounds will fall in a 45-degree spot on the left side. In addition, balls thrown from the top rebound back to the top. This is mostly caused by the ball being rebounded off the backboard, as occurred for most balls in the present study. If the ball hits the front of the rim, it springs back, if the ball hits the right or left sides of the rim, it rebounds to the right or left side, and if it hits the back of the rim, it springs to the opposite side of the shooting direction. For this reason, although it did not occur as frequently as the ball

rebounding to the opposite side, it is likely that some of the balls landed in directions other than the opposite side of the shooting direction.

3. Differences in the distance of the landing position of rebound balls

The differences in the landing positions between the two shooting techniques based on distance and direction were examined using ORs. In all shots taken from every direction, a significant difference was found in shots taken near the basket, indicating that the percentage of rebounds from one-handed shots was higher than that from two-handed shots. Also, in shots taken from the wing, there was a significant difference between the two shooting techniques in the middle distance to the basket, showing a higher percentage of rebounds from two-handed shots than one-handed shots. In short, balls rebounding from one-handed shots tended to land closer to the basket than those from two-handed shots. In this regard, female players and those with poor ability to shoot from a distance tend to use two-handed shots and male players and those with high ability to shoot from a distance tend to use one-handed shots. Thus, one-handed shooters can shoot high-arcing balls that drop from just above the basket. It is likely that rebound balls land near the basket because they hit the rim after falling from just above the basket. On the contrary, if players with poor shooting ability for distance shoot using the two-handed technique, the ball moves at an angle of about 45 degrees, which is the optimum angle for the ball to reach the basket (Miura et al., 2001). This type of shot causes the ball to land from the side of the basket rather than from above the basket, as is the case with one-handed shots, resulting in the rebounds landing farther from the basket.

4. Differences in the landing positions of the rebound balls expected from distance and direction

As mentioned above, we found the following significant differences between the two shooting techniques: the number of rebounds varied depending on the shooting direction and distance. We examined the differences in the landing spots of the rebound balls expected based on distance and direction using ARs. As a result, significantly more rebounds were found in the “near and top,” “middle and corner on the opposite side” and “far and wing on the same side” when shots were taken from the corner using both shooting techniques. In addition, a significantly higher number of rebounds landed in the “far and corner on the same side” when two-handed shots were taken. When shots were taken from the corner, more rebounds from two-handed shots landed in the “corner on the same side” than those from one-handed shots. It is likely that the ball rebounds back to the same side after hitting the front of the rim because two-handed shooters with poor ability to shoot from a distance cannot throw the ball far.

Also, while many one-handed shots from the top landed in the “near and the top” area, many two-handed shots landed in the “wing on the opposite side” in the “middle.” This may be due to the fact that while one-handed shooters were accurate in adjusting their lateral position, two-handed shooters frequently moved from side to side. It is difficult to balance the strength in both hands when taking two-handed shots and if the balance is off, the arc of the

shot moves from right to left.

References

- 1) Allsen, P. (1967) The rebound area. *Athletic Journal* 38(1): 34, 97-98.
- 2) Bryant, J. (1967) Percentage rebounding. *Athletic Journal* 38(4): 21.
- 3) Hara, S. (1983) Qualitative data analysis. In: Naoi, Y. (ed.), *The foundation of social survey*. Saiensu-sha: Tokyo, pp.205-277. (in Japanese)
- 4) Harada, S. (1986) Harada's basketball techniques. *Nihon-bunka-sha: Tokyo*, pp. 224-232. (in Japanese)
- 5) Howell, D. (1997) *Statistical methods for psychology*. Forth ed. Duxbury Press: Belmont, pp. 159-160.
- 6) Huberty, C. J. (1970) Where the reboundings fall. *Athletic Journal* 51(1): 54, 95-96.
- 7) Ibanez, S., Sampio, J., Gimenez, J. and Janeira, M. (2003) Game statistics discriminating the final outcome of junior world championship matches (Portugal 1999). *Journal of Human Movement Studies* 45: 1-19.
- 8) Kakihara, K. (1990) A study on the falling directions and positions of rebound balls of three point field shots in basketball. *Bulletin of Shokei Junior College* 22: 91-97. (in Japanese)
- 9) Karipidis, A., Fontinakis, P., Taxidaris, K. and Fatouros, J. (2001) Factors characterizing a successful performance in basketball. *Journal of Human Movement Studies* 41: 385-397.
- 10) Kasahara, S. (1987) Understanding basketball using picture and schematic diagram. *Shinsei-shuppan-sha: Tokyo*, pp. 105-108. (in Japanese)
- 11) Kim, J. K. and Ohga, K. (2009) An analytical study of rebound balls in basketball games. *Review of Fuji University* 42(2): 123-131. (in Japanese)
- 12) Miura, K., Miura, S. and Matsuoka, T. (2001) Analysis of jump shot motion in basketball: Comparison between 2-point jump shots and 3-point jump shots. *The bulletin of National Institute of Fitness and Sports in Kanoya* 25: 1-8. (in Japanese)
- 13) Masui, K. (2003) Introduction of meta-analysis. *Shinko-Koueki Co., Ltd. Division of Medical Publication; Tokyo*, pp. 125-127. (in Japanese)
- 14) Moormeier, D. (1971) Percentage rebounding. *Athletic Journal* 52(3): 10-12, 60-62.
- 15) Ohga, K. and Nagato, T. (2008) Forecasting the number of rebounds from shots, goals and turnovers in basketball game. *Bulletin of Teacher Training Research Center, Yamagata University* 3: 13-18. (in Japanese)
- 16) Shibata, M., Takei, M. and Uchiyama, H. (2002) A study on the falling positions of rebound balls of 3 point field shots in basketball. *Bulletin of Institute of Health and Sport Science* 25: 23-29. (in Japanese with English abstract)
- 17) Takaki, R. (1985) Anticipation of direction of a rebounding ball in basketball. *Bulletin of Miyagi University of Education, No. 1, The Division of Humanities and Social Science* 20: 75-85. (in Japanese with English abstract)
- 18) Takaki, R. (1986) Relation between shooting spots and rebounding spots in basketball. *Bulletin of Miyagi University of Education, No. 1, The Division of Humanities and Social*

- Science 21: 97-106. (in Japanese with English abstract)
- 19) Takei, M., Eda, M. and Hidaka, A. (1984) A study of rebounding in basketball. *Journal of Sport and Physical Education Center, University of Tsukuba* 6: 21-28. (in Japanese with English abstract)
 - 20) Takei, M., Kasahara, S., Hata, S. and Shimizu, N. (1984) The experiment of rebounding positions in basketball. *Bulletin of Sports Methodology, Department of Sports Methodology, Institute of Health and Sports Science, University of Tsukuba* 1: 93-99. (in Japanese with English abstract)
 - 21) Tokunaga, K., Maya, K., Sasaki, M., Kawanouchi, Y., Ueno, Y., Yamashita, M. and Sasaki, M. (1997) Comparison of the one- and two-handed shots in terms of long range shots and the successful-shot percentage. *The Reports presented at the 48th J. S. P. E. Congress*. P. 482. (in Japanese)
 - 22) Uchiyama, H. (1987) A study on the falling positions of rebound balls of three point goals in basketball. *Journal of Saitama University, Faculty of Education* 36: 75-89. (in Japanese with English abstract)
 - 23) Watanabe, N. and Kobayashi, T. (2002) An analysis of rebounding in basketball. *Report of Researches Nippon Institute of Technology* 31: 339-345. (in Japanese with English abstract)
 - 24) Wooden, J. R. (1988) *Practical modern basketball*, (3rd ed.), Macmillan Publishing Company: New York, pp. 227-232.
 - 25) Yoshii, S. (1986) *Anthology of teaching basketball 1: the theory and practice of coaching*. Taishukan-shoten: Tokyo, pp. 198-213. (in Japanese)
 - 26) Yoshii, S. (1994) *Basketball I believe*. Taishukan-shoten: Tokyo, pp. 290-320. (in Japanese)

九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学 生涯学習研究センター紀要 執筆要項

生涯学習研究センターでは、論文募集を年1回行う。
論文の投稿手続きは、右図をご参照ください。

1. 発行

九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター（以下「センター」という）の紀要として生涯学習に関連する研究成果を発表するため、論文募集を年に1回おこない、3月末日を発行日とする。

2. 投稿資格

本紀要の投稿資格者は、①本学教育職員、②本学の非常勤講師、③前述以外の者で本紀要編集委員会が特に認めた者とする。

3. 掲載形態

招待論文、総説、原著（実践研究を含む）、書評に分けて掲載する。よって、著者は前もってその形態を明示する。

4. 編集

1) 紀要の編集・発行のために編集委員会（以下「委員会」という）を設ける。

委員会は、センターの運営委員会並びに兼任教育職員から各大学が1名を選出し、委員長はセンターの所長をもってあてる。

2) 投稿論文は査読をおこなうこととし、委員長が指名した査読者に対して委員長名で依頼する。

3) 委員会は査読結果に基づき、投稿論文の掲載の可否を決定する。

5. 執筆要項

1) 原稿内容は、未刊行のものに限る。

2) 原稿内容は、センターで学ぶ人など多くの人が理解できるように、極力専門用語を避け、平易な文章で作成する。

3) 言語は、日本語（原則として常用漢字、現代仮名遣い、算用数字を使用）又は英語とする。

4) 原稿用紙は、A4版の縦置き横書きを原則とし、Microsoft Wordで作成した文書とする。

5) 投稿原稿は、図表・注記・参考文献等を含め、1頁あたり40字×40行の一段組で原則とし、フォントサイズ10.5ptで作成し10枚以内とする。

6) 投稿原稿1枚目には、和文タイトル・著者名・所属・欧文タイトル・欧文著者名・欧文所属を掲載する。なお、原著（実践研究を含む）の場合は、その後に欧文アブストラクト（300語以内）を加える。

7) 欧文アブストラクトは、必要に応じて欧文に精通している者が点検済みのものを提出する。

8) 注は、本文の末尾または参考文献の前に一括して入れ、本文中の該当箇所の右肩に1)、2)のように番号を付す。

9) 参考文献は、必要があればまとめて注の後に番号を付けて列挙する。なお、注及び参考文献は、原則として、著者名、論文名、書名、雑誌名、発行所、巻数、出版年、頁の順に記す。

10) 本文見出し番号の打ち方は、次のとおりとする。なお、大きい見出しには1行あける。

I、II、III、……

1、2、3、……

(1)、(2)、(3)……

①、②、③、……

a、b、c、……

11) 投稿原稿は完成原稿とし、校正は3校を原則とする。なお、校正は必要最小限の訂正・修正にとどめ、改行、改ページにわたる修正は認めない。

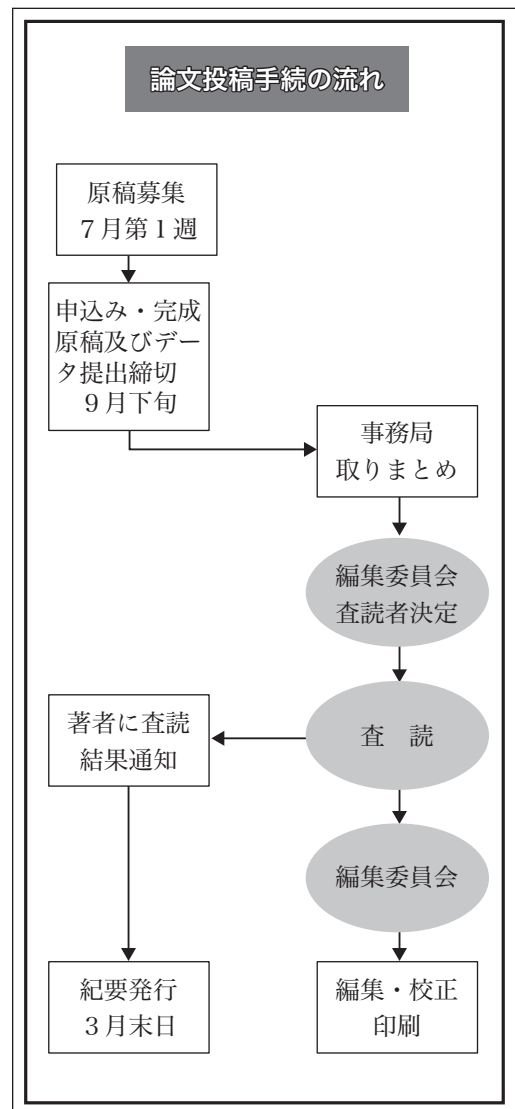
6. 原稿の受付と締切り

1) 原稿の募集案内は、毎年度7月第1週とする。

2) 投稿原稿の申込締切りは指定された9月下旬とし、同時に執筆要領に沿って執筆された完成原稿及びデータをセンターに提出する。

7. 「複製権」「公衆送信権」の行使委託承認について

執筆者は、投稿にあたり、研究紀要公開のために紀要原稿に関する「複製権」「公衆送信権」の行使を生涯学習研究センターが指定する機関・業者に委託することを承認することを前提とする。



九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学
生涯学習研究センター紀要 第21号

編集委員会

《 委員長 Chairman 》

古市 勝也 生涯学習研究センター 所長
九州共立大学スポーツ学部 教授

Katsuya FURUICHI
Director, The inter-University Lifelong Learning Research Institute
Professor, Department of Sports Science, Faculty of Sports Science,
Kyushu Kyoritsu University

《 委員 Committee Member's 》

ダニエル ドローキス 九州共立大学経済学部 准教授

Daniel DROUKIS
Associate Professor,
Department of Economics and Business Administration, Faculty of Economics,
Kyushu Kyoritsu University

河原木 有二 九州女子大学人間科学部 准教授

Yuji KAWARAGI
Associate Professor,
Department of Human Development, Faculty of Humanities,
Kyushu Women's University

松本 禎明 九州女子短期大学子ども健康学科 教授

Yoshiaki MATSUMOTO
Professor, Department of Childhood Care and Education,
Kyushu Women's Junior College

制作協力者：生涯学習研究センター職員
Assistants to the Editor

The Inter-University Lifelong Learning Research Institute staff

〒807-8585 北九州市八幡西区自由ヶ丘 1-8
九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学

生涯学習研究センター

TEL&FAX 093-691-6550 E-mail longlife@kwuc.ac.jp
<http://www.kwuc.ac.jp/longlife/>

投稿に関する規約等は紀要の最終ページに記載されている
本時の記事内容に関しての責任と著作権は著者に帰属する

平成28年3月31日印刷

平成28年3月31日発行

九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学
生涯学習研究センター紀要 第21号

発行者 九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学
生涯学習研究センター

〒807-8585 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-8
TEL&FAX(093)691-6550

印刷所 有限会社 秀文社印刷

〒804-0013 北九州市戸畑区境川二丁目3-3
TEL(093)883-1234

KYUSHU KYORITSU UNIVERSITY・KYUSHU WOMEN'S UNIVERSITY
KYUSHU WOMEN'S JUNIOR COLLEGE

BULLETIN OF THE INTER-UNIVERSITY LIFELONG LEARNING RESEARCH INSTITUTE

No.21

INDEX

■ REVIEW PAPER ■

Work-life-balance for Athletic Trainers Sayaka SHINOHARA..... 1
Junji SHINOHARA

■ ORIGINAL ARTICLES ■

The Lifelong Learning Pioneers (Part 3) Nazario BUSTOS 7
—Nakae Toju and Ito Jinsai—

『Isemonogatari』 49 paragraph And 『Genjimonogatari』 Agemaki 673 number Tanka Masafumi ABE.....17

THE LIFELONG LEARNING CENTER OBJECTIVE : A LEARNING SOCIETY Katsuya FURUICHI27
— BECOMING THE COMMUNITY' S CENTER Nazario BUSTOS

A Draft of Lecture Notes for Public Lectures “Regional Development Fumihiko USHIJIMA37
in so called Yanagita Folklore.”

READING YAEKO NOGAMI AS A LIFELONG LEARNING ACTIVITY..... Keiko OGIHARA.....47

Study of three-dimensional ballistic trajectory simulation system for coaching..... Akinori NAGATA55
Ken NAGAMINE
Tsuyoshi KAWAZURA
Mitsuo UNO

Differences in the landing positions of rebound balls between one-handed Tsuyoshi KAWAZURA... 65
and two-handed three-point shots in basketball
Akihito YAITA
Ken NAGAMINE
Akinori NAGATA
Yasushi OHYAMA
Osamu AOYAGI

2016年